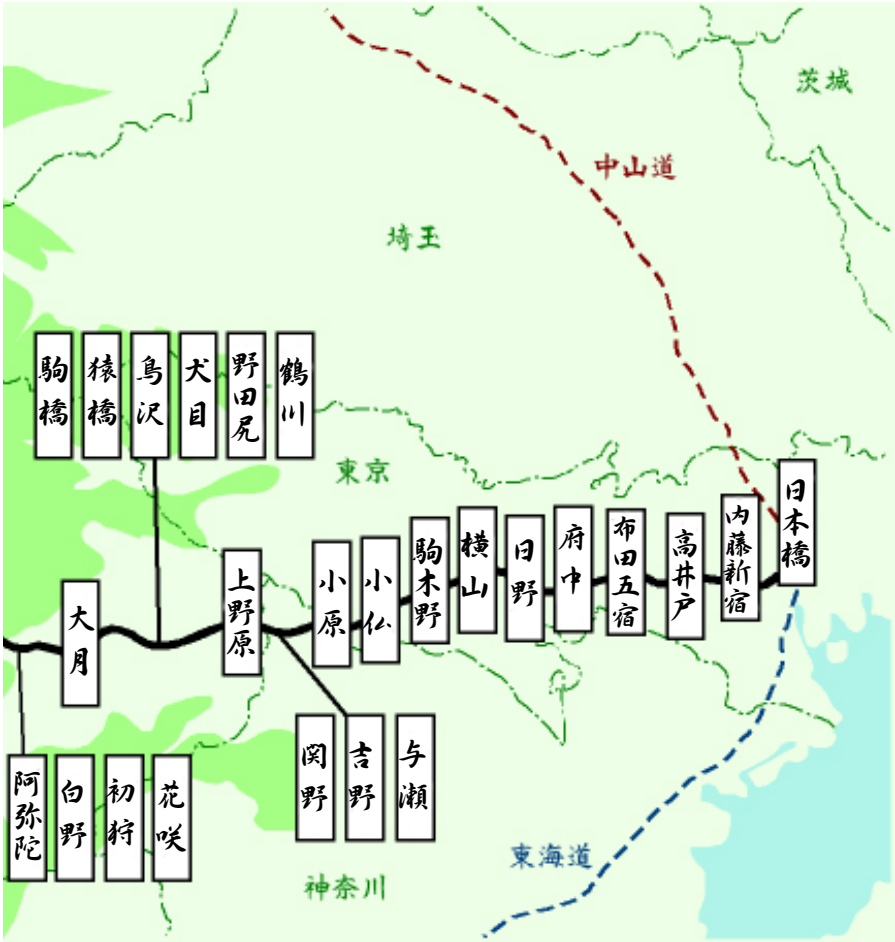
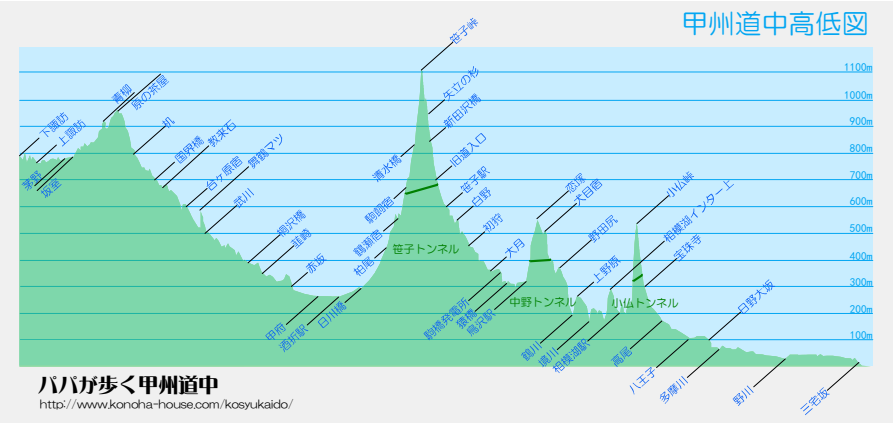
# 甲州街道を歩く【下】

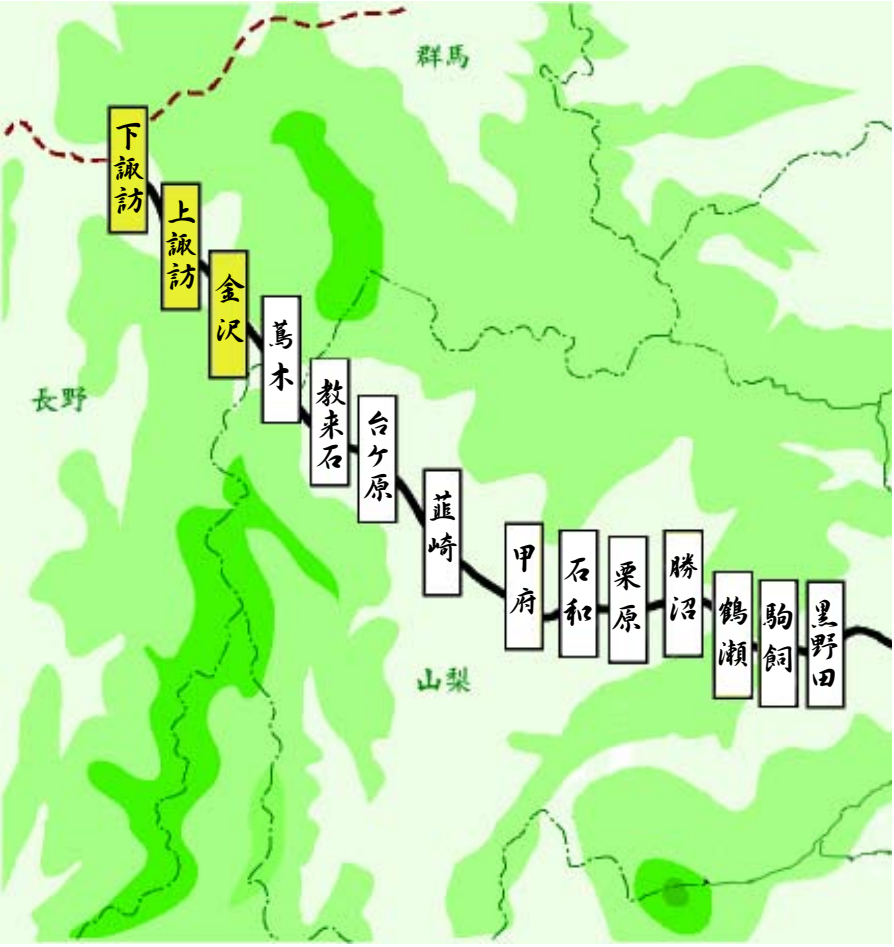
（金沢宿から下諏訪宿）

# 甲州道中の宿（しゅく）

日本橋＝＝内藤新宿＝＝下高井戸・上高井戸＝＝国領・下布田・上布田・下石原・上石原＝＝府中＝＝日野＝＝横山（隔月で八日市）＝＝駒木野・小仏＝小仏峠＝小原・与瀬＝＝吉野＝＝関野＝＝上野原＝＝鶴川＝＝野田尻＝＝犬目＝＝下鳥沢・上鳥沢＝＝猿橋＝＝駒橋＝＝大月＝＝下花咲・上花咲＝＝下初狩・中初狩＝＝白野・阿弥陀海道・黒野田＝＝笹子峠＝＝駒飼・鶴瀬＝＝勝沼＝＝栗原＝＝石和＝＝甲府柳町＝＝韮崎＝＝台ヶ原＝＝教来石＝＝蔦木＝＝金沢＝＝上諏訪＝＝下諏訪（中山道下諏訪宿）




甲州道中高低図
1100m
1000m
900m
800m
700m
600m
500m
400m
300m
200m
100m
笹子峠
矢立の杉
新田沢橋
旧道入口
笹子駅
白野
初狩
大月
猿橋
大日向
野田野
上野原
中野トンネル
小仏トンネル
川山峠
柏鶴湖インター上
宝珠寺
白野大坂
三宅坂
野川
多摩川
八王子
高尾
相模湖
鳥沢
藤野
駒橋発電所
鳥沢駅
猿橋
桂川
笹子トンネル
清水橋
駒飼橋
鶴瀬橋
柏尾
鶴瀬
勝沼
栗原
石和
甲府
韮崎
台ヶ原
教来石
舞鶴マツ
台ヶ原宿
笛川
横沢橋
韮崎
赤坂
白川橋
中村
酒折駅
石和
栗の茶屋
峠
国母橋
教来石
下諏訪
上諏訪
茅野
坂室
 パパが歩く甲州道中
http://www.konoha-house.com/kosyukaido/


群馬
長野
山梨
下諏訪
上諏訪
金沢
葛木
教来石
台ヶ原
韮崎
甲府
石和
栗原
勝沼
鶴瀬
駒飼
黒野田

# 目次


第二十回　青柳駅～茅野駅　平成二十五年七月十八日（木）……1
第二十一回　茅野駅～上諏訪駅　平成二十五年九月十九日（木）……26
第二十二回　上諏訪駅～下諏訪駅　平成二十五年十月十七日（木）……44
諏訪家系図……61
旅人の感想集……62
相原教男……63　浅見憲一……63
伊藤泰弘……63　宇山治男……64
折本文夫……64　嶋崎　猛……65
竹島久雄……65　中島征雄……66
中田信義……66　前北勝司……67
三浦繁雄……67　八木閲三……68
軌跡地図帳……69
第1回……70　第2回……72　第3回……74　第4回……76　第5回……78
第6回……80　第7回……82　第8回……84　第9回……86　第10回……88
第11回……90　第12回……92　第13回……94　第14回……96　第15回……98
第16回……100　第17回……102　第18回……104　第19回……106　第20回……108
第21回……110　第22回……112　諏訪大社関係地図……114

第二十回　実施日　平成二十五年七月十八日（木）
青柳駅～茅野駅　約八粁　累計百九十九粁
宿　金沢宿

☆集合場所・時刻　JR八王子駅四番線
甲府寄りNEWDAYS付近午前六時十五分

八王子 6:30 ＝＝小淵沢 9:05 ＝＝ 9:17 青柳
新宿 7:00 スーパーあずさ1号＝八王子 7:29 ＝ 8:54 小淵沢
で上記列車に乗れる。特急を利用の場合は要報告。

【第二十回甲州道中行程】
青柳駅～泉長寺～金沢宿～本陣小松家跡～馬繋ぎ石～宝暦八年の道標～はりつけ場～枡形～権現神社～木船の一里塚～小早川橋～南無阿弥陀仏碑～秋葉山常夜灯・石仏群（宮川坂室交差点）～酒室神社～茅野村の一里塚～御柱祭上社木落し坂～貧乏神神社～三輪神社・鈿女神社～上社大鳥居～姥塚古墳～茅野駅＝＝（タクシーで諏訪大社上社前宮参拝、諏訪大社上社本宮参拝、達屋酢蔵神社参拝）＝＝茅野駅（解散）

◇六月は雨の為、街道歩きが初めて中止になり、順延になった。

二ヶ月ぶりに何もない青柳駅に降りる。駅前広場の地図を前にして中島さんの概略説明を聞く。途中電車から稲刈りの様子を見てきたがこの辺は遅いようだ。

◎金沢宿
江戸日本橋から数えて四十四番目の宿。
本陣一軒、旅籠十七軒、総家数百六十一軒
人口六百二十二人（男三百三十五人、女二百八十七人）、
宿場の長さ八町

金沢宿はもと「青柳宿」と呼ばれ、現在の金沢の北西、宮川を渡った辺りから権現神社の前で国道20号線を横切り、平行する形で約四百米にわたって直線的に造られていた。しかしこの

地は宮川の氾濫を蒙ることが多く、大火にも見舞われたので、現在の地に移って「金沢宿」と改称したと伝えられている。『村役人の記録』に「慶安四年（1651）青柳宿を金沢宿ト相改メ候」とあり、寛文五年（1665）の宗門人別帳には「金沢宿 百二十二戸」とある。

この宿は蔦木宿と上諏訪宿の間にあり、伊那道（高遠道）を通って高遠や飯田に通じる道の分岐点でもあったので、伝馬地として当初から計画的に造られた。町並は上町・中町・下町に分けられ、宿の入口にはそれぞれ枡形が設けられていた。この間六町は道幅五間に造られ、道の中央と両側の家並の裏には三尺の用水汐（せき）が作られた。

◎泉長寺（山号＝金鶏山）

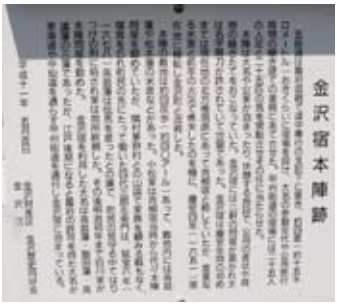
境内には御伝馬石（おてつき石）、墓地には金沢宿本陣問屋・小松三郎左衛門【延宝四年（1676）十一月三日没・・・延宝六年】の墓がある。おてつき石は、当時、殿様が宿場往来の時、宿役人がこの石に手をついて宿役人である旨を言上したと云われ、当時は上町に置かれていた。

◎本陣小松家跡

本陣は宿の中央西（左）側にあり、文化二年（1805）の『御分間御絵図御用宿方明細書上帳』によれば「御本陣問屋兼帯白川嘉右衛門　建家坪凡百拾六坪、玄関付ニ而門構無之候」とある。本陣の敷地は約四反歩（約40アール）あって、敷地内には高島藩や松本藩の米倉などがあった。

この本陣は上の問屋を兼ねていて、道をはさんだ樋口芳直氏

宅が下の問屋を務め、毎月十五日交代で継立の業務を行っていた。小松家は青柳宿当時から代々本陣問屋を勤めていたが、隣村茅野村との間で山林の所有をめぐる争いで家族を顧みる暇もなく、寝食を忘れ村民の先頭にたって藩に抗議、直訴した四代三郎左衛門は、延宝六年十月二十五日、高島藩は伝馬を怠ったとの廉で、町民の見守る中で磔（はりつけ）の刑に処され、家は闕所（けっしょ）断絶した。（闕所とは江戸時代、死罪・遠島などの刑に加えて、その罪人の領地・財産をも没収する刑。）その後明治初年まで白川家が本陣問屋を勤めた。「明治天皇金澤




御行在所碑」がある。

街道を進むと、道の左右には間口が広く、軒が低く格子の美しい町屋が残り、宿場の面影がある。

◎馬繋ぎ石

右側の馬方宿だった家の前に「馬繋ぎ石」が置かれ、左側の民家の前にも小さな馬繋ぎ石が残されている。

◎宝暦八年の道標

馬繋ぎ石を過ぎてすぐ、右の小径を入ると追分にあったと思われる「道標」がある。「左たかとう道」、裏には「宝暦八年」

とある。少し進むと左手に小堂があり、中に石の如意輪観音が祀られている。ここはかつての小松三郎左衛門が処刑された「はりつけ場」である。「如意輪観音の由来は地蔵尊が建てられていたが、いつの頃か水害にあい流失したものと思われる。寛政十二年(1800)、下町の人々により祀られていた如意輪観音をその対象として供養が行われ、今日に至っている。」

◎はりつけ場

信州諏訪藩（高島藩ともいう）領、諏訪郡金沢宿本陣問屋四代目当主、小松三郎左衛門はここで磔（はりつけ）になり闕所（けっしょ）に処されて、土地も延宝六年(1678)に諏訪藩の所有となった。百年後の安永二年(1773)、供養のために子孫が地蔵を建立。その後二百年を経た明治十三年(1880)には、金沢側の勝訴判決も出された。土地の人は小松三郎左衛門のことを「みょうり様」と呼んでいる。

◎枡形

道はゆるやかにカーブし宮川の金沢橋を渡るが、昔の橋は少し右にあって旧道は宮川の手前で右折、枡形をなして矢ノ口交差点に向かっていたと考えられる。金沢橋の袂には「水神明王、地蔵、魚供養、道祖神」等十数基の石仏群が祀られている。橋を渡り右折、枡形を通り、矢ノ口交差点を過ぎると権現神社がある。

◎権現神社（権現の森）

この辺りはかつて甲州街道の「青柳宿」だった。相次ぐ宮川の氾濫と火事による消失で「青柳宿」は「金沢宿」に移転した。

説明板には、「権現の森　茅野市指定史跡（昭和五十八年四月指定）

江戸から甲府までの甲州道中（甲州街道）が下諏訪まで延長されたのは慶長十五年（1610）ごろである。そのころここは青柳宿といい、この権現の森の北西に家が並んでいたが、たびかさなる宮川の洪水や慶安三年（1650）の大火を機に南方の現在地へ移転し、翌四年に金沢宿と宿名を改めた。この宿場は、山浦方面や松倉峠（金沢峠）を越して高遠方面に通ずる分岐点として、交通上、物資の流通上重要な所であった。文化二年（1805）に金沢宿より幕府に供出した『御分間御絵図御用宿方明細書上帳』に「宿持鎮守　除地　拾六間四方金山権現森壱ヶ所石御祠御座候　但江戸ヨリ右之方往還二御座候」とあり、権現の森と石祠について報告がされている。

参道正面に祀られているのがこの石祠で、建立は承応三年（1654）である。青柳宿が移転して金沢宿と名を改めた三年後のことである。金山権現は、祭神は金山彦命で、山の神である。武田信玄の開発した金鶏金山と関係が考えられ、当時はすでに祀られていたのではないかと考えられる。

石祠の左右には、江戸中期ころより庶民の信仰として祀られた御嶽座生大権現・庚申・矜羯羅（こんがら）童子と制吒迦（せいたか）童子の脇侍をともなう不動明王・摩利支天・甲子・秩父坂東四国巡礼供養塔・津島牛頭天王・大六天・如意輪観音・蚕玉大神・道祖神祠・石燈籠など大正期までの石造物二十数基が祀られている。

また、石祠建立のころの植樹かと思われるサワラの古木が残存し、森に趣を添えており、信仰の場として、また憩いの場として今も江戸時代の名ごりを留めている貴重な場所である。

昭和五十九年一月　　茅野市教育委員会」

とある。

◎信玄のつるし堀跡

今の青柳集落の中程の交差点を左（西）に上り（この道はかっ

ては金沢峠を越えて伊奈・高遠へ抜ける重要な街道)、左千軒平の標識がある分岐(標識はないが右は金沢峠)を左に進むと『信玄のつるし掘跡』の案内板があり、少し上って行くと幾つかの「つるし掘(露天掘り)」がある。大小二百余りの採掘跡があるとのこと。露天掘りが深くなったときに、鉱石をつるし揚げたところから、つるし掘の名があるとのこと。つるし掘の案内板を更に先に進むと高層湿原・千間平に着く。この付近は、金の鉱脈が鶏の形で埋蔵されているという伝承がある金鉱である。永承(1558)のころ、信玄が甲州金二十四万両を掘ったと云われている。発掘は昭和まで続いたとのこと。

権現の森から約一粁先の左側、こんもりとした林の外れの宮川の対岸に「一里塚跡」がある。

清水橋バス停(HOTEL 虹色のメルヘンの看板あり)から左に入り宮川を渡り、ホテル入口先を右折、田圃に出たら最初のあぜ道を右折。川に近づいた右の小山に木船の一里塚がある。

◎木船の一里塚

江戸から四十九里。説明板には

「一里塚

徳川家康が江戸に幕府を開き交通政策の一貫として慶長六年(1608)ころ日本橋を基点に五街道を制定し一里ごとに塚を築かせた。甲州街道は当初甲府までであったが慶長十五年ころ下諏訪まで延長し中山道と接続させた。茅野市教育委員会はここに「江戸日本橋より四十九里」(五十里ともいわれる)と刻んだ碑を建てた。塚は甲州街道制定当時は両塚であったが、明治十八年の道路改修や明治三十八年の中央線の線路敷設工事などによって塚は取り去られた。また近年この付近の耕地整理が行われたために当初の位置とは変わっている。

平成十一年五月吉日　金沢財産区　金沢区　金沢歴史同好会」

とある。

清水橋バス停から三百米程進むと左に古い常夜灯と四本の御柱がある小さな祠があり、木船の集落に入る。木船の交差点の

右に浮彫されたお地蔵様が祀られ、右の奥に道を跨ぐ形で立っている大きな火の見櫓がある。その先、カー用品販売店の手前の右を戻るように上り左にカーブするところに大きな石碑があり、ここにも細い御柱が立っている。すぐJR中央線を越す。越したら線路沿いの道を進む。旧道は先ほど右に曲がった地点の少し先から斜めに線路を横切るのだが中央線が出来た時に消滅した。変電所を過ぎ、大きな陸橋をくぐり、宮川に沿って進む。

◇ここで大きな陸橋の下で休憩する。日差しは強いがこの陸橋の影は爽やか、水道、自販機もあり、一息入れて出発する。

小早川橋を渡り、三百米程行くと左に「南無阿弥陀仏碑」がある。すぐ先の早川橋を渡ると宮川に沿って左折し、JRのガードをくぐって行くと「宮川坂室」の交差点で国道20号線に合流、右側に秋葉山常夜灯と出羽三山、三十三夜塔等の石仏群がある。

国道を進み「弓振川」を渡り「坂室」交差点を右折すると「酒室神社」がある。

◎酒室神社

説明板には

「市指定史跡　酒室神社　　昭和四十四年十一月指定

酒室神社は、御射山（みさやま）祭りに濁酒（どぶろく）を作り、山の神に供える前夜祭をとり行った神聖な地に祀った神で、酒解子（さけとくね）之神を祭神とする。

酒室は御射山の入口に位置し、御射山は通称「はらやま」で、諏訪明神のみ狩神事の祭場である。年四度のみ狩が定められ、これを「みさやままつり」または「はらやまさま」と呼ぶ。

四度のみ狩とは、押立み狩・御作田み狩・穂屋のみ狩・秋尾のみ狩である。このうち最も盛大な神事が穂屋のまつりで、旧暦七月二十六日、現在は八月二十六日に行われている。武術を奨励した昔は、諸国から守護・持頭・代官職等が多数参加し、祭の催しには、的矢・流鏑馬・角力等が行われ、露店や芸人が集まり、そのため槍隊が出て警護にあたったと云われる。参詣人をかぞえる大草（すすき）さずけの儀が行われ、神事が終わると一同勢揃いして弓振川で弓を清め、御射山にのぼりみ狩が行われた。

酒室神社にて第二十回参加者記念撮影
立ち人（竹島、中田、八木、前北、伊藤）
座り人（嶋崎、宇山、中島、折本、相原、三浦）

神殿は文政八年（1825）大隅流の建築家矢崎玖右衛門の建築したものである。なお境内の東の隅に「雨降り塚」と呼ぶ古墳があり、明治三十四年に発掘された。

昭和五十二年三月　茅野市教育委員会」とある。

◇酒室神社で昼食を取り、記念撮影をして移動する。

中央自動車道をくぐり「東京から192km」の標示の直ぐ先右の階段を上ると「月山・羽黒山・湯殿山大権現」の石碑と庚申等の石碑がある。

◎茅野村の一里塚

石碑の先、新田中バス停先を右手に入ると右手に男女双体道

祖神が祀られており、すぐ先左手の細道を入ると江戸から五十里目の一里塚「茅野村の一里塚跡」の標柱がある。『宿村大概帳』には「木立松但、左右之塚共茅野村地内」とある。

「宮川交差点」からは、かつての茅野村で間宿であった。間宿茅野村は金沢宿から一里十町、上諏訪へ二里四町のところにあり、慶長のころより街づくりがなされていたと考えられる。

茅野村は成立当初より延宝初期までは「千野村」と記されているが、同村の宗門人別帳によれば延宝六年(1678)以降は「茅野村」と記されている。

甲州街道は三叉路の宮川交差点の真ん中の道を行くが、右に行きJRのガードをくぐってT字路を左に道なりに上って行くと「御柱祭上社木落し場」がある。

◎御柱祭上社木落し坂

上社の御柱祭で見落とせないものの一つに宮川長峰木落坂の「木落し」がある。最大斜度二十七度、長さ約三十六米の坂を「めどでこ（目処梃子）」に大勢の若衆を乗せたまま、一気に急坂を下る。下社と上社とでは趣が異なり、下社木落しが勇壮盛大であるのに対して上社木落しは「めどでこ」がいかにV字のまま落ちるかという「美しさ」が重視されているようだ。

（注）下社の木落しは最大斜度三十五度、長さ百米、「めどでこ」は無い、

◇ここは木落し公園として以前の御柱を展示してある。現物は平成十六年の大祭本宮四の御柱と標識がある。

御柱祭については以下を参照。

◇◇◇

「めどでこ」とは、上社の御柱のみ有り、御柱の前後に角のように取り付ける棒のことで、ひとが乗って曳行される。木の皮を剥ぎ、足場となる縄を巻き、結びなどで繋ぎ、更に上から玉縄で何重にも巻き補強してある。メドデコの天端は三階と同じくらいの高さになり、端(はな)に乗っている時は、追い掛け綱（柱の後ろに付けてある綱）を指示し、傾きが悪くなれば（V字が傾けば）綱（命綱）を絞ってもらい、左右に練る時の音頭を取る。

御柱に向かって右が男メド、左を女メドと呼び、命綱が結ばれている。

おんべは御柱祭で人々が手にしている、棒の先に房の付いたもの。一種の御幣のことで、神が宿ると言われ、氏子や木遣り衆はこれを振って気勢をあげる。房は、エゾマツやトウヒをカンナで薄くスライスしたもので、頂点部分から垂らす。一見ビニール製のように見えるが、実は職人による手作りの木製で、カラフルに着色されている。

木遣り衆の持つものは、房の上に諏訪大社の御札を備えた立派な大おんべで、その房数は二百五十枚、長さは一・五米もあり、着色はされていない。御柱に乗る若い衆のメド乗りおんべは七十糎程、房だけのシンプルな形で、主に黄色や赤の単色に着色されたものを使う。メドデコの上に、鈴なりになっている若い衆が、おんべを振っている姿が、実に美しく勇壮に見えるのが、上社の御柱の特徴である。一般の曳き子は、六十糎程の三色に着色されたカラフルなおんべを持っている。

上社、下社の違いは上社にはメドデコがあり下社にはない。下社は柱の先端の角を丸く削る。

ドジョウ口(くち)と呼ばれている。曳綱には男綱と女綱があり、上社山出しでは御柱に向かって右側が男綱、左が女綱で、里曳きでは左右が入れ替わる。下社は上社と正反対となり左が男綱、右が女綱である。

◆上社【山出し】

四月の初旬に、茅野市原村境の「綱置場」から茅野市安国寺の「御柱屋敷」までの御柱街道と呼ばれる約十二粁を本宮一之御柱、前宮一之御柱、本宮二之御柱、前宮二之御柱と順に最後は前宮四之御柱と曳行する。途中の見所は「穴山の大曲」、「木落し」、「川越し」がある。

〔穴山の大曲〕

御柱街道は、茅野市穴山地区に差し掛かると、急に道幅が狭くなる。大きく張り出したメドデコの先端が道の両側の民家の軒先に触れないかと気にかかる頃差し掛かるのが第一の難所、穴山の大曲である。道が狭い上に左に直角に九十度曲がっている。急カーブの為、巨大な柱をうまく操ってスムーズに通過させることは至難の業。木遣りの声を合図に、男綱、女綱を曳き、御柱の方向転換を司るテコ衆は梃子棒をかませ、メドデコが民家等を損傷させないよう御柱はゆっくりとこの難所を通過して行く。一日目の行程を終えた御柱は、子之神で一泊するのが習わしであったが、最近は一気に木落し坂まで曳くことも多いようだ。二日目は本宮一から前宮二まで、三日目は本宮三から前宮四までを執り行う。

〔木落し〕

第二の難所は、大勢の氏子若い衆をメドデコに乗せたまま、御柱を一気に最大斜度二十七度、長さ約三十六米を落とす木落し坂。祭りの中で最も危険な行事である。下社と上社とでは趣が異なり、下社木落しが勇壮盛大であるのに対して上社木落しはメドデコがいかにV字のまま落ちるかという「美しさ」が重視されているようだ。木落しは、男たちの度胸の見せ場であると同時に、綱係や梃子衆の技の見せどころ。大歓声の中、御柱は技と度胸によって坂を下る。

その後、JR中央本線の線路の桁下を通す為に一時的にメドデコが抜かれ、その先の国道20号線は交通を遮断して横断する。　昔は中央本線の列車を止めて、線路上を横断していた。

今も当日現場を通行する列車は線路内に人が立ち入る危険があるため徐行する。

〔川越し〕

木落し坂を過ぎると待ち受けるのが、山出し最後の難所、宮川の川越しである。御柱を宮川の雪解け水で洗い清める意味があるといわれ、幅約四十米の宮川の水温十度以下の身をを切るような冷たい流れに、我先に飛び込む姿は壮観。

御柱を曳く綱を渡し、メドデコを左右に振りながら静かに水に入る柱、水しぶきも豪快に一気に落ちる柱、皆ずぶ濡れになりながら川を渡る。

川越しを終わった八本の御柱は、安国寺の御柱屋敷に曳き据えられ、五月の里引きまで安置される。

前記の木落しと川越しは場所が広く、見せ場でもあるために曳行用の片側七～八人乗りのメドデコではなく、十～十二人程乗れる大きなメドデコに付け替える地区も多い。しかしその巨大さゆえに衝撃で折れるなどの事故もしばしば起こる。

◆上社【里曳き】

山出しから一か月、御柱屋敷から出た御柱は、大勢の氏子と見物客の中を、各社に向かってゆっくりと進む。前宮は御柱屋敷から一粁弱、本宮は二・五粁の道程である。

御柱の曳行日程は、前宮は二日間、本宮は三日間で、曳き出す順は本宮一、二、三、四と本宮の御柱を曳き出し、次いで前宮一から四まで順に曳き出す。途中の見所は「お舟の御柱迎え」、「御柱行列」、「前宮の階段」、「本宮三之鳥居、二之鳥居と階（きざ）橋（はし）」「建御柱」がある。

〔お舟の御柱迎え〕

安国寺の御柱屋敷を御柱が出発する頃、本宮からは神職や、「お舟」と呼ばれる神輿を担いだ白丁姿（はくちょうすがた）の山作り衆らが行列を作って御柱を迎えに出発し、途中で本宮一と出会い、迎えのお舟を一行を先頭に本宮を目指す。

〔御柱行列〕

里曳きは、山出しの豪快さから趣を変え、華麗で豪華な昔ながらの行列が特徴である。騎馬行列（お騎馬）や長持ち、花笠踊り、龍神の舞などが繰り出して御柱行列を盛り上げる。

騎馬行列は江戸時代の御柱警護が始まりとされ、往時の面影を色濃く残している。長持唄や長持甚句が唄われる長持行列も伝統的な姿を披露してくれる。

〔前宮の階段〕

前宮の御柱は前宮前の信号から左に曲がり、前宮の鳥居をくぐって建御柱の場所まで行く。

その際三百米の階段を一気に上って行く。また前宮三、前宮四のあたりになると暗くなることも　あり、提灯や行燈などを持つこともある。この道は非常に狭いため、曳き子や氏子が御柱などに挟まれる事故もしばしば発生する。

〔本宮三之鳥居、二之鳥居と階橋〕

本宮の御柱は諏訪市に入り、上社本宮まで向かう。その間に二つの鳥居がある。若宮前にある本宮三之鳥居と本宮東参道の本宮二之鳥居である。その二つの鳥居は幅が狭く高さも低いため、メドデコをぶつけないように曳行する必要がある。特に本宮二之鳥居には階段状になった階橋があり、御柱が跳ね上がらないように慎重に曳行され境内に入って行く。

〔建御柱〕

御柱を各社の境内に建てることを建御柱という。本宮・前宮に曳き着けられた御柱はメドデコを　外し、柱の先端を三角錐状に切り落とす「冠落し」を行って、御神木としたの威厳を正す。

冠落しが終わった御柱にワイヤーやロープを付け、掛け声に合わせて車地が巻かれると御柱はゆっくりと立ち上がり、やがて直立。先端に乗る氏子の手によって長さ一・五米の大御幣が打ち付けられると奥山のモミの大木は神となる。翌日に御柱の根元を大木槌で叩いて固める御柱固祭が行われ、仮見立てから二年に及んだ柱の曳き建てが幕を閉じる。

下社関連は後述。　信州諏訪　御柱祭公式ホームページほかより

◇◇◇

◎宗湖寺

丸井伊藤商店の前の説明板には

「諏訪家（藩祖）と諏訪御寮人【井上靖・由布姫、新田次郎・湖衣姫】ゆかりの『宗湖寺』

宗湖寺は諏訪家の藩祖諏訪頼忠公〔永明寺殿芸州太守光山宗湖大庵主〕の菩提寺であります。天文十一年惣領家諏訪頼重が武田氏に滅ぼされて以来、雌伏四十年上社大祝職（おおほりしょく）にあった頼忠公【頼重の従弟】は、密かに再興の機を狙っていましたが、天正十年武田氏が天目山に滅び、織田信長も又本能寺の変に討滅されるや、いち早く兵を挙げ再び諏訪の地を旧領に復しました。しかし時勢の遍歴は更に厳しく、やがて豊臣の治世となり、頼忠は徳川氏に属し譜代の大名として　関東

に移封となり、およそ十年の間武州・上州と彼の地にあったのでありますが、慶長六年関ヶ原の戦功により、再び故国諏訪の地に復帰したのであります。

帰国後四年、頼忠はすでに七十一歳を数え、慶長十年八月二十一日その寿を全うして卒去。後、寛永七年故あった永明寺は破却され、その後宮川の地に移り、現在に至っています。

宗湖寺後方にある上社木落しは御柱祭の見せ場で諏訪の平野を見渡せる場所です。武田信玄諏訪侵攻の時、上原城が見え、諏訪勢の動きが見通せる木落しに陣を張り諏訪頼重は上川を挟んで犬射原に陣を構えたが軍勢の違いから、退いて上原城を焼き、ついに桑原城で囚われ、甲府に送られ自害しました。井上靖小説『風林火山』の中にある宮川部落とは、まさにこの辺りです。」とある。

宗湖寺から南東に細い道を少し戻り県道一九七号線（甲州街道旧道）に出、右折し直ぐ左の駐車場に「明治天皇茅野御小休所跡」の碑があり、駐車場の奥に三輪神社と鈿女（おかめ）神社がある。

◎「明治天皇茅野御小休所跡」の碑

説明板には

「ここは、明治天皇が三重・滋賀・京都など巡幸された際に、御

小休所に充てられた五味邸の跡である。天皇は、明治十三年六月二十三日午後二時過ぎ、五味邸に御着きになり、約一時間お休みになった。お供には伏見宮、太政大臣三条実美、参議伊藤博文、同寺島宗則などのほか、勅任官、奉任官、判任官、及び警固の者まで加えるとその数三百人とも五百人とも伝えられている。お迎えした給仕には五味又三、大島総十郎、五味嘉与助が当たり、天皇及びおもだった供奉者には、宗湖庵の井戸から運んだ水を用いてお茶を差し上げたという。」とある。

また、丸井伊藤商店（味噌を製造直売している）前にも「明治天皇御小休所」の説明板がある。その店の一番奥に「貧乏神神社」がある。三輪神社・鈿女神社の方が手前にあるのだが、まず貧乏神神社を参拝しその後鈿女神社を参拝しないと鈿女神社で授かった福を貧乏神神社で叩きだしてしまう。

◎貧乏神神社

焼味噌好きの貧乏神様が味噌蔵にご降臨された。参拝方法がユニークだ。

「ご参拝方法

一、まず豆代百円を壺にいれる。

二、次に、貧乏神様の前にあるご神木を・貧棒・という名の棒にて三回叩く。

三、叩き終わった後は・貧棒・を置き、今度はおもむろにご神木を三回蹴飛ばす。（散々で貧乏が逃げるというシャレです。）

四、最後に豆をご神体に向かって、一回なげつける。

以上参拝時に「貧乏飛んでけ」とか「ちきしょうめ」など声を出しながら叩いたり、蹴ったり投げたりすれば尚一層の効果

あり。

※くれぐれも手を合わせて拝まないように。

※叩く時・貧棒・の逆襲（跳ね返り）が危険ですので、あまり勢いをつけないようにお願いします。

御帰りには転福味噌をお持ちください。」

◎三輪神社・鈿女神社

★三輪神社（三輪社）の拝殿は舞台のようで屋根は前後に長い他では見られない造りである。

説明板には

「市指定文化財　三輪神社　昭和四十二年二月指定

三輪神社は久寿年間（約八百十年前）に、大和の国三輪村の三輪神社をこの地にお迎えしたものと伝えられ、宮川茅野・西茅野両区の産土神である。祭神は大国主命・稲御魂（うがみたま）命・櫛玉命である。本殿は文化元年（1804）三月に矢崎玖右衛門により建築され、拝殿は文政三年（1820）に建築されたが、明治四十一年に改築している。本殿の彫刻は、大隅流をくむ矢崎玖右衛門の代表作である。江戸時代の建築の、彫刻に技巧をこらした傾向がよく現れている。題材はすべて中国の歴史物語にとり、北面には『蜀の三傑桃園に義を結ぶ』の図、東面は『黄石公張良に兵書を授くる』の図、南面は『玄徳赤兎馬に鞭打って潭渓を越ゆる』の図である。欅を材として、半肉彫で、空間構成もよくととのい、香高い芸術作品である。

昭和五十年一月　　茅野市教育委員会」

とある。

★鈿女神社（おかめじんじゃ）

説明板には

「鈿女神社の祭神は古事記や日本書紀に書かれている天照大神が天岩戸に隠れたとき岩戸の前で舞を舞った『天鈿女命（あまのうずめのみこと）』で後には猿田彦神と共に『道祖神』として祭られるようになりました。『天鈿女命』の面は狂言の面としていわゆる『おかめ面』となりこれが『ひょっとこ』と一緒におかしく踊られるようになりました。この『おかめ』を祭る神社は諏訪に三社あり、『長持ち』に必ずおかめ面を担ぐ習わしになっています。昭和八年当時の商業者が商売繁盛、家内安全、厄除け縁結び祈願のため、安曇の松川より分社して以来、地元宮川商業会がお守りしています。福の神としておかめ様があり『笑う門には福来る』として、心の明るさと癒しを与えてくださいます。鈿女の字を分けて見ると金田女神社となり、お金の貯まる神社として縁起もよく人々に愛されております。

宮川商業会　宮川街づくり協議会」

とある。

旧道を進み御柱が通る上川橋交差点の先の上川に架かる上川橋を渡る。橋から上流右側に木落し場が見える。

◇茅野駅に到着して今回の街道歩きは予定通り、完了する。

ここからはタクシー三台による神社巡りになる。

「御柱屋敷」に行きたいと言うと運転手さんは「何もないですよ」と返ってくる。それでも行きたいからとスタートする。

◎御柱休めの御柱屋敷

諏訪大社上社の御柱祭で山出し最後の見せ場である宮川渡しの「川越（かわご）し」を終えると、各御柱はここ御柱屋敷に引きつけられる。その到着と、同時に一同は、御柱山の御小屋に向かい「山

の神様お帰りだ皆様ご無事でおめでとう」と御幣を振って「山の神帰し」の木遣歌をうたうを例としている。本宮四本、前宮四本の御柱は、決まり通りに引き揃えられると周囲に注連縄を張って、御柱休めの神事を行い、一カ月後の五月の「里引き」を待つのである。

安国寺史友会

◇標識には以上の説明がされていたが本当に、何もなかった。次にこれから巡る諏訪大社の概要が説明されている

◎諏訪大社

信濃国の一之宮で、わが国最古の神社の一つで四社から成り立っている。全国に分社壱万社余りを数える。祭神は建御名方神、妻神八坂刀売命である。諏訪湖の南に上社、北に下社があって対峙する。本来、神がたてまつられる本殿がなく、かわりに下社秋宮ではイチイの木を、下社春宮ではスギの木を神木とし、上社（本宮、前宮）は御山（守屋山）を神体としてたてまつる。

歴史は古く、延喜式神明帳（西暦927）にもその名が載っている。祭神建御名方命は古事記の国譲りの場面で、大国主命の息子として最後まで抵抗し、諏訪の地まで逃げてきて、幽閉された神である。諏訪湖は一面の葦の原、ここを開拓した神として崇められている。古来諏訪大明神・諏訪南宮大明神・諏訪南宮正一位法性大明神などと称した。

建御名方命は、大国主命の第二子で、兄事代主命と共に大国主命を助けて、国土経営の大任に当たられた。昔は狩猟の神・農業の神として神格を有したが、神功皇后三韓征伐に神威を顕現、文永弘安の役に外敵を退けられた。由来国家鎮護の守護神として、歴代武門・武将の崇敬篤く、鎌倉幕府は社領を寄進し、武田信玄は社殿を造営・祭祀を復興し、江戸幕府はまた社領壱千五百石を奉納し、神徳を仰いだ。大正五年官幣大社に列せられた。

年遷座行事として、十二支の申・寅年に行われる御柱祭がある。

◎諏訪大社上社前宮

前宮は、本宮から一・五粁ほど南東、茅野市宮川にある。祭神である建御名方神が国譲りで諏訪に退いたとき、最初に居を定めた地、つまり諏訪大明神第一の鎮座地といわれ、古くは前宮があるこの地で全ての祭祀が執り行われていた、いわば諏訪信仰発祥の地である。

諏訪大明神の化身たる現人神（あらひとがみ）を大祝（おおほうり）と呼ぶが、上古には大祝の居館や付属するたくさんの建物が軒を連ねていたが、近世初頭頃までに大祝が宮田渡に移ると祭典に必要な建物のみになった。

しかし前宮は古くから上社の祭祀が行われた場所であり、最も重要とされる御頭祭（おんとうさい）は今でも前宮の十間廊（じっけんろう）で行われている。現在の建物は、昭和七年に伊勢神宮の用材で建てられた本殿と、内御玉殿、十間廊となっている。

本殿の説明板には

「上社前宮本殿

前宮とは上社本宮に対し、それ以前にあった宮の意味とも考えられている。前宮の祭神は、建御名方命（たけみなかたのみこと）と、その妃八坂刀売命（きさきやさかとめのみこと）と古くから信じられ、ここ前宮の奥に鎮まるところが墳墓と伝えられる。古来より立入ることが固く禁じられ侵すときは神罰があるといわれた。四方には千数百年の歴史を有する御柱が七年目毎に建てられ、現在の拝殿は昭和七年に伊勢神宮から下賜された材で造営されたものである。

昭和四十九年五月　　安国寺史友会」とある。

内御玉殿の説明板には

「内御玉殿

諏訪明神の祖霊がやどるといわれる御神宝が安置されていた御殿である。「諏訪明神に神体なく大祝をもって神体となす」といわれたように、諸神事にあたってこの内御玉殿の扉をひらかせ、弥栄の鈴をもち真澄の鏡をかけ、馬具をたづさえて現れる大祝はまさに神格をそなえた現身の諏訪明神そのものであった。

現在の社殿は昭和七年改築されたものであるが、以前の社殿は天正十三年に造営された上社関係では最古の建造物であった。

安国寺史友会」とある。

十間廊の説明板には

「十間廊

古くは『神原廊』と呼ばれ、中世まで諏訪祭政の行われた政庁の場で、すべての貢物はこの廊上で大祝の実見に供された。

毎年四月十五日の『酉の祭』には鹿の頭七十五がそなえられたが、これらの鹿の中には必ず耳の裂けた鹿が入っていることから諏訪の七不思議の一つにかぞえられた。

上段に大祝の座、つぎに家老、奉行、五官の座があり、下座に御頭郷役人などの座も定められ、左手の『高神子屋』で演ぜられる舞を見ながら宴をはった。

昭和四十九年四月　　安国寺史友会」とある。

前宮の傍に「水眼」と呼ばれる細い川が流れている。説明板によると、

「名水『水眼』の清流

古くから【すいが】と呼ばれ、山中より湧出する清流は、前宮の神域を流れる御手洗川となり、昔から御神水として大切にされた。

中世においては、この川のほとりに精進屋を設けて心身を清め、前宮の重要神事をつとめるのに用いたと記録されてい

諏訪大社上社前宮一之御柱の前で記念撮影

る。

この水眼の源流は、これより約一粁ほど登った山中にあるが、昭和五年に著名な地理学者、三沢勝衛先生によって、はじめて科学的調査がされ、その優れた水質は『諏訪史』第二巻に取り上げられている。

昭和五十三年八月　　安国

◎諏訪大社上社本宮

本宮は大社四つの社のなかでも、最大の規模を誇る。御神体は守屋山という山であり、本殿はなく、幣殿・拝殿、左右片拝殿（いずれも国重文）が横に並ぶ独特の配置である。戦国時代、武田勝頼が造営した社殿は天正十年（1582）織田信長の軍勢によって焼き払われたが、天正十二年（1584）諏訪頼忠が上社を再興、現在の社殿は天保九年（1838）に二代目立川和四郎富昌が棟梁を務めて建造された。とくに片拝殿にある彫刻「笹に鶴」「粟穂に鶉」は立川流の最高傑作といわれている。

東参道からはいると、正面に布橋（ぬのはし）と呼ばれる全長六十七米の屋根付回廊がある。この布橋を五十米ほどいくと左手に斎庭（ゆにわ）があり、それをくぐる門が慶長十九年（1614）、徳川家康の寄進によってつくられたといわれる四脚門、別名勅使門（国重文）である。その両脇には東西宝殿がある。東西宝殿は御柱の年の寅

年と申年に交互に建て替えられ、新しい宝殿に祈りを捧げる宝殿遷座祭がおこなわれる。神楽殿はちょうど四脚門の反対側の一段下壇にある。

上社では、年間百十一の神事が行われるという。下社の農耕的な神事とくらべ、蛙狩(かわずが)り、野出(のだ)し、神使御頭(しんしおとう)（酉(とり)の祭りの神事）など、狩猟神的である。

本宮南側の裏手には、法華寺跡（臨済宗）がある。明治時代初期の廃仏毀釈までは、上社と縁深い宮寺の一つであった。織

諏訪大社上社本宮の塀重門前で記念撮影

田信長の甲州征討では本陣とされたといわれ、吉良上野介の外孫で、養嗣子の吉良義周（よしちか）の墓もある。義周は赤穂浪士討入りの際、その場に居合わせたものの、武士らしくない働きぶりから、領地召上げのうえ高遠藩に御預けとなり、諏訪に送られてこの地ではてた。

寺は、平成十一年に火災にあって、今は山門が残るのみであるが、五重塔跡や鐘楼跡がある。

寺史友会」とある。

◇諏訪大社上社本宮と茅野駅の間に位置する達屋酢蔵神社は次回の予定だがついでに見て行こうと中島さんの采配で移動する。

◎達屋酢蔵神社（たつやすくらじんじゃ）

達屋酢蔵神社は、達屋社・酢蔵社の合祀したもので、古くは伍龍姫宮とも呼ばれていた。達屋社は大工の神様で、酢蔵社は酒を造る知恵の神様で、中世より横内の産土神となった。

拝殿・本殿の横に、諏訪では「注連掛鳥居」と呼ぶ冠木門に注連縄を掛けたような珍しい鳥居（門）がある。拝殿前に石橋の架かる川があり、「境内の地下には豊富な水源があり、茅野市の上水道に供給している」という『水資源開発』の碑がある。

〔茅野市史〕には

達屋・酢蔵神社は旧横内村の平坦地の中央に位置し、社前を諏訪大社上宮参道が通じている。達屋社は祭神大己貴神・手置帆負神、「上社末社三十九神」の内「下十三所」の一つ。酢蔵社は祭神思兼神で同じく「中十三所」の一つである。達屋は立屋・盾屋・立矢・盾矢、酢蔵は酒倉・酒蔵の字を用いられたことがある。（中略）

また、『諏訪神社祭典古式』には、三月丑の日の神事の項に、「此の日、国司栗林郷立屋社ニ着ク」との記載がみえるが真偽のほどはわからない。この神社は古来、諏訪神社の御柱山である八ヶ岳御小屋山より、御柱の曳き出しができる特権を持つ唯一の末社といわれ、寅申の年の御柱曳き建てには御小屋山より曳き出しを行っている。酢蔵社は、他所にあったものが後に立屋社に合祀されたといわれ、現在も社殿は一つであるが、二つの扉をもっている。とある。

境内社叢は四本のケヤキとサクラ・スギ等よりなる。本殿北側のケヤキは、目通り幹周七・二米で上原葛井神社のケヤキに次ぐ市内で二番目の巨木であり、樹齢は、四百～五百年と推定さ

れる。他の三本のケヤキもそれぞれ幹周三米以上ある。

◇三台のタクシーによる四ヶ所の見学が終了した。歩いた後で若干の疲れはあるものの何れも興味深く、目を見張るものが多く、得難い経験になった。帰りは今回初めてスーパーあずさを利用して八王子に戻る。自由席のためバラバラになり、宴会にはならず、現役時代の出張帰りのようでした。

第二十一回　実施日　平成二十五年九月十九日（木）
茅野駅～上諏訪駅　約八粁　累計二百十粁
宿　上諏訪宿
☆集合場所・時刻　JR八王子駅四番線　甲府寄りNEWDAYS付近午前六時十五分　八王子6:30＝＝9:02小淵沢＝＝9:23茅野

【第二十一回甲州道中行程】

茅野駅～姥塚古墳～大年社～上原八幡神社～甲州道中渋沢小路～大門街道追分・神戸の道標～上原城・諏訪氏館跡～頼岳寺～火燈（ひとぼし）公園～頼重院～神戸一里塚～道の真ん中の常夜灯～足長神社～上諏訪宿～宮坂醸造（真澄）～矢彫神社～伊東酒造（横笛）～枡形～酒ぬのや本金酒（本金）～麗人酒造（麗人）～舞姫酒造（舞姫）～諏訪宿本陣兼問屋跡～手長神社～高島城～柳口役所跡～上諏訪駅（解散）

◇浅見さんの急な病に驚かされたが、十二名が揃う。まず、見晴台に行き、街を眺め回す。西口に周り中島さんから概略の歩行予定を聞き、脇の姥塚古墳碑を見て歩き始める。

◎姥塚古墳

説明板には

「姥塚古墳

この古墳は、茅野駅前広場のあたりに古くからあり、明治三十八年（1908）十一月、茅野停車場の開設にともなって取り崩された。記録によれば、水田の中にあった円墳で、築造年代はおよそ八世紀末と推測され、墳丘上には石祀がある、台座石には花崗岩の天井石三枚が用いられていた。石室は、羨道が南に開口していて、羨道奥が左右にのびてT字形となっており、羨道と玄室の区別つかない形式で、玄室の左右に副室があった。出土品は、直刀・鉄鏃・桂甲小札・金銀環・玉類・細かい紋様つきの和鏡・須恵器・土師器・青銅鈴などであった。昭和四十一年十一月、駅庭の大整理に際して、散存する積み石を集め、この地に姥塚の石標を建立した。今回、茅野駅周辺再開発事業の一環として、姥塚古墳の一部地籍を残し、この地の古代文化を偲ぶよすがとした。

昭和六十二年十月　　茅野市教育委員会」

とある。

茅野駅西口を出て左へ、姥塚古墳と「官幣大社諏訪神社」の大きな石柱を見て甲州街道に出、右折。諏訪神社の大鳥居を左

に見て道なりに行くと、右手に大年社がある。

◎大年社

《大年社（オオトシシャ）は、諏訪神社上社の末社で、祭神は大歳神で、祀られた年代は明らかでない。『年内神事次第旧記』等によると、古くは神田五段があったとされ、『上諏訪造宮帳』には、「大歳宝殿、玉垣鳥居、是も近年退転、御園栗沢之役」とあって、古くから信濃国各郷村の課役によって造営されていたことがうかがえる。

四月二十七日の御座石神社の矢ヶ崎祭り（通称どぶろく祭り）には、饗膳の用意が整うと野火（狼煙）をあげその煙をみて各大年宮に詣でるとされ、『諏訪大明神画詞』の中にもくわしく述べられている。神祭は、矢ヶ崎祭りの当日に行われ、矢ヶ崎祭りの濁酒（どぶろく）が一荷奉納される古習は現在も続いている。

大祝（おおほうり）の職位（即位）にあたって十三所の御社参りをする時に、十二番目に参詣されるところをみても、この神社と諏訪神社との関係は深い。

さらに、御座石神社同様、御柱を建てず、その代わり七年ごとに素朴な鳥居を立てるなど、古風を多く残している。平成七年三月　茅野市教育委員会》

大年社の先の茅野町北交差点（ここが桝形）を左折する。あの先の森が前回訪れた達屋酢蔵神社（たつやすくらじんじゃ）である。

旧道と出会いを直進し、上原交差点から約二百五十米ほど次の交差点の左角に「上原八幡神社」がある。

◎上原八幡神社

八幡神社の由来

「八幡神社は古くは八幡宮と呼ばれ、当社の由緒書によれば、既に鎌倉時代弘長年中（1261～64）に前上社大祝諏訪盛重が鎌倉鶴岡八幡宮を分霊し、八幡山極楽寺を別当として、神祭祈祷を盛んにし、さらに戦国時代永禄年中（1558～70）、鎌倉より光明寺を移し、極楽寺とともに別当とし、社地は数町歩に及び、上原城下町の中枢として、広く諏訪一円から崇敬された。

慶長六年（1601）、諏訪氏が上州から諏訪の旧領に復帰後高島藩主が江戸行きの際には、藩主は当社まで騎馬、下乗祈願後、当社より旅支度を整え、駕籠で出府、帰城の際も当社にて駕籠から騎馬にかえたといわれている。今日社前に残る参道と枡形の駕籠置石の配列は数百年の歴史を物語っている。

平成五年十一月吉日　上原区　上原史跡保存会」

上原八幡交差点から進むと、石柱が建っている、順に「鍛冶小路」、「塔所小路」、「播磨小路」と刻まれ、渋沢小路で右に入る。

◎甲州道中渋沢小路

旧街道は、その次の郵便局への指示板のある通りを右折し渋沢小路の坂を左に曲がり上ると、上の道に合流する。ここ三叉路が大門街道追分である。

◎大門街道追分、神戸の道標

右からの道は大門街道である。大門街道は現在の国道１５２号線で白樺湖を通り、大門峠から大門川に沿って下り中山道に合流する。追分には、二基の「道標」と「常夜燈」があり、見え難いが、大きな道標には「右江戸道」、小さい道標には「右江戸道　左山浦道」、「常夜灯」には「右東京迄左大門道」と刻まれている。この大門街道を東に行くと頼岳寺があり、その先左折し永明寺山公園への道を上ると板垣平・諏訪氏館跡があり、

更に二粁程上ると諏訪氏の本城上原城がある。

◇この板垣平までも林の道をかなり登ってきた。さらに登る覚悟はあったのだが、中島リーダーの「ここから頼岳寺を通って降りる」の声で疲れが吹っ飛ぶ。

◎上原城跡、諏訪氏館跡

上原城は、標高九百七十八米の金毘羅山の頂上にあるが、尾根の突端で狭く規模は小さい。実際には、標高八百四十五米にある板垣平の居館が中心であったと思われる。

上原城は、諏訪惣領家の諏訪信満が、諏訪大祝家諏訪頼満と反目し分かれた文政元年(1466)頃に築城し、板垣平に居館を構え移り住んだ諏訪惣領家の居城である。

その後、惣領家信満の子政満が大祝家頼満の子継満に謀殺されたが、その行為が諏訪大社の社家衆の反発を招き、高遠に追放され、惣領政満の次男頼満が惣領と大祝を相続した。

この上原城で、諏訪氏は信満―政満―頼満―頼隆―頼重の五代七十余年にわたって諏訪地方を統治し、上原城下町は諏訪地方の政治、経済、文化の中心として栄えた。(諏訪氏系図61頁)

しかし、諏訪氏は頼重の時の天文十一年(1543)七月、甲斐の武田信玄に滅ぼされた。諏訪地方を領有した信玄は、翌年、重臣の板垣信方を郡代に任命し、信方はこの館跡に普請と上原城下町の区画割を行い、天正十年(1582)三月、武田氏の滅亡まで四十年間、この館を中心に上原城下町は諏訪地方最大の町として栄えたが、武田氏滅亡後、上原城は廃城となった。

諏訪氏館は、上原城の山腹の標高八百四十五米の小字板垣平にあり、長軸百米、面積はおよそ三千坪である。館跡の周り一段下には家老屋敷跡や家臣の居住した段郭跡がある。

追分から大門街道を約百三十米戻ると「頼岳寺」がある。総門左の池の後ろには芭蕉等の文学碑が並び、総門から山門に至る参道両側は立派な並木となっている。石段を登って山

門をくぐると正面が本堂で、右手に鐘楼があり、ここが標高七百九十七・八米とのこと。今回は頼岳寺の上部から下りる。

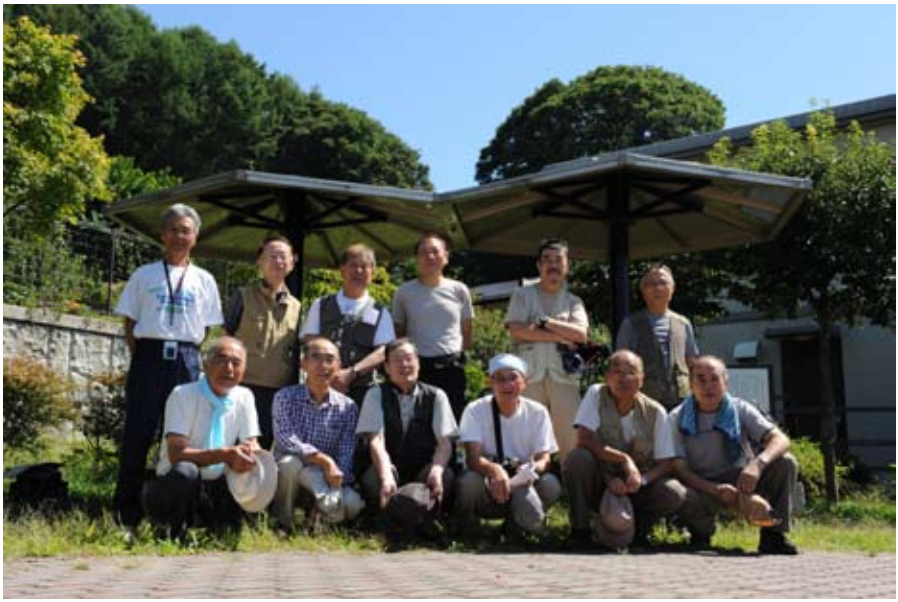
◇樹木の隙間から下を見るとかなり登ったことを実感する。

◎頼岳寺

曹洞宗、少林山頼岳寺は、寛永八年（1631）に高島藩初代藩主諏訪頼水の開基で開創した諏訪氏の菩提寺である。寺紋は、諏訪藩主家の紋章「梶の葉」。諏訪家の菩提寺は頼水の曽祖父にあたる頼満が開基の永明寺であったが、寛永七年（1630）同寺に駆け込んだ科人（とがにん）の引渡しを拒否したことから、頼水の命により炎上破却された。永明寺の頼忠夫妻（頼水の両親）の墓、本尊釈迦如来、什器などは翌年建立された頼岳寺に移された。御廟は三室に分かれ、中央が頼水の父頼忠（永明寺殿）、右が頼忠夫人（理昌院殿）で、塔婆はともに五輪塔と宝筐印塔である。左側は頼水（頼岳寺殿）で、家形の石造一重塔が安置されている。二代目藩主忠恒が、後に城下町上諏訪にあらたに菩提寺を建立

したので、以後歴代藩主の墓所は温泉寺に移った。

頼岳寺から大門街道を北西に戻り、追分を旧道に進む。庭にりんごを見たり、温泉タンクをを見たりして、右側に「火燈(ひとぼし)公園」に到着する。本日のランチエリアです。



火燈公園にて第二十一回参加者記念撮影（1）
立ち人（嶋崎、八木、中田、浅見、竹島、相原）
座り人（三浦、宇山、前北、中島、折本、伊藤）

◎火燈公園

説明板によると、大文字焼きのように、この公園の右後ろの山に鳥居火、左後ろの山に三ツ星の　篝火（かがりび）が焚かれた。現在の諏訪農協会館の前あたりに五王ノ鬼塚があり、この五王ノ鬼塚の松明に点火するのを合図に、火とぼし場でも一斉に点火して鳥居火とした。この公園は鳥居火、三ツ星、五王ノ鬼塚のほぼ中心に位置することから、区民が『太古からの仕来（しきた）り』を想う意味からも【火燈公園】と名付けた。火燈公園の直ぐ先右側に頼重院がある。

◎頼重院

開基は諏訪頼重。上原城にいた頼重は、天文十一年（1543）七月武田信玄に攻められ、桑原城に移った後に降伏。甲府に送られ、同七月二十日に自決させられた。甲府市東光寺に墓はあるが、家臣がその遺髪を持ち帰って境内に埋葬した。大石の石塔の辺りが墓所だったところ。大正九年の台風のとき、この石塔の中から宝篋印塔や六地蔵が出てきて、現在は堂内に安置されている。

少し先左側の広場（一里塚バス停あり）に「一里塚跡の石碑」が立っている。

◎神戸一里塚跡

江戸より五十一里。現在は塚は残っていない。街道沿いの民家や蔵の屋根に信州特有の雀返し（雀踊り）と呼ばれる棟飾りが乗っているのが見つかる。

◎道の真ん中の常夜灯

一里塚から約八百米、十字路の真ん中にゴミ集積所があり、その裏側に古い常夜燈と道標がある。常夜燈には「秋葉大権現」、道標には「左　江戸みち、右　大明神江」とある。

常夜燈から四百米、「霧ケ峰入口」の交差点があり、右手山の中腹に「桑原城跡」の看板があり、山上が桑原城跡で、諏訪頼重が籠城したが、ついに降伏した城である。

この「霧ケ峰入口」交差点を右折し上って行くと百五十米程で右に「足長神社」がある。

◎足長神社

交差点から旧道を百四十米程行くと右に木製の燈籠がある石段があり、これが「足長神社」の参道で、上ると先程の交差点を右折して上って来た道に合い、渡って上ると「足長神社」がある。足長神社の祭神は脚摩乳神。脚摩乳神は奇稲田姫（素戔嗚命の妻）の父親であるから諏訪大社の祭神、建御名方神の曽祖父にあたる。創立年代は不詳だが、桑原郷の社として手長神社とともに祀られたものと考えられる。

説明板によると、

「諏訪市文化財　足長神社拝殿・舞屋

祭神は脚摩乳神で、上桑原村の産土神として崇敬されてきた。拝殿は、天保十三年（1842）大隅流の大工矢崎専司らによって建造された。桁行一間、梁間二間、五棟造で三方に切目縁をまわし、擬宝珠高欄をつける。木鼻に唐獅子、欄間に竜・鷹・鶴、脇障子に麒麟・鳳凰、内部扉の両脇羽目に竜、その他各所に彫刻がついている。舞屋（神楽殿）は、文久二年（1862）石田房吉らによって建造された。間口五、七間　奥行き三、五間、正面開口部上に大きな虹梁を渡し、その上に竜・獏などの彫刻を置き、木鼻は獅子の彫物とする。

昭和六十三年十月十八日　指定　諏訪市教育委員会」

舞屋の虹梁の唐獅子の木鼻に脚摩乳神の大きな足の裏が彫られている。

「諏訪市指定有形文化財　足長神社本殿

この本殿は、拝殿より一段高い場所にあって拝殿とは後補による渡廊によって結ばれている。

この本殿の特徴は建築意匠にある。木鼻はいずれも拳鼻で、獏、唐獅子などの写実的なものになっていない。蟇股も板蟇股の中央に彫刻化する過程にみる絵様的な彫り出しである。脇障子に至っては、竹に小鳥を配した線彫りに近いものであ

る。以上建築様式からみて、江戸後期、彫刻意匠を風靡する前の時代の建造物で、社額裏面の延享四年（1747）の墨書などからして、十八世紀の建造物と考えられる。

指定　平成六年十二月二十二日　　諏訪市教育委員会」

（注）手長、足長は甲州街道を歩く【中】103頁参照

足長神社入口参道の直ぐ先右側に秋葉山の石碑と双体道祖神があり、約一粁程行くと旧20号線に合流し右折、四～五百米先右側、武津公民館の前にも秋葉山と双体道祖神がある。公民館の先で国道20号線と合流、右折する。合流から約二百米左に入る細い道があり、本来の甲州街道のようである。この細道は清水一、二丁目交差点に出る。次の元町交差点辺りから上諏訪宿となる。

◎上諏訪宿

本陣一軒、旅籠十四軒、総家数二百三十二軒

人口九百七十三人（男四百八十八人、女四百八十五人）、

宿場の長さ五町

高島城の城下町。かつての街道沿いに商人町であった清水・角間・上町・中町。武家町あった本町・片羽町が続き、細長く城下町を形成していた。宿場の中町であった。元町交差点の左に真澄の「宮坂醸造」がある。交差点の右に入る道の二本目、斜めに入る道の傍に「角間十王堂跡の碑」がある。

◎角間十王堂跡の碑

【十王堂のいわれは初代高島藩主諏訪頼水には亀姫があり、家臣の小沢家に嫁いだ。その亀姫が書状を下男に託したところ、日頃から仲が悪かった下男は書状を川に捨て、難を逃れるため永明寺（頼岳寺の前身）に駆け込んだ。これに怒った頼水は下男の引渡しを要求したが、寺が拒否したため寺を焼き払い下男の首を刎ね、その場に捨てた。それがこの場所で、町人は祟りを恐れ、亡者の裁きをする十王をここに祀ったといわれる。】

「元町」交差点から「諏訪二丁目」交差点までの四百米の間に酒造所が五軒並ぶ通りとなる。

◎酒造所が並ぶ

まず真澄の「宮坂醸造」。全国の六割の酒蔵で活躍している「七號酵母」発祥の蔵。次に鍵之手交差点手前左に横笛の「伊東酒造」、右手に日本一小さい蔵、本金（ほんきん）の「酒ぬのや本金酒造」、鍵之手交差点を過ぎた右側に麗人の「麗人酒造」、そして隣に舞姫の「舞姫酒造」と続く。

元町交差点を斜め右に入った先に「貞松院（ていしょういん）」とその奥に「正願寺（しょうがんじ）」がある。

◎貞松院と正願寺

「貞松院」には、松平忠輝の墓がある。忠輝は家康の六男、母

は茶阿の方、室は伊達正宗の娘・五郎八姫。高田六十万石の領主であったが、元和元年（1615）に家康から勘当され、翌年には秀忠から改易される。以後伊勢・飛騨、そして諏訪頼水に預けられ、天和三年（1683）、九十三才で高島城南之丸屋敷で亡くなった。「正願寺」には芭蕉の弟子である河合曽良の墓がある。上諏訪生まれで、芭蕉の門人となり芭蕉とともに、『奥の細道』を旅した。宝永七年（1710）五月二十二日、壱岐の勝本で没し、同地の三光寺（現・能満寺）に葬られた。正願寺の墓には彼の遺髪がおさめられている。

真澄を過ぎ角間（かくま）橋を渡り最初の交差点（日本キリスト教会諏訪教会の手前）を左折、突き当りに八剱神社がある。

◎八剱神社

主祭神は八千矛（やちほこ）神（大己貴（おおなむち）命・大国主命の別名）とし、日本武命と誉田別命（応神天皇）を合祀している。元は、五百米程西にある高島城の位置にあったが、秀吉の高島城築城の際に現在の地に遷座した。神紋は「丸に諏訪梶」。当社の特殊神事に、「諏訪湖御神渡り拝観報告」がある。冬になると諏訪湖は全面凍結し、四、五日後の明け方、突然ゴーッという音とともに湖面を南北に幅五十糎の亀裂ができ、裂け目の左右に三十～六十糎盛り上がった氷脈が蛇行する。この現象を「御神渡り」と呼び、諏訪七不思議とされ、上社祭神建御名方神が下社祭神八坂刀売神の元へ通われた道筋であるとの伝承がある。この氷脈の方向によって吉凶を占うようになり、それを観察し、諏訪大社大祝に報告するのが当社の役目。

街道に戻って進むと、横笛の「伊東酒造」、本金の「本金酒造」と麗人の「麗人酒造」の間にわずかなカーブになっている枡形（鍵之手）がある。

◎枡形

この枡形は南の枡形で、先の「諏訪一丁目」の交差点で右折するところが北の枡形。

「諏訪一、二丁目」信号の少し手前の右手、精進小路に入ったすぐ左角に高札場が置かれていた。小路を少し進んで左手に「精進湯」があり、右手の駐車場辺りが貞享二年（1685）以来、幕末まで続いた「本陣兼問屋」小平氏の屋敷があったところ。

◎上諏訪の温泉

上諏訪の主な温泉は、小和田平湯、湯之脇平湯、精進湯、鶴沼の湯、虫湯があった。そのうち鶴沼の湯は武士が、虫湯は藩主が主として利用し、精進湯は一般庶民の湯であった。この湯は手長神社の参道前にあり、潔斎して参拝するという意味から「精進湯」とよばれた。現在も公衆浴場として利用されている。

精進湯の先、裏町通りにある諏訪郵便局の横から長い階段を登った上に「手長神社」がある。ここから諏訪市街が一望できる。

◎手長神社

祭神は手摩乳（てなずち）神。足長神とともに奇稲田姫の親である。手長神は手が七米、足長神は脚の長さが十米もある。この手を伸ばせば、たちどころに魚を捕える手長神と湖中を自在に歩きまわれる足長神が、互いに背負い背負われ、共同で漁をするという。諏訪湖北岸の桑原郡は漁場の一等地で東の足長神社も、西の手長神社も、ともに石段の足元まで波が打ち寄せていたという。手長神社は下桑原郡の産土神（うぶすなかみ）であり、創立は足長神社とともに桑原郷の成立期（平安時代）までさかのぼると考えられる。また高島城が築かれると境内が城の丑寅（北東）の方角にあたる

ため、高島城鬼門除け（護神）として歴代城主に崇敬された。現在の拝殿は立川流初代和四郎富棟の建築で天明二年（1782）に建てられたもので入母屋、銅版葺、正面には軒唐破風が設えて、細部には唐獅子、上下龍などの彫刻が施されている。境内社の

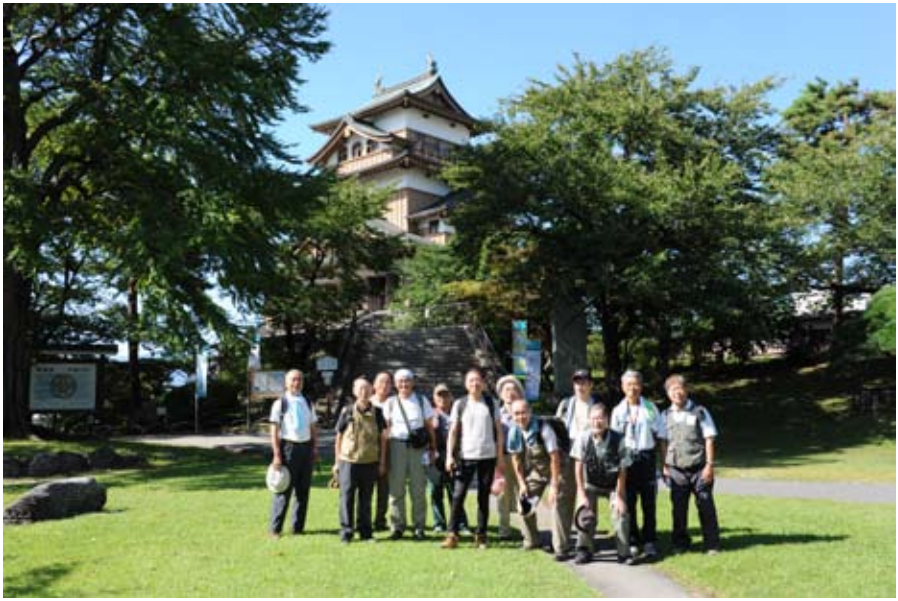
弥栄神社（旧手長神社本殿）は宝永六年（1709）に建てられたもので一間社流造、棟梁は伊藤庄左衛門。二棟共に諏訪市指定有形文化財に指定されている。

神社から階段を下り、先ほど通った精進小路を戻り、「諏訪一、

二丁目」の信号で甲州街道を横切り、直進約五百米で高島城に着く。

◎高島城

高島城は湖水の端に位置する小島に築かれた水城で、小規模ながら湖と低湿地に囲まれて要害を成し、「諏訪の浮城」と呼ばれ、松江城（島根県松江市）、膳所城（滋賀県大津市）と共に「日本三大湖城」に数えられている。天正十八年（1590）、豊臣秀吉の武将、日根野織部高吉によって設計され、慶長三年（1598）に築かれた。西北に三層の天守を築いた本丸を中心に、二の丸、三の丸、衣の渡郭の四つの曲輪から成る連郭式の縄張りは南北に長く湖に面して構えられ、周囲を回る諏訪湖と数条の河川が濠の役をつとめていた。諏訪湖の波も城壁に迫り、あたかも水中から城郭のみが浮き出した形であった。関ヶ原の合戦後、古くからの領主であった諏訪氏が藩主となると城下町の整備に努めると特に諏訪湖畔の埋め立てに力を入れた為、諏訪湖と高島城との距離が次第に離れていったとのこと。また、高島藩では寛永三年（1620）の配流された松平忠輝のための幽閉屋敷として南之丸を建て、堀をめぐらし番所をつけた。この南之丸では吉良上野介の嗣子、義周もこの地で病死するまでの三年間を過ごしている。現在、諏訪市役所の駐車場の南、諏訪市武道館の辺りが南之丸のあったところ。諏訪氏は明治維新まで続き、高島城は廃城となり多くの建物は、破棄あるいは払下げとなった。現在の高島城は本丸跡に石垣や堀が残り高島公園として整備され、天守閣や隅櫓、大手門、塀などを復元、御川渡御門（御川



高島城にて第二十一回参加者記念撮影（2）
（三浦、八木、折本、中島、相原、浅見、宇山、伊藤、竹島、前北、嶋崎、中田）

戸門）跡に旧三之丸御殿裏門を移築している。諏訪氏の菩提寺である温泉寺には城門と能舞台が移築されている。

高島城冠木門を出、冠木橋を渡り左へ、そして直ぐ右の道を道なりに行く。この道は二の丸、三の丸を通り、大手門から大手門前欅並木（縄手通り）を通る道である。踏切を渡り右折したすぐ左に公園があるが、ここが「柳口役所跡」である。

◎柳口役所跡

説明板によると、

ここは高島藩の民政の窓口で、村役人などを呼び出して命令や裁判をしていた場所。明治二年に国学校、明治十二年に高島学校が建てられ、翌明治十三年六月の明治天皇御巡幸の際には行

在所となった。諏訪一丁目交差点に戻り左折し約百米で上諏訪駅である。

◇上諏訪駅に無事到着して、特急スーパーあずさ22号に乗り、八王子まで戻る。一部の人が天狗で反省会後、解散する。

第二十二回　実施日　平成二十五年十月十七日（木）
上諏訪駅～下諏訪宿・甲州道中中山道合流之碑～下諏訪駅
約八粁　累計　約二百十一粁
宿　下諏訪宿

★集合場所・時間　上諏訪駅　午前九時三十五分
①JR八王子四番線、甲府寄りNEWDAYS付近午前六時十五分
八王子 6:30 ＝＝ 9:30 上諏訪
②八王子 7:29 スーパーあずさ1号＝＝ 9:14 上諏訪

【第二十二回甲州道中行程】

上諏訪駅～吉田の松～片羽の一里塚跡～西国三十三観世音～温泉寺～兒玉石神社～先宮神社～橋本屋道中茶屋跡～島木赤彦宅～石投場・明治天皇駐輦址碑～富部（とんべ）の一里塚（最後の一里塚）～承知川橋～下諏訪宿～ホテル山王閣（金刺盛澄の騎馬像・手塚城跡）～諏訪大社下社秋宮～塩羊羹新鶴本店～甲州道中終点・中山道合流～下諏訪本陣岩波家～青塚古墳～秋宮鳥居前タクシー乗り場＝旧中山道＝下社御柱祭木落し坂上＝木落し坂下＝諏訪大社下社春宮・万治の石仏＝下馬橋＝下諏訪駅（解散）

◇旅人のあといの人が特急で上諏訪駅で落ち合うことになった。八木さんが相原さん、浅井さん、伊藤さんをあといの人と気付く。

上諏訪駅を出、右折しその先の諏訪一丁目の信号を左折し、すぐに裏町の道（もう一本の甲州街道）に突き当たり左折すると片羽に入る。道の右側には武家屋敷が、左手には馬場があった。三百五十米程行くと片羽保育園があり、その庭に「吉田の松」がある。

◎吉田の松

諏訪市天然記念物（昭和五十四年二月指定）

種　　名　クロマツ（マツ科）

推定樹齢　二百七十～三百年（平成七年現在）

大きさ　目通り幹周　一米四十五糎、地上三十糎幹周二米十三糎

高島藩士吉田式部彦衛門が元禄三年（1723）藩主忠虎の大阪城守備に随行した ときに持ち帰ったものと伝えられる。

代々吉田家の庭園に育てられたものを、昭和のはじめ旧甲州 街道沿いに移植したものであり、市内の最年長樹である。

クロマツの特徴は樹皮が末端まで暗黒色、下部樹皮が亀甲状に割れ、葉は濃緑色で強剛、新芽の鱗片は白味を帯びる。諏訪地方に見られるクロマツは栽植されたものである。

諏訪教育委員会

吉田の松からすぐ先左側に「片羽の一里塚跡」の碑と説明板がある。

◎片羽の一里塚跡

甲州道中は、江戸から甲府が表街道、甲府から下諏訪が裏街

道と呼ばれ、下諏訪宿で中山道と合流していた。各街道とも江戸日本橋より三十六町（一里、約四粁）ごと道の両脇に盛り土をして頂上にケヤキ・エノキなどを植えて一里塚とした。ここに一里塚ができたのは慶長十五年(1610)頃と言われている。この塚は江戸から五十二里で西は下諏訪町富部の五十三里、東は四賀神戸の五十一里塚へと続いている。

諏訪教育委員会

一里塚から三百米ほどで右にカーブし、道は左右に分かれる。甲州街道は左へ行くが、右の道を行き、温泉寺へ向かう。緩やかな上り坂の右には東屋の中に高遠の名工・守屋貞次の作と伝えられる「地蔵」や「薬師如来名湯」石碑他多くの石造群が建てられている。

◎西国三十三観世音

その先右には三棟の祠内に西国三十三観世音の石仏が祀られている。

◎温泉寺

慶安二年(1649)に二代藩主の諏訪忠恒が諏訪家の菩提寺として建立。忠恒以降七代の墓碑がある。明治二年(1869)の火災の後、高島城の能舞台を移したという本堂が残っている。これは三間四方の 舞台に裳階と唐破風を持ち、向拝を付けた特色ある形である。山門も城中からの移築といわれ、仁王像は脇に造られた小堂に収まっている。庫裏は城内の藩主書院だったものである。

永享二年（1430）作という古鐘は、元々飯田の安養寺にあったもの。織田信長が勝頼を攻めたときに陣鐘として、ここまで曳いてきて、寺創建のときに寺の梵鐘としたという。

寺から墓地の坂を上る道は「桜大門」と呼ばれる。藩主忠恒が大阪夏の陣で戦勝凱旋の際、持ち帰った枝垂れ桜（忠恒桜）の並木が続いている。急坂の途中、左の木の下に五輪塔の「和泉式部」の墓がある。和泉式部は下諏訪宿出身と云われている。

また、神仏分離の際に上社から移した鉄塔（舎利塔）もある。さらに上り正面には「諏訪藩歴代藩主廟所」がある。

道を戻り右に街道を進み左にカーブした右の路地奥に児玉石神社がある。

◎児玉石神社

由緒

祭神「児玉彦命」は諏訪大神「建御名方命」の御子「片倉辺命」の御子。つまり「建御名方命」の御孫。創建年は不詳であるが、文明十八年以前であると伝えられている。

毎年の例祭斎行のさいには、諏訪大社より神官が参向され、幣帛料を捧げて奉仕されることが昔から今も続けられている。式年寅年申年の七年目毎には矢剱神社の旧社殿を移して当神社の神殿としたり、「千木」を譲与されることが例となっていた。境内にある五個の大石は〝諏訪七石〟の一つに数えられている。拝殿前にある二個の大石は「いぼ石」と呼ばれ神社のシンボルとなっている。『上諏訪宮神徳記抄』には、〝神が諏訪湖より大石を取り上げたが袖は濡らさなかった。中に二個の大石があり、「兒玉石大明神」と称した。〟とある。「兒玉石大明神（大石）」は祭神の御霊代となっている。

大石には、沢山の凹部があって常に水をたたえて乾くことがなく、この水で「いぼ」を洗うと、必ず治癒すると言い伝えられている。

鳥居脇には、樹齢二百五十年以上という「大杉」があり、御神木となっている。

（兒玉石神社明細帳より）

この辺りからは街道に趣が残っている。兒玉石神社から三百米程の右に「先宮神社」があり、境内前の小川には橋や蓋石などが架けられていない。

◎先宮神社（橋を架けない小川）

【先宮神社由緒】

先宮神社の創立は諏訪大社より古く、古事記の「国ゆずり」の神話の一節にみえ、諏訪大社の祭神「建御名方命」が出雲より、州羽（諏訪）の地に遷御された以前より、既に原住民の産土神であった。

先ノ宮神社の祭神は国つ神で「高光姫命」、また「稲背脛命」ともいう。しかし、「建御名方命」が諏訪神社に鎮座した当時、当初諏訪明神に反抗したが、遂に服従し、今の社地に鎮座し、他の地に出ることを禁止された。そのため今でも境内前の小川には橋を架けないとの言伝えがある。

本殿横にあるケヤキ（諏訪市文化財）は、市内では上社の布橋門横のケヤキと共に最大級であり、樹齢六百九十年以上と

先宮神社にて第二十二回参加者記念撮影（1）
（折本、宇山、竹島、前北、嶋崎、八木、中田、中島、三浦、相原、伊藤、浅見）

推定され、目通りの幹周七・四五米、樹高二十五米、枝張り長径二十五米、短径十五米。

街道は緩やかな上り坂となり、大和（おわ）の集落では、「諏訪市消防団第一分団第一部」と隣の「武居屋酒店」との間に大きなケヤキがあるが、木は幹の殆どは空洞で、皮一枚で生きている。

坂を上ると諏訪湖全体が見える眺望抜群の場所がある。

道を下り高木の集落に入ると左側に江戸時代の道中茶屋「橋本政屋」がある。

◇標札は長崎になっていた。担当者が資料を配り、盛んに説明したがるので四分ほど費やしてしまう。

◎橋本屋道中茶屋跡

連子格子のある建物で、城の門と見紛う（高島城三之丸の門を移築した）立派な門。欄間に鯉の彫刻、軒先から突き出た見事な燈籠。江戸時代には、諏訪湖で捕れた魚料理が味わえ、時には藩主が足を運ばれ、二階からの景色を見ながら料理を楽しまれたそうだ。向いには、道祖神が祀られ、少し先左にも道祖神が祀られている。その先右奥に島木赤彦の住居がある。

◎島木赤彦宅

説明板には

「下諏訪町指定文化財

建造物

島木赤彦住居（柿蔭山房・赤松・胡桃）

赤彦は明治三十年久保田家の養嗣子となり、大正十五年三月死去迄この家を根拠に生活したが、大正七年東京のアララギ発行所から帰郷以来ここで起居、自ら『柿蔭山房』と命名した。

間口八間半、奥行き五間半、士族の家作りとしても評価が高い。

書斎は西向き八畳の上座敷であったが、冬は寒く夏は暑かったので大正十四年東南の一部に日当たりのよい書斎を新築した。

庭の赤松は樹齢三百年余、目通周二米（メートル）又門口の胡桃は樹齢百三十年余、共に赤彦が愛惜した老木である。なお津島神社前に歌碑、裏山の中腹に赤彦と夫人不二子の墓がある。

＊雪ふれば山より下る小鳥多し

障子の外に日ねもす聞ゆ　　赤彦

昭和五十七年三月二十六日　　下諏訪町教育委員会」

とある。

◎石投場・明治天皇駐輦址の碑

橋本屋から下りで、六百米程先の巨大なマンションがあり、その先の諏訪湖の展望の良い場所に出ると、右の山側に「明治

天皇駐輦址」と「南信八名所石投場」の碑が立っている。

『駐輦』とは、天子が車（輿）を留めることなので、明治天皇も車（輿）を止めて諏訪湖の美しさをご覧になったのであろう。また、「石投場」は、当時は、ここの崖下まで諏訪湖が迫っていたので、ここから湖面めがけて石を投げて楽しんだのであろう。

石投場からは富部の集落に入り六百米ほど坂を上り、次いで下った先右の民家の前に「一里塚碑」がある。

◎富部の一里塚跡

この一里塚は、江戸から五十三里、甲州街道最後の一里塚である。あと十一町（約千百米）で甲州道中終点・中山道合流地点である。

一里塚から五百米弱、若宮神社を過ぎて宮坂建具店の手前の小さな川（承知川）で小橋を渡るが　これが「承知川橋」である。

◎承知川橋

橋の先右側の「久保海道公会所」の石垣に、一枚岩が貼り付けられて承知川橋の説明板がある。

【承知川橋の記】

この一枚岩は長く甲州道中の承知川にかかっていた橋石である。

輝石安山岩　重量約拾参屯

伝説によると永禄四年（1561）武田信玄が川中島の戦いの砌、諏訪大明神と千手観音に戦勝祈願を約し社殿の建替と三重の塔

の建立を約して出陣したと言う、しかし戦に利あらず帰途この橋を通過せんとしたが乗馬は頑として動かず信玄ふと先の約定を思い出され馬上より下りて跪き「神のお告げ承知仕り候」と申上げ帰国したという。爾来承知川と呼びこの一枚岩の橋を承知橋と呼ばれるようになったと伝えられている。この一枚岩の煉瓦模様は防滑とも又信玄の埋蔵金の隠し図とも言われてきた。表面がこのように滑らかになったのは人馬など交通が頻繁であったことを物語っている。

この度新橋掛替に当ってこの橋石を永久に保存する。

昭和五十二年　久保海道町

山を巻くように進むと簡易信号があり、この辺りから下諏訪宿に入る。信号を右に入るとホテル山王閣があり「金刺盛澄」の騎馬像が立っている。

◎下諏訪宿

本陣一軒、脇本陣一軒、旅籠四十軒、総家数三百十五軒

人口千三百四十五人（男七百六人、女六百三十九人）

◎ホテル山王閣（金刺盛澄の騎馬像・手塚城跡）

ホテル山王閣の辺りは『山王台』といわれている。また手塚別当金刺光盛の居城跡で『手塚城』

または『霞ヶ城』とも呼ばれていた。諏訪大社下社の大祝、諏訪太夫盛澄（金刺盛澄）の弟であった手塚別当金刺光盛は、木曽義仲に従って平氏を討った後、粟津ヶ原で義仲とともに戦死する。兄盛澄も義仲に従って上京、義仲の死後も京に残って、

源頼朝に捕えられた。しかし弓の達人であることを知っていた梶原景時のとりなしがあり、鶴岡八幡宮の放生会（ほうじょうえ）に参加し、頼朝の前で流鏑馬の技を披露する。その妙技に感嘆した頼朝は盛澄を許したといわれている。後に景時の死を知った盛澄は供養のため宝剣を埋めて塚を作ったという。塚には「梶原塚」と彫られた碑が建てられている。

この碑はJR下諏訪駅の北東、菅野町会館前にある。

◎諏訪大社下社秋宮

秋宮は、中仙道と甲州街道が交わる交通の要衝に鎮座している。下諏訪町の温泉街に近く、境内の手水にも竜の口から温泉（御神湯）が流れる。鳥居を入ってまず目に付く正面の大きな木は「根入の杉」と呼ばれる樹齢約八百年のご神木である。

正面の神楽殿は、両脇に身長一・七米の青銅製では日本一と言われる狛犬を従えている。神楽殿は三方切妻造りで、上社本宮幣拝殿を手掛けた二代目立川和四郎富昌によって天保六年(1835)に完成した。その奥の御社殿は二重楼門造りの幣拝殿と左右片拝殿が春宮と同じ造りで横に並び、これらの建物は初代立川和四郎富昌によって安永十年(1781)に建てられた。彫刻が見事で拝殿内部の「竹に松」などは代表作である。拝殿奥の神明造りの建物は宝殿で、新しい方を神殿、古い方を権殿と呼び、寅年と申年毎に左右の遷座祭を行う。当社の宝殿は上社、下社共に平素二殿並んでいる。

宝殿の奥が御神座とも相殿とも言われ、御神木（御神体のイチイの木）をお祀りする下社の最も重要な場所である。

例大祭は秋宮では二月には遷座祭、八月には遷座祭とお舟祭

諏訪大社下社秋宮にて

がおこなわれる。

街道に戻り進み国道１４２号線に突き当たったら右折、秋宮への参道を右に分け、千尋池を左に見て行く道を進むと右の石の玉垣に「下諏訪宿甲州道中口　番屋跡」の石碑があり、直ぐ先右に新鶴本店があり、左から来る国道１４２号線と合流、五十米で甲州道中終点、中山道合流点に着く。

◎塩羊羹新鶴本店

明治六年（1873）創業の老舗。

◎甲州道中終点・中山道合流

下諏訪の追分で、右にある道標には「甲州道中終点　右江

甲州道中 中山道合流之地へゴールイン

竹島、相原、嶋崎、折本、中田、浅見、伊藤、八木、中島、宇山、三浦、（前北）

戸へ五十三里十一丁　中山道下諏訪宿　問屋趾　左江戸より五十五里七丁　正面京都へ七十七里三丁」とある。

江戸から下諏訪宿まで五十三里十一丁（二百十一粁）を丸二年がかりで、二十二回に亘った甲州街道ウオーク、お疲れさまでした。

この後は、下諏訪宿界隈を訪ねてみたいと思います。

下諏訪追分の隣が中山道の宿「下諏訪宿本陣岩波家」である。

◎下諏訪本陣岩波家

元禄以降、岩波氏が代々問屋と本陣を兼ねていて、明治までその任に当たった。門前には「明治天皇行在所の碑」が立っている。

本陣の庭園は秋宮の森を借景とした名庭園で中山道でも随一と言われている。敷地は八百二十五坪、建物は二百八十坪あり、本陣と私宅とに分かれていたが、本陣の一部は現在、聴泉閣かめやという旅館になっている。上段の間などは旅館の内部にそのまま残されている。

十四代将軍徳川家茂へ嫁ぐため、文久元年（1861）十月二十日に京都を出発した皇女和宮も十一月五日、この岩波家に泊まった。

◎中山道

中山道は、江戸時代における五街道（東海道、中山道、甲州道中、奥州道中、日光道中）の一つである。中山道は江戸日本橋から武蔵国、上野国、信濃国、美濃国を通り、近江国の草津で東海道に合流する百二十九里十町八間（約五百十粁）で東海道より四十粁長い街道である。宿は、始宿の板橋宿より守山宿（滋賀県草津市）までの六十七次である。

中山道の難所は、碓氷峠をはじめとして、和田、塩尻、鳥居の三峠がこれに続き、木曽谷を通過したのち、馬籠峠を越えて平野部へと向かう。この間には幕府の重要な関所、碓井、木曽福島の両関所があり、通行人を厳しく検問した。

中山道は参勤交代、日光例幣使（れいへいし）、お茶壺道中の行列や諸大名が多く、別名「姫街道」とも言われるくらい大名の奥方や姫君の通行が多かった。

◎青塚古墳

説明板には、「長野県史跡　下諏訪青塚古墳　昭和四十年二月二十五日指定

この古墳は、明神山山麓から西に突き出た丘陵の先端部に位置し、付近に古墳が認められず単独墳の様相を呈している。現在の墳形は、長い年月の間に旧状を変じており、見方によっては二基の円墳が近接し合っているようにも見えるが、主軸長六七メートル、後円部径三三・四メートル、前方部幅四二・八メートルの前方後円墳である。

石室は、後円部西側のくびれ部寄りに開口した横穴式石室で、安山岩の自然石を用いた乱石積となっており、全長は七・四メートルである。なお、内部は未調査のため不明な部分が残されている。

本古墳は、墳丘の形態・石室・出土した埴輪の特色から、六世紀後半から末に築造されたものと推定されている諏訪地方唯一の前方後円墳であり、後円部に比して前方部が長いという天竜川流域の特色を有した貴重な古墳である。長野県教育委員会」とある。

◇塩羊羹新鶴本店前にタクシー三台を呼び寄せて、下諏訪宿界隈を訪ねる。中山道五十五里の一里塚跡を見て、春宮を上から眺める最終の木落し場を訪れる。

下社御柱祭木落し坂と御柱追掛け綱固定柱を見学し、下に下りて注連掛（しめかけ）地を見てから下社春宮へ行く。

★下社御柱祭

下社の御柱は、下諏訪町の東俣国有林から切り出される。伐採は御柱年の一年前に行われ、山出し開始地点の棚木場（たなこば）に安置される。伐採が早い分、木が乾燥し重さは上社より軽い六～八屯。戦前までは東俣国有林から山出しをしていたが、傾斜が急で事故が相次いだため戦後は現在の棚木場に移った。

◆下社【山出し】

「奥山の大木　里へくだりて神となるヨーイサ」の朗々と響き渡る木遣りを合図に棚木場を出発。曳行は、初日春宮四、春宮三、秋宮二、二日目は秋宮四、春宮一、春宮二、秋宮三、秋宮一の順に曳き出す。

山出しは東俣川（霧ケ峰の八島ヶ原湿原一帯を源流とし、木落し坂まで御柱の曳行路に沿って流れている。御柱祭が近づくと、大役を担う氏子が川に入り、精進潔斎する姿も見られる）の渓谷に沿ってゆっくりと

進み、見所の「萩原の大曲」を通り、木落し坂での「木落し」を行い、「注連掛」でまで曳かれて行き、五月の里曳きまで安置される。

〔萩原の大曲〕

萩原の大曲は、木落し前の難所として知られる、曳き手泣かせの大きなカーブ。元綱の曳き手、梃子衆、柱の後ろで舵をとる役目をする追掛け綱の曳き手など、全ての力を結集しなければこの難所を越えられない。

〔木落し〕

萩原の大曲の集落を抜けると急に眼前が開ける、そこが世に名高い木落し坂。最大斜度三十五度、距離百米。御柱が姿を見せると、砥川の河原を埋め尽くした大観衆から一斉にどよめきが沸き起こる。そんな観衆を焦らすかのように見えを切ってみせる氏子達。御柱に跨った命知らずの若衆が、緊張の面持ちでその瞬間を待っている。

木遣りにのって頭を突き出す御柱。観衆の緊張が最高潮に達した瞬間、御柱を引きとめていた追い掛け綱が切られ、御柱は土煙をあげ轟音を響かせながら猛然と坂を突き進み落下する。

絶叫とも悲鳴ともつかぬ大歓声。最後まで振り落とされず無事に乗り切った者は満場の喝采を浴び、後世まで語り継がれるヒーローとなる。「男見るなら七年に一度、諏訪の木落し、坂落し」と歌われるわずか数秒の壮絶なドラマに全身全霊をかけ、男たちは木落しに挑む。

そして龍か大蛇の化身かと思われるように猛り、吼え、転がりながら坂を落ちた御柱は再び穏やかな表情に戻り、更に一粁程の道程を「注連掛」まで曳かれていく。

山出しの最終日の翌日に注連掛祭という御柱の周囲に白樺を立てて注連縄で囲う祭が開かれ、五月の「里曳き」まで静かな休息の時を過ごすのである。

◆下社〔里曳き〕

注連掛に眠っていた八本の御柱が五月に出発する。また秋宮から春宮へ御柱行列が差し向けられる。上社の御柱迎えの行事にあたるもので、春宮に着くと御柱大祭が行われる。

国道百四十二号から旧中山道へ入った御柱は、春宮境内裏側の短いながらも急な坂、ミニ木落しを下って春宮境内へ曳きつけられる。春宮一はその日のうちに建てられる。秋宮の四本の柱は春宮境内を経て下馬橋の前で曳行を終える。

〔道中絵巻〕

下社の里曳きも山出しの豪快さとは対照的に華やかな雰囲気に包まれる。騎馬行列や花笠踊り、長持行列などが華麗な道中絵巻を繰り広げるが、中でも下諏訪町東山田地区の長持は、徳川家康の六男　松平忠輝公の筆になる標示札を受け継ぐ伝統あるもので江戸時代の様子をよく伝えている。春宮から秋宮までは市街地が曳行のコースとなるため、大勢の見物客で御柱最後を飾るにふさわしい賑わいを見せる。二日目の出発地である下馬橋は、殿様も駕籠や馬から下りたという神域。その神聖な橋を出た秋宮の御柱は下諏訪の町中をゆっくりと進み、長い坂（大社通り）を登って行く。四本の御柱は境内で一晩を過ごし、御柱祭の最終日、いよいよ秋宮の「建御柱」である。

〔建御柱〕

上社同様、先端を三角錐に整える「冠落し」の儀を行った後、何本もの ロープが取り付けられ、車地と呼ばれる道具を氏子が力を合わせて巻き上げると、御柱は徐々に立ち上がっていく。

てっぺんで意気揚々と「おんべ」を振る天端乗りは、御柱を豪快に演出する。沸き起こる拍手と喝采の中で神となる巨木。山出しから二か月にわたって繰り広げられた柱の曳き建ては幕を閉じる。

諏訪地方観光連盟

信州諏訪　御柱祭公式ホームページほかより

◎諏訪大社下社春宮

社頭から真直ぐ八百米程伸びる道路はかつては春宮の専用道路で、下社の大祝金刺一族を始め　多くの武士達が流鏑馬を競った馬場である。途中の御手洗川に架かる下馬橋は室町時代の建立ですが、建築様式は鎌倉時代のもので元文年間（1730 年代）に修築されたが、下社では最も古い建物で遷座祭の折に神輿はこの橋を渡る。入口の御影石の大鳥居は万治二年（1656）建立と推定され、場外にある「万治の石仏」と同じ作者と言われる。

建物の配置は秋宮と同じで本殿はなく、正面に神楽殿、その奥に幣拝殿と左右片拝殿、さらに奥に宝殿があり、宝殿奥にそびえる「杉の木」がご神木（御神体）となっている。（秋宮のご神体はイチイの木）春宮と秋宮の社殿の建替えが諏訪藩に依って計画された時に同じ絵図面が与えられたと見え、大きさこそ違うがその構造は全く同じで、春秋両社の建築は彫刻に於いて技が競われている。秋宮は立川流であるのに対して春宮の社殿は大隅流の宮大工柴宮（伊藤）長左衛門が請負い、秋宮より後から着工して一年早く安永九年（1780）に竣工した。大隅流の意地がうかがえる幣拝殿正面の彫刻は見事である。

御宝殿は上下社とも三間四方で、方三間の神明造りという。下社では寅年と申年の左右の御遷座祭の他に半年毎に春宮と秋宮の遷座祭が執行される。

神楽殿の西の建物は筒粥殿、その西の清流は砥川で川の中にある島は浮島といい、どんな大水にも流れず下社七不思議の一つである。お社は浮島社といい、清め祓いの神を祀り六月三十日の大祓式、夏越の祓いはここで行う。鎌倉武士が御射山の祭

典に参列する時、まずこの川で身を清め八島高原へ登山したと伝えられる。

◎万治の石仏

諏訪大社春宮の西を流れる砥川対岸の道を百五十米ほど入ったところにある。高さ二・七米、長さ四米の自然石（輝石安山岩）の上に、高さ六十三糎の仏頭が載せられている。「万治」の名は、胴石に「南無阿弥陀仏」の六号が刻まれ、その左に「万治三年十一月一日　願主　明誉浄光心誉広春」の刻銘があることによる。万治三年とは江戸時代初期の西暦１６６０年。明誉と心誉という二人の人物が、このあみだ様を造ったことを示している。明誉と心誉は、木喰遊行僧弾誓上人の流れをくむ僧で、万治三年は弾誓上人五十回忌が行われた年である。（弾誓上人については、甲州街道を歩く（上）97頁参照）

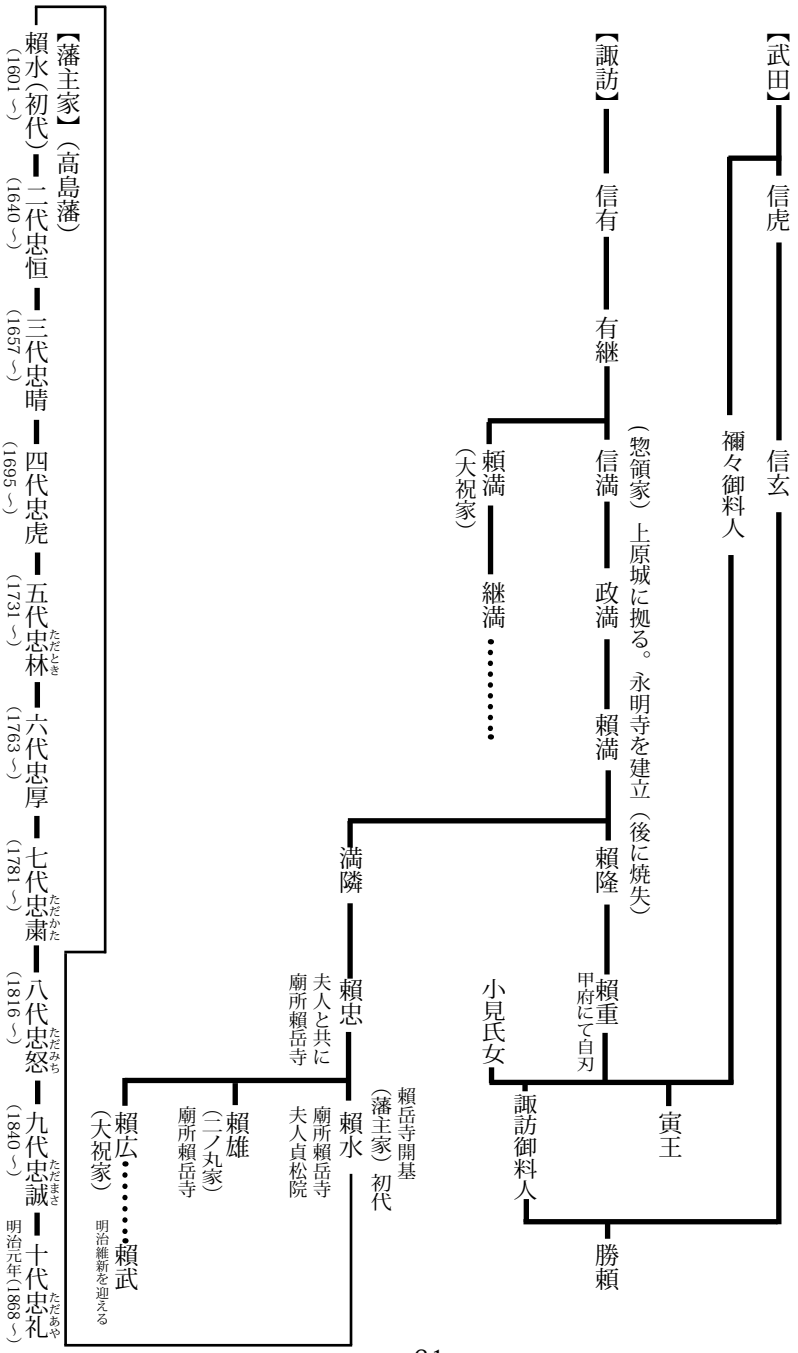
説明板には、「伝説によると諏訪大社下社春宮に石の大鳥居を造る時この石を材料にしようと、ノミを入れたところ傷口から血が流れ出したので、石工たちは恐れをなし仕事をやめた。（ノミ跡は現在でも残っている）その夜石工の夢枕に上原山（茅野市）に良い石材があると告げられ果たしてそこに良材を見つける事ができ、鳥居は完成したというのである。

石工達は、この石に阿弥陀如来をまつって記念とした。尚、この地籍はこの石仏にちなんで古くから下諏訪町字石仏となっている。　下諏訪町」とある

◎下馬橋

下馬橋は大門通りの真ん中に残された太鼓橋で、室町時代の建築といわれている。この橋からが神域とされ殿様でも駕籠や馬から下りなければならなかった。現在この橋を通ることができるのは、遷座祭で神様が乗った神輿だけである。

# 諏訪氏家系図


【武田】
信虎
信玄
禰々御料人
【諏訪】
信有
有継
（惣領家）上原城に拠る。永明寺を建立（後に焼失）
信満
政満
頼満
頼隆
頼重
甲府にて自刃
小見氏女
諏訪御料人
寅王
勝頼
（大祝家）
頼満
継満
……
満隣
頼忠
夫人と共に廟所頼岳寺
頼岳寺開基
（藩主家）初代
頼水
廟所頼岳寺
夫人貞松院
頼雄
（二ノ丸家）
廟所頼岳寺
頼広……頼武
（大祝家）
明治維新を迎える
【藩主家】（高島藩）
頼水（初代）（1601～）
二代忠恒（1640～）
三代忠晴（1657～）
四代忠虎（1695～）
五代忠林（ただとき）（1731～）
六代忠厚（1763～）
七代忠粛（ただかた）（1781～）
八代忠怒（ただみち）（1816～）
九代忠誠（ただまさ）（1840～）
十代忠礼（ただあや）
明治元年（1868～）

# 旅人の感想文集

211kmを完歩して、下諏訪宿　甲州街道、中山道の合流之地に揃う

甲州街道ウォーク感想記　今回の多摩支部の甲州街道ウォークに参加できたことは、私の一生の想い出に残るイベントになりました。一年十ヶ月（22回）に亘り、歩くことばかりでなく、街道の史跡、歴史を訪ねたウォークを、多摩支部の皆様と時空を超えた、ひとときを過ごせた企画に感謝します。幸い天候にも恵まれ、無難に道中を完歩（2回不参加）出来たことは、今後のウォークの自信にもなりました。今回の企画は、歴史を感じ毎回が楽しみであり、また興味深くウォークガイドを読み、まだ見ぬ道中の行程に想像を巡らして歩いたことは、脳の活性化と健康増進に大変良かったと実感しています。毎回、中島さんの現地に於ける説明に往時の暮らしに思いを巡らし，神社、仏閣、現代の町並みにも歴史を感じられ毎回が楽しかったです。いつも、山梨に行くには、中央線の車窓から景色を楽しみながら、乗っていましたが、終盤近くになると、車窓から「あの道を歩いた」と視点が変わってきたのがわかります。これからは、山梨に出かけるたびに、皆様と歩き、時間を共有できたことを、思い起こすことでしょう。今回の甲州街道ウォークの企画をされた、関係者の皆様およびメンバーの皆様に私をゲストとして参加のお許し下されたことに御礼申し上げます。　平成25年10月20日

相原教男

甲州街道ウォーク「感想文」　浅見憲一

歩くのは大嫌いな私が、この「甲州街道ウォーク」には参加してしまいました。

住んでいる日野は甲州街道のどんな宿場町だったのだろうか、話に聞く「多摩川の渡し」とはいったい何処にあったのか、自宅の前を通っている「旧甲州街道」はやがてどんな所を辿るのだろうか、そんな身近な好奇心からの参加でした。はたして、実際に歩いてみると往時が偲ばれる場所も多く、大変興味深く参加することができました。歩いてみると感動の景色や思わぬ出会いもあり誠に楽しいものでした。勿論念入りな調査と現地案内、事前資料配布やきめ細かな連絡、写真撮影、ホームページへの掲載など支えていただけた方々の努力があったればこそと改めて感謝する次第です。さらには欠席が多かった私でしたが常に暖かく接していただきありがとうございました。また、私は甲州街道ウォーク終盤に「心筋梗塞」で入院いたしまして皆様に大変ご心配をいただきました。お陰様で体調も回復しました。とんでもないなどと言われ煙草もやめました。適度な運動も必要と言われております。お陰様で甲州街道ウォークで歩くの“大嫌い”も相当改善されましたので、適度な運動として絶好な次回企画「東海道ウォーク」にも是非参加させていただきたいと考えております。

「甲州街道歩き」の感想文　久しぶりに達成感を味わった甲州街道歩きだった。快晴の日本橋をスタート、好天に恵まれ中山道分岐点の下諏訪にメンバー全員でゴールできて素晴らしい道中歩きとなった。達成可能な目標として大丈夫だろうと思って参加したが、終盤に予想外の病気に見舞われ、断念せざるを得ないと思う事態になった。しかしメンバーの励ましもあり何とか一度も欠かさず完歩できたので感無量だ。今回の旅は、歩くだけでなく、神社、仏閣、史跡などに立ち寄り楽しさが倍増した。コニカミノルタ、ＮＥＣ、日野自動車、幼稚園などに立ち寄る体験も忘れ難い。最後の諏訪大社、木落とし坂をタクシーで巡るサプライズには、地元タクシーの運転手もマニアックぶりに驚いていた。自分も誰かに同じコースを案内して自慢したいと思ったほどだ。絶景もいろいろな場所で堪能したが、一番感動したのは、日野春駅の坂道からみた「雪をいただいた甲斐駒ヶ岳」の雄姿だった。今も、脳裏にはっきり浮かぶ。昼飯の場所もしっかり下見で確認されており、ありがたかったが笹子トンネル内での昼飯も思い出に残る。私にとっては、歩きのあとの「飲み会」もたいへん楽しかった。今回の旅は、二歳年をとってしまったにも拘らず元気なメンバー各位、特に竹島、中島、前北先輩のおかげでたいへん充実した楽しいものになりました。改めて感謝したい。

２０１３．１０．２３　伊藤

## まだまだ続く甲州街道

宇山治男

10月17日正午に、甲州街道の終点（甲州街道下諏訪宿・中山道合流地点）に無事到着した。参加出来なかった昨年一月の第三回目の「つつじヶ丘駅～分倍河原駅」も、駆け込みで二ヶ月前の8月2日に資料を頼りに歩き、なんとか完全踏破出来た。

その後、自宅付近の散歩コースの多摩川沿いに「万願寺の渡し」（国立市教育委員会）の碑を見つけた。場所は中央高速の下で、百米ほど上流の多摩川左岸のトイレ脇にあった。この碑によると、甲州街道は当初は段丘崖下を通っており、たびたび多摩川の洪水の影響を受けた。このため貞享元年（1684）の改修で「万願寺の渡し」→「日野の渡し」に移動した。第四回甲州街道歩きの際に見た「日野渡船場跡」の碑が移動後の甲州街道の渡し場の様です。ここでも川の氾濫等で街道の道筋が変化する事が、確認できました。

身近な府中や日野周辺でも、まだまだ甲州街道関連で調べたい所があります。更に甲州街道では、武田氏に関わる事象が多かったが、武田神社や新府城跡周辺等をゆっくりと回り武田一族に関連する史跡を訪ねてみたいと思っています。　以上

追記　尚、万願寺の渡しの碑の写真を入れて下さい。（68頁）

甲州古道のウオーキングを終わって、

天候に恵まれた平成23年11月20日に、日本橋を出発したウオーキングも途中猿橋では雷雨のため1時間の足止めに遭い、笹子峠では雨具着用での峠越えなどがありました、天候等の関係で初期の予定より二カ月遅れの到着となりましたが、途中怪我なども無く楽しい旅が出来ました。

途中の見どころは中島さんの資料のお陰で予習が出来、良く理解することが出来ました、中でも特に興味を持ったのは、甲府の街が二十万年前の八ヶ岳方面からの土石流が二百米も堆積し、その堆積物の上に出来た街であることに驚きである、手長神社、足長神社の名称は初めて聞く名前で諏訪地方固有の神社のようです、両方の神様が協力して諏訪湖で漁をしたなどは面白い話である、疱瘡神社なども昔の人が天然痘に苦しめられた様子を物語っています、それに諏訪神社が伊勢神宮や出雲大社と同等の神社であることに感心した。

生まれて初めての長距離歩行で、最初は完歩出来るか不安でしたが、回を重ねるうちに自信がつき物見遊山をしながらの歩行で、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

私が無事に完歩出来たのも竹島さん、中島さん、それに皆さんの協力のお陰と感謝しております。　以上

折本

## 「甲州街道を歩く」感想文

嶋崎　猛

千里の道も一歩からのたとえどうり、ついに53里の道のりを踏破しました。時に平成25年10月17日木曜日、昼時、甲州道、中山道合流碑地点、日本橋の基点から200キロ強の距離でした。まさかこの長い、長い甲州街道を歩こうとは夢にも思ってもいませんでした。中島さん、竹島さんの強力な行動力のたまものだと改めて認識いたしました。誰でもそうだったと思いますが、子供のころ遠足は大変楽しみな行事でしたね、この甲州街道歩きの前夜はどきどきそわそわの日が何回かあったのを楽しく思い出しています。山のなかの道や里山歩きは遠い昔の追憶の世界に引き込まれてしまうことがしばしばありました。特に蔦木宿あたりの遠景に雪山を望みながらの道程はなんともなつかしく心洗われる思いがこみ上げてきました。人馬の足でしか移動の手段がなかった昔の人々の過酷な生活環境、自然災害に対する大変な苦労、道端の碑文から察せられ心が痛みました、それに反し機械文明の便利な生活環境のなかにどっぷりつかり苦労知らずに生きている今を私たちは謙虚に感謝しなければと思います。また街道随所に歴史的建造物や歴史上の人物の活躍の模様にも触れ、往時の生活感を垣間見ることができました。（68頁に続く）

## 甲州街道ウオーク感想文

甲州街道を日本橋から53里、公称二百十一粁のウオークが完結しました。データによると実際に歩いた距離は二百九十粁になった様です。詳細な資料を作成し12名のグループが効率よく有名、無名の史跡を廻れたのはコースの全てを下見・確認して頂いた中島さんの熱意に因るところと改めて感謝するばかりです。無事故でトラブルもなかったこともなによりでした。これまで電車や車で通過するばかりだった所に初めて見る道や史跡を発見できました。日本橋から四谷を通って新宿へ歩くなどは此れまで考えたこともありません。新発見の連続でこれから先の道中への期待が膨らみました。その後毎回この期待は裏切られることなく距離だけを稼ぐウオークとは違うものとなりました。日野宿前後の大手メーカーの工場訪問もとても印象的でした。事前の根回しがあっての賜物です。真夏の下花咲宿の本陣は往時を偲ぶに十分な史跡でした。道中唯一の雨中ウオークとなった笹子峠越えもいまとなっては楽しい思い出です。甲府盆地に入ってからは道中と行き帰りの車中から眺めた櫛形山、鳳凰三山、甲斐駒ケ岳、八ヶ岳などの山々が見る角度を変え、四季を跨いで素晴らしい表情を見せてくれました。23か月に亘る道中記録がこんな素晴らしい冊子となったのは製本が趣味のひとつという前北さんの存在が有ったればこそと感謝いたします。

竹島久雄

## 甲州街道　完歩　感想文

中島征雄

まる2年掛かった街道歩き、皆様お疲れ様でした。如何だったでしょうか。せっかく歩くのだから、街道を外れた名所・旧跡も訪れても良いのかなと思い、市販のガイドブックよりも詳しい案内書を作ろうとしましたが、私の趣味の色が強くなり過ぎ、読みづらかったのではないかと反省しています。その拙い文を膨大な作業をして3冊の本に纏めて下さり、我々参加者への最高の記念品を作って下さった前北さんに、また、実施の企画から、文全体の校正もして戴いた竹島さんに感謝し、御礼を申しあげます。天候にも恵まれ事故も無く、こうして完歩できたのは、参加者皆さんの歩き切ろうという強い意志と後押しの結果と感謝いたします。思い出す場所は、お岩神社、NEC・日野（自）等の工場、暑い時の花咲宿、雨の笹子越え、甲州善光寺、甲斐駒ケ岳の雪景色、御柱木落し坂、諏訪大社上社・下社、帰りの電車の中での宴会等沢山あって書き切れません。時々、本を見返して思い出したいと思います。このウオークが、私の人生で最大の思い出・イベントになったことは間違いありません。「久し振りに大仕事をしたっ!!　!!」という感じです。2年間休まないように健康にも気を付けましたし、ボケ防止にもなりました。楽しかった。

## 甲州街道走破感想文

この2013年10月17日木曜日に大型台風が去って快晴に恵まれた日に最終の22回目甲州街道走破を12人の皆さんと無事に達成出来ましたことは小生とても嬉しく思ってます。ひとえに中島リーダーの素晴らしい企画力と実行力によるものでとても感謝いたしております。

小生は22回中20回の参加になりますが1回は甲子園と重なりもう1回はJR武蔵野線の電故で不参加になりましたが後悔しておりません。なぜならば参加した20回がとても新鮮に快適に江戸時代を思いながら主に甲州街道の旧道をハイクできました。

小生は29才まで武蔵野市吉祥寺の五日市街道に面した商家の次男でそこに住んでおりましたので小さな街道ですが戦後からその変遷を肌で感じて見てきましたが甲州街道とは規模と歴史が違いすぎているようです。

この甲州街道走破で唯一雨の日が笹子峠越えの日でした。なんとなく峠越えと言うと心がうきうきしてくるようで一番楽しみにしておりましたが残念な峠越えでした。

最後になりますが街道には沢山の神社仏閣等がありましたので今日までの健康と幸福に手を合わました。

中田　信義

丸二年掛けた街道歩きです。色々な天候に遭遇します。雪の舞う国立、雷雨で雨宿りの猿橋、バスと歩きの迷いでは街道歩きに徹してコースを完歩。猛暑の街道でガビチョウが死んでいた初狩の暑さ、ダウン寸前で木陰で一息付いたこと。雨と濃霧の笹子峠越え、雨が酷く一人笹子トンネルを歩く。美術館付近、残雪が多かったが歩きやすかった。しかし、韮崎の残雪は根雪の様で歩くのも大変でした。快晴の日野春下り、美しい南アルプスは印象に強く残った。標高の高い所は日差しは強いが湿度少なく気持ちよい。寒さを感じる自性院での昼食、七里塚で風を避け河原での昼食。わずか二百十一粁の間でも土地々々の特有な気象が良く分かる。人との触れ合いは何処から来たのの問いかけは多かった、調布の保育園の園長さんが発掘情報を教えてくれる。工事中の甲州街道を歩いたり、資料館の説明員が良くしゃべってくれる。垢抜けた老人集団と言われた。地元の人は良く喋ってくれるがゆっくり聞けない。歩いた所をバスでトレースできたことがまた新たな発見にもなった。中央線の各駅停車を十数往復して、各駅がおなじみ駅に変貌した。甲府を過ぎると人が減り人と合うのが稀になる。車と出会うが歩いている人は居ない。一緒に楽しく歩いた旅人達とリーダーの面倒見に感謝。　　前北勝司

大型台風が過ぎ去った肌寒い秋空の10月17日12時30分に甲州道終点（中山道合流）に立った、2年間掛けて完歩した達成感と安堵感が胸に込上げてきました。2年前に企画された時は軽い気持ちで参加しましたが完歩出来るかは半信半疑であった、実際に完歩し、前北さんの尽力で「本」になるとは「最高の思い出」となります。第1回日本橋をスタートし第22回下諏訪のラストまで中島さんの下調べに基ずく貴重なウオークガイドと各見所での絶妙な史跡の由来解説は周りの絶景とともに街道歩きの楽しさを十分に引き出してくれ、いつも次回が待ち遠しくなる2年間でした。また、NEC、コニカ、本陣、歴史館等との交渉も大変だったと思いますがこれにより一般には見る事の出来ない史跡を見る事が出来、一味違う街道歩きになりました。しかし、2年間の間には色々な出来事があり、2回不参加となりましたが仲間が後日に同じコースを歩いて下さり、コースを繋いで完歩する事が出来ました、仲間に「感謝」です。本が好きで時代物を読んでいると今回の甲州道歩きで出会った場所（宿、古道、川、寺、城、戦場等）が出て来て以前より楽しみながら読む事が出来ます、次にどんな本でどんな場面で出会えるか私の街道歩きは続きます。終わりに甲州道歩き「大満足でした」。平成25年10月　　三浦繁雄

## 甲州街道を歩き終えて

八木　閲三

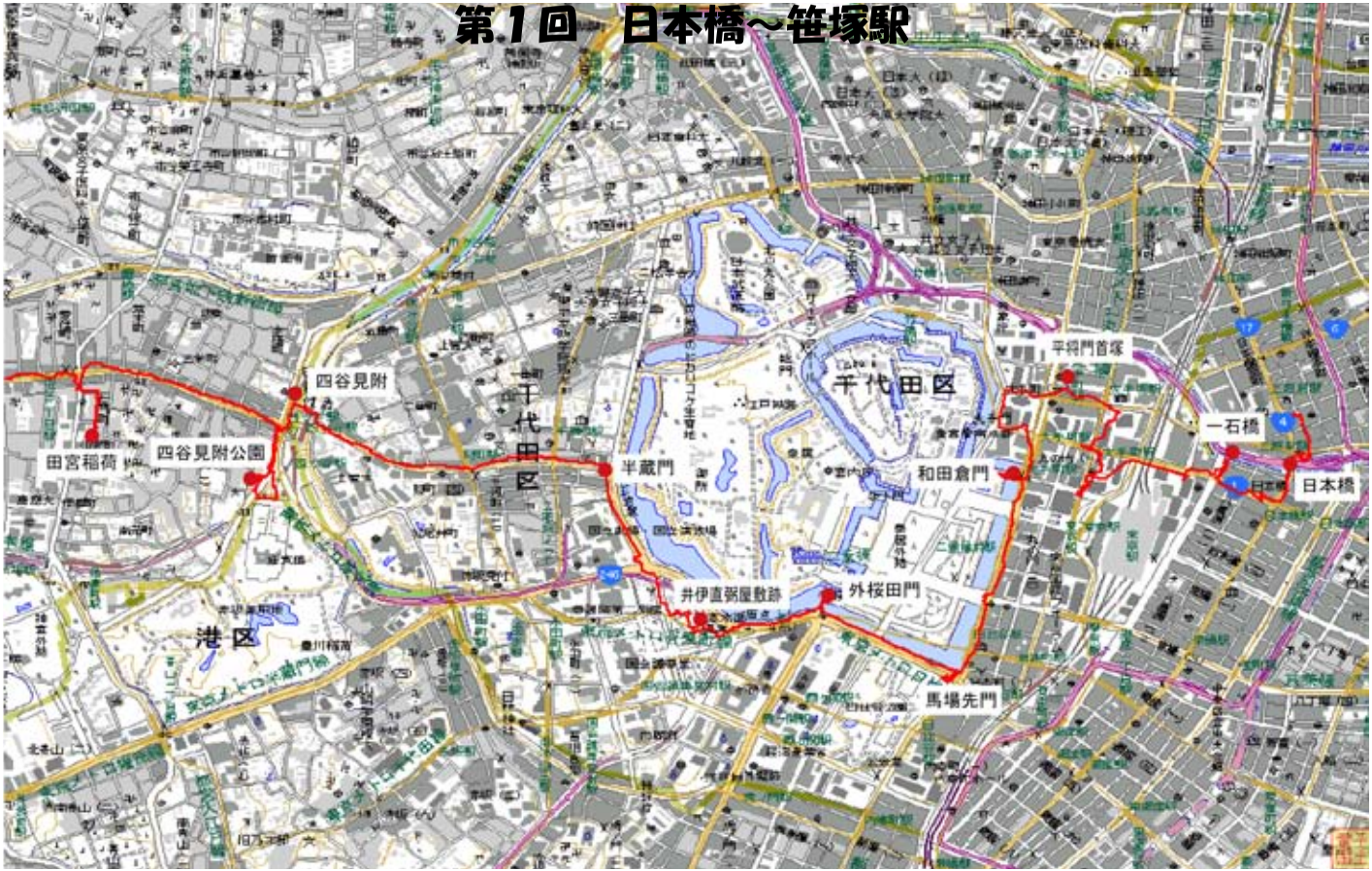
私は高尾駅東方の甲州街道に近い処に住んでおり、かねてから街道を歩いてみたいと思っていました。しかし、12年前に心臓弁膜の手術をしていることもあり一人で行軍する自信などありません。そんな折に幹事さんからお誘いがあり、二つ返事で参加をお願いしました。22回にわたる街道歩きを終えた今、日本橋から下諏訪までの道程を振り返ると、気候の良い日ばかりではなく寒い日あり暑い日あり、脚の疲れをこらえて歩き続けたことを思い出します。私にとって甲州街道歩きの楽しみは3つありました。1つは事前に送られてくるウォークガイドと揺籃社の本を読むことです。本ではコースの地図と写真を見ながら文章を読むと大方のイメージが湧いてきました。一方、ウォークガイドは中島さんが現地を下見して四方に目配りが効いており、まさに活きた手引でした。2つ目の楽しみは、神社仏閣や宿場跡などを前にして説明を聞くことです。中島さんの解説を聞いて「なるほど、そうだったのか！」と合点のいくことが度々ありました。3つ目の楽しみは、往復の列車内での談笑です。山行の思い出や趣味のあれこれ、自分たちの健康の話題、子や孫の話しなど、お互いの人生の一端を知り共感できたことです。以上3つの楽しみを与えていただいた世話役の方々と仲間の皆さん、そして甲州街道の神々に感謝します。

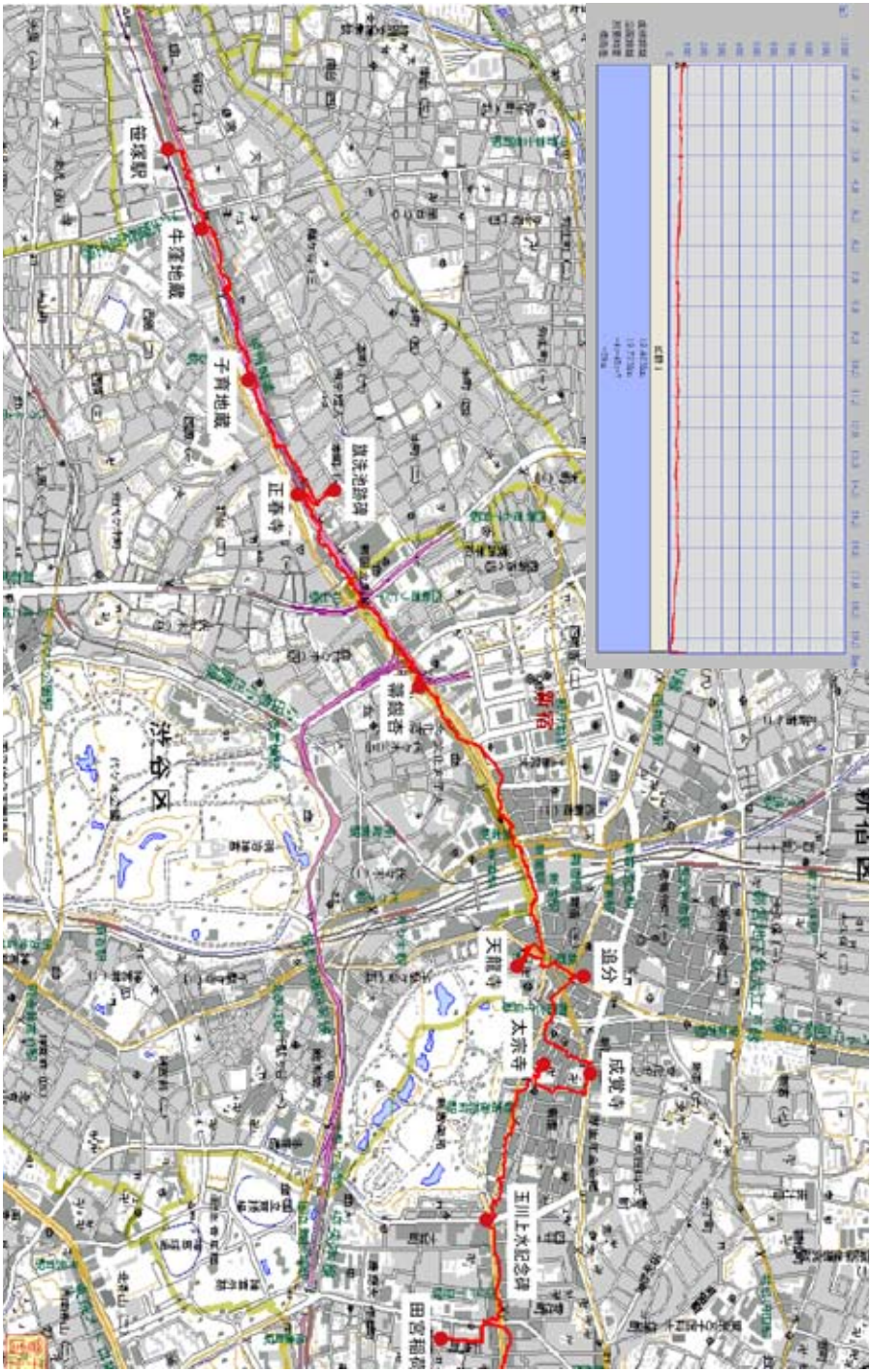
（嶋崎さんの続き）日野宿、小原宿、上諏訪宿の立派な本陣の現存、甲府盆地珍しいの玉道祖神や富士講にみる人々の信仰心の深さに敬服の念を熱くしました。またこの甲州街道歩きは山の美しさをしみじみ味わうことができました、勝沼葡萄郷駅からの南アルプス白峰三山の雪景色、日の春、長坂あたりからの鳳凰三山、甲斐駒の勇姿、振り向いたさきにやさしい八ヶ岳、甲州街道は私にとっては山岳美の観賞道でもありました。最後に甲州街道歩きの記録、製本の編集に尽力頂いた前北さんに心から感謝申し上げます。

# 甲州街道を歩く
# 軌跡地図帳

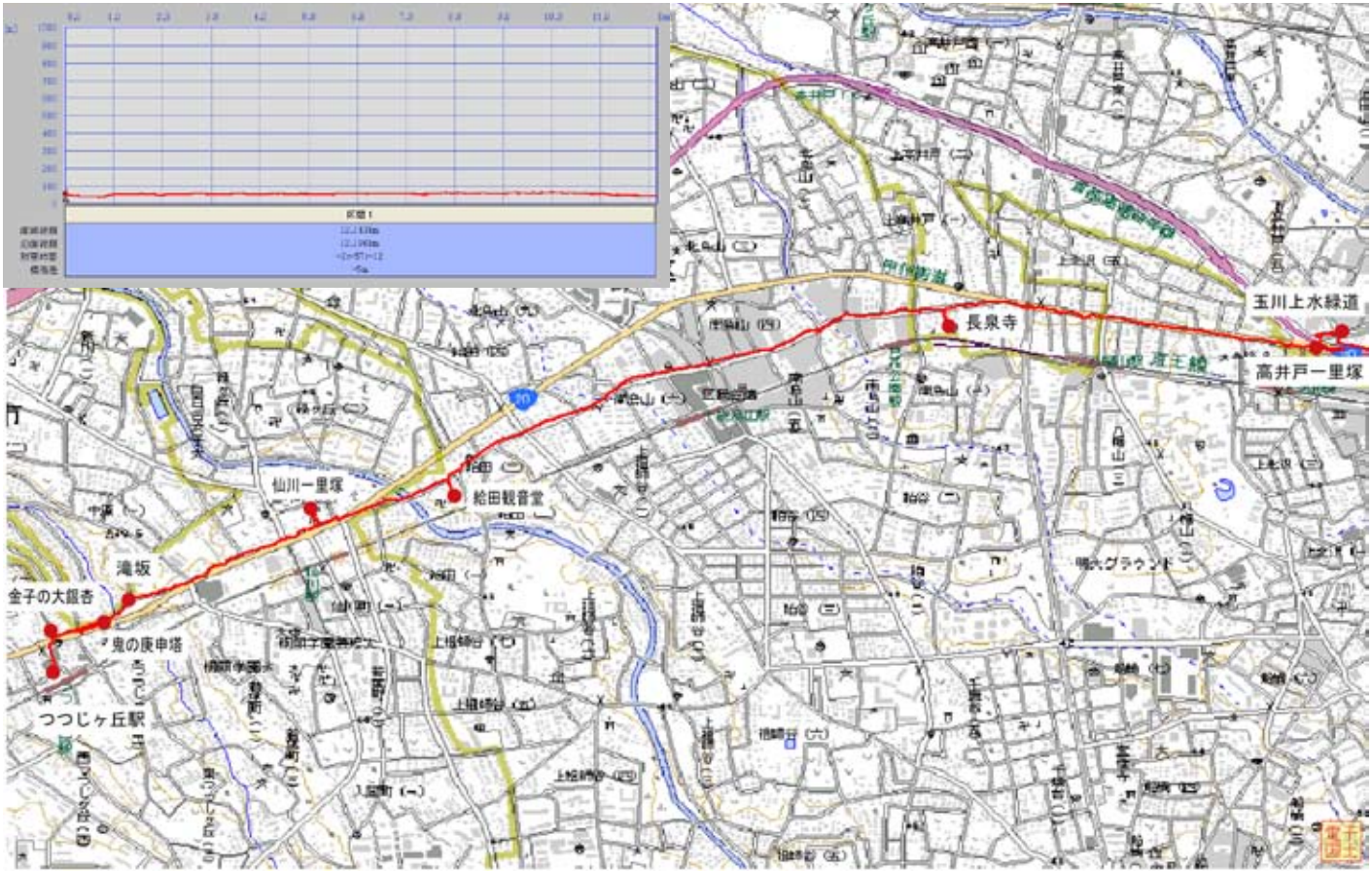
この地図はGPSにより歩いた軌跡をKASHMIR 3Dにより作成したものです。歩いた距離をおよそ半分にして地図を作成していますので、縮尺は不統一です。

# 第1回　日本橋～笹塚駅

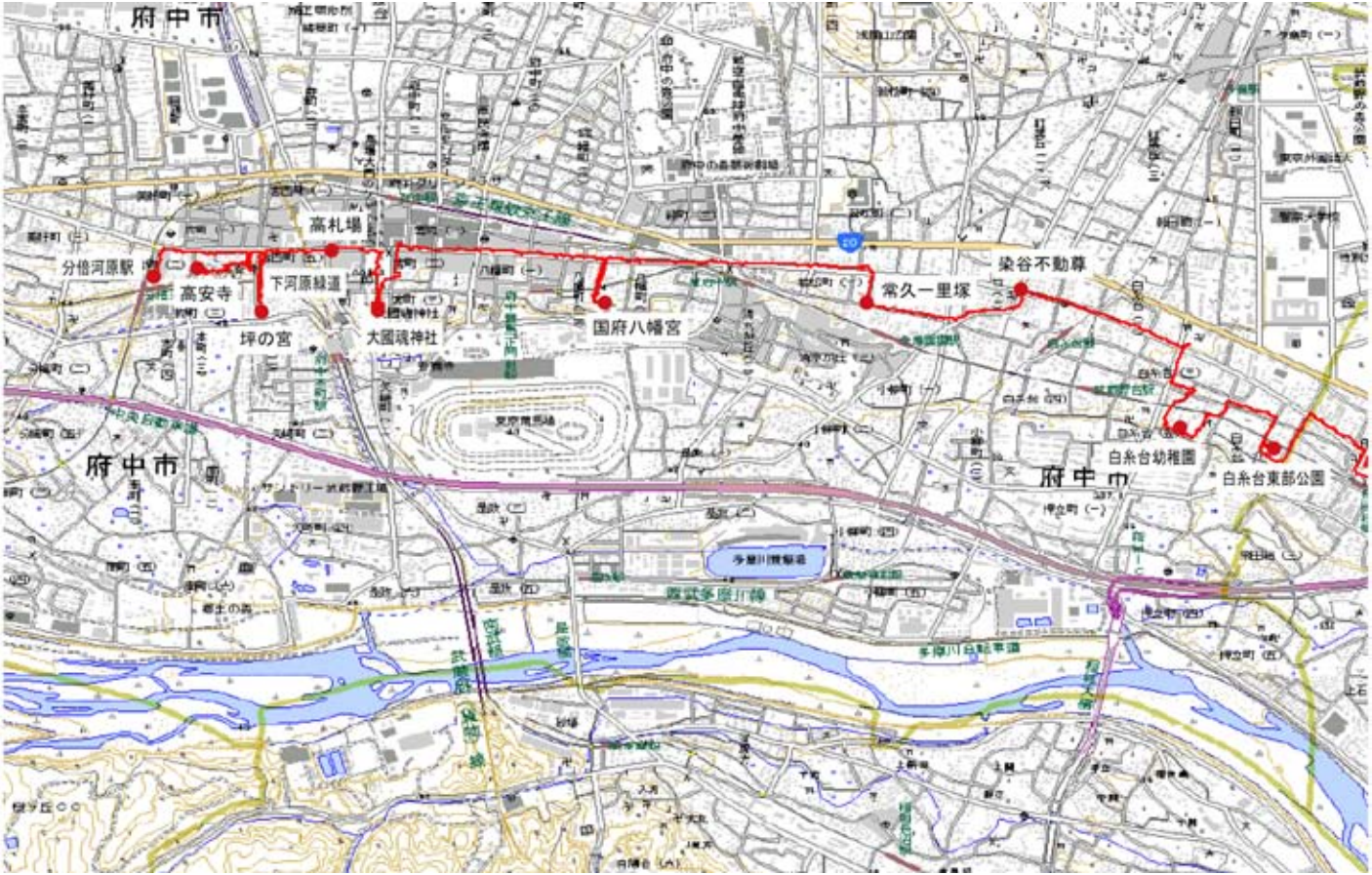

四谷見附
田宮稲荷
四谷見附公園
千代田区
半蔵門
井伊直弼屋敷跡
外桜田門
和田倉門
馬場先門
平将門首塚
一石橋
日本橋
港区


新宿区
渋谷区
田園都市線
玉川上水記念館
成覚寺
太宗寺
天龍寺
追分
新宿駅
新宿三丁目駅
新宿御苑前駅
正春寺
千駄木駅
千駄木駅
千駄木駅
千駄木駅

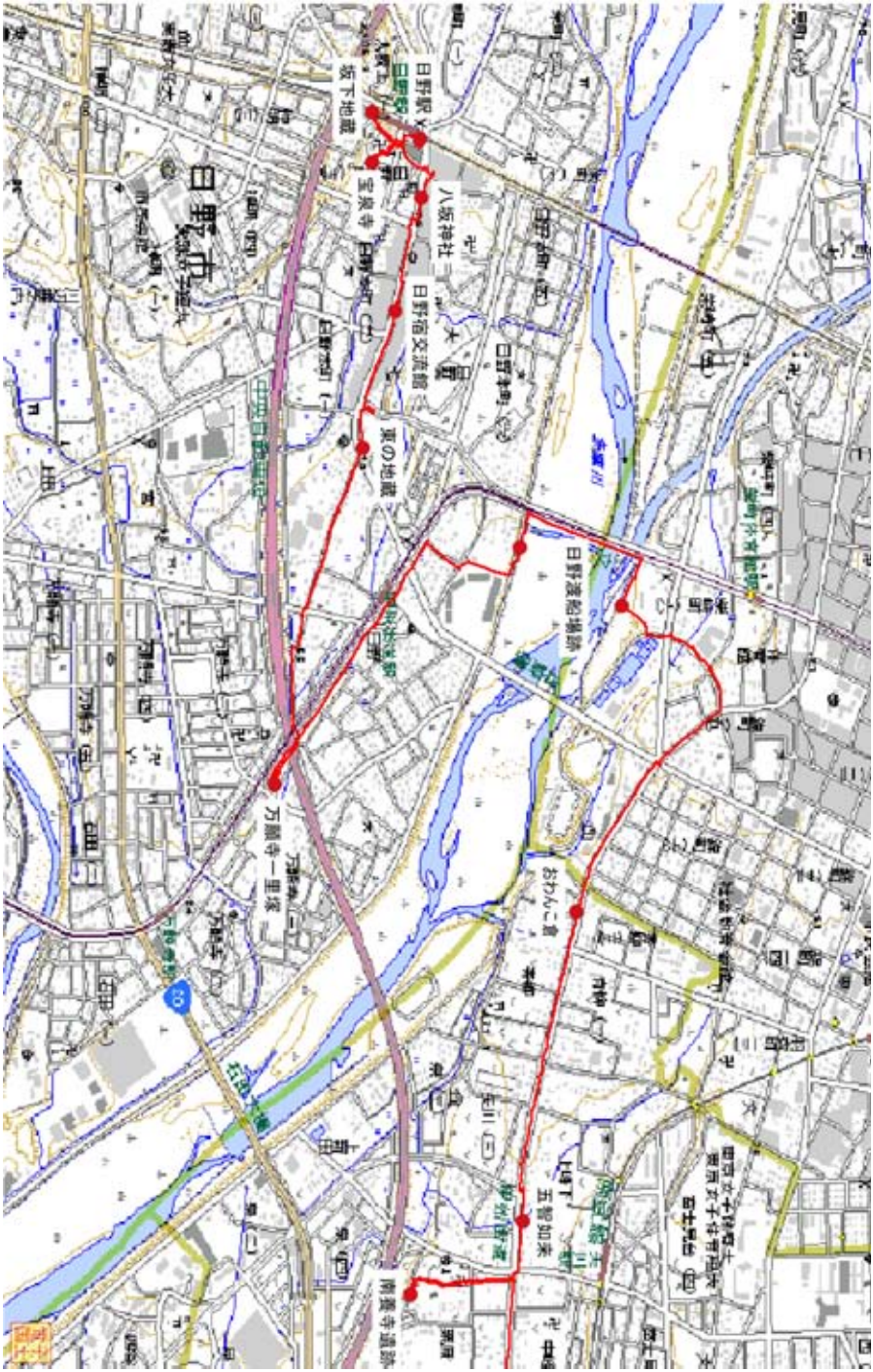
# 第2回　笹塚駅～つつじヶ丘


玉川上水緑道
長泉寺
高井戸一里塚
仙川一里塚
給田観音堂
滝坂
金子の大銀杏
鬼の庚申塔
つつじヶ丘駅

# 第3回　つつじヶ丘～分倍河原

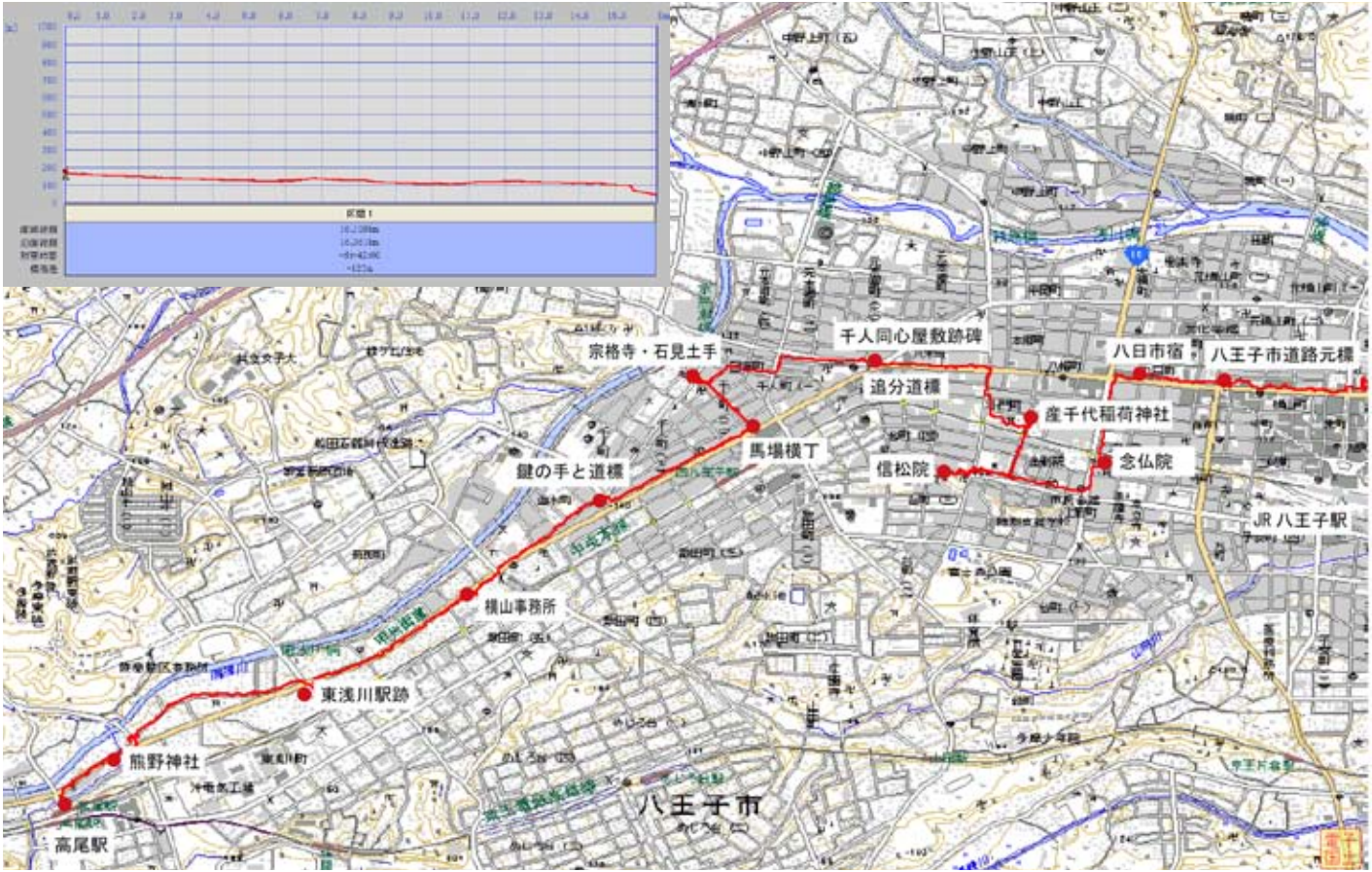

府中市
高札場
分倍河原駅
高安寺
下河原緑道
坪の宮
大國魂神社
国府八幡宮
常久一里塚
染谷不動尊
白糸台幼稚園
白糸台東部公園
府中市
府中市

# 第４回　分倍河原駅～日野駅


日野駅
日野宿交流館
八坂神社
宝泉寺
鉄下地蔵
東の地蔵
日野渡船場跡
おけんこ橋
五番切通
万願寺一里塚
万願寺通跡
日野市

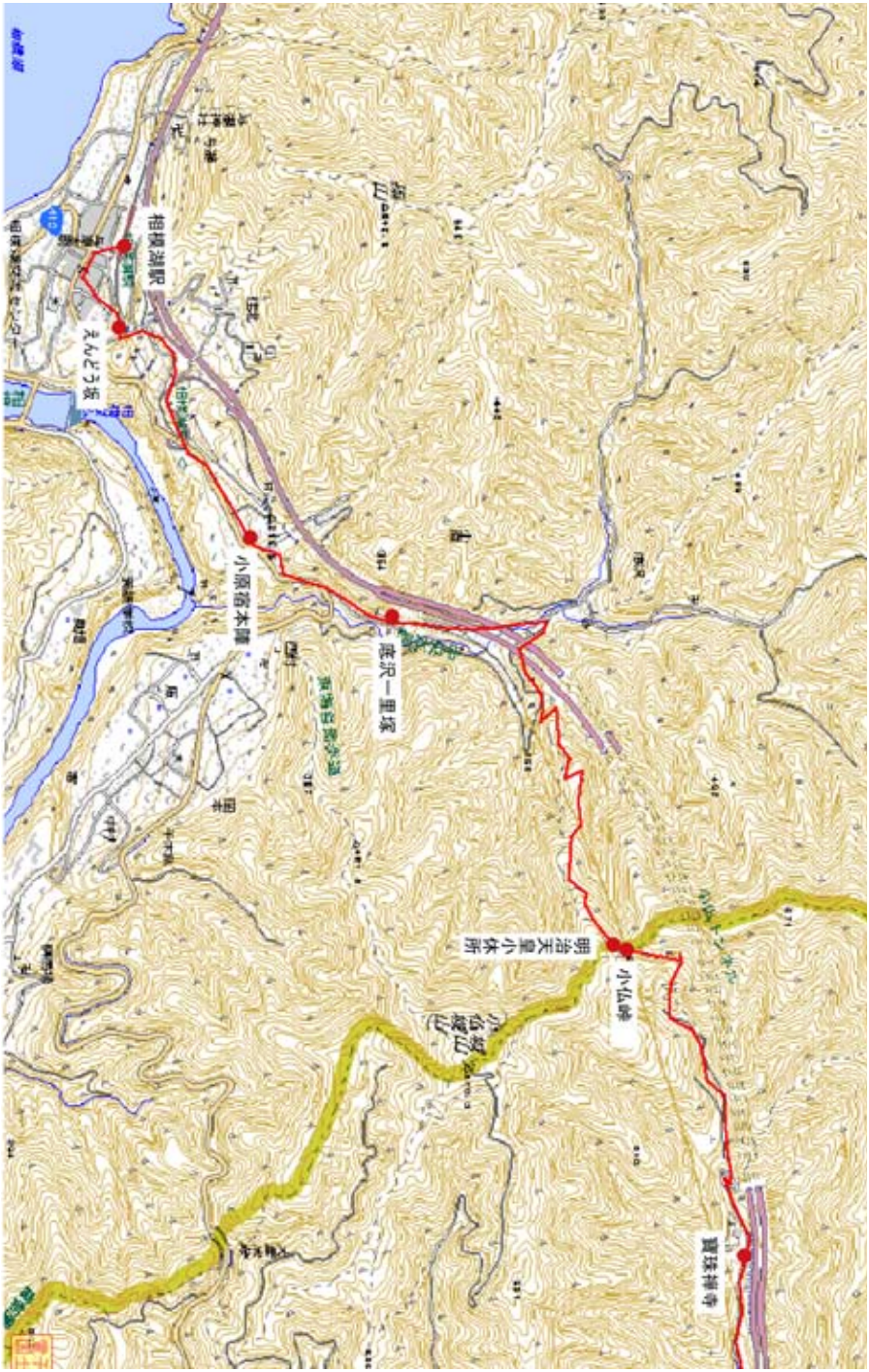
# 第５回　日野駅～高尾駅

八王子市
日野駅
高幡山 88ヶ所石碑
日野市
上人塚（日野自動車）
富士塚（コニカミノルタ）
竹の鼻一里塚・永福稲荷
大和田橋
大和田町旧道の道標
大鳥神社
日野市


宗格寺・石見土手
千人同心屋敷跡碑
八日市宿
八王子市道路元標
追分道標
産千代稲荷神社
馬場横丁
信松院
念仏院
鍵の手と道標
JR八王子駅
横山事務所
東浅川駅跡
熊野神社
高尾駅
八王子市

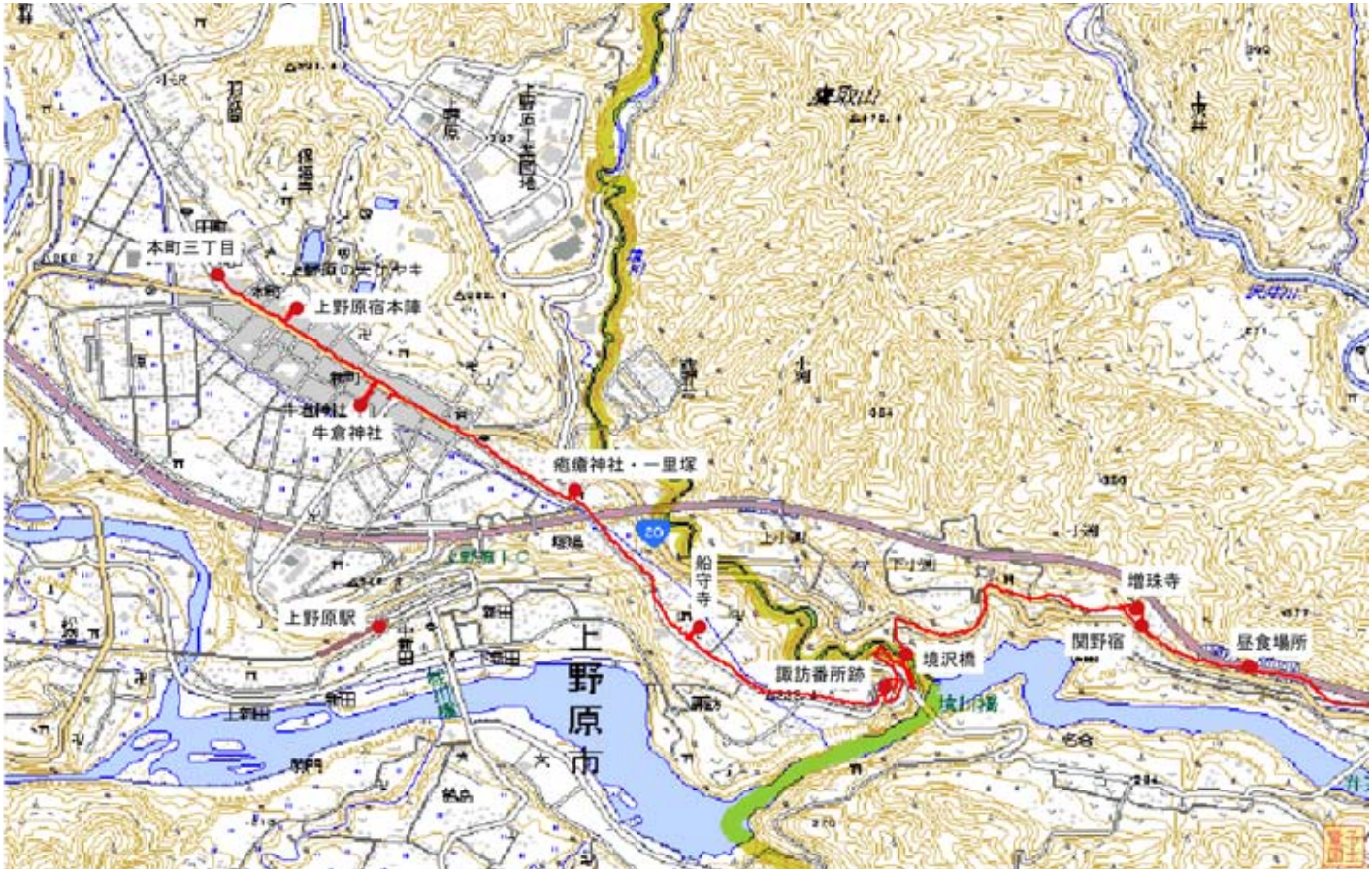
# 第６回　高尾駅～相模湖駅

小仏宿
大下バス停
湯の花トンネル
蛇滝茶屋
念珠坂・五基碑
小仏関所跡
高尾駒木野庭園
両界橋
高尾駅
高尾山口駅
高尾登山電鉄
エコーソフト


善光寺
小仏峠
小仏峠
善光寺小学校
戸倉沢一里塚
小仏宿本陣
えんどう坂
坂城駅

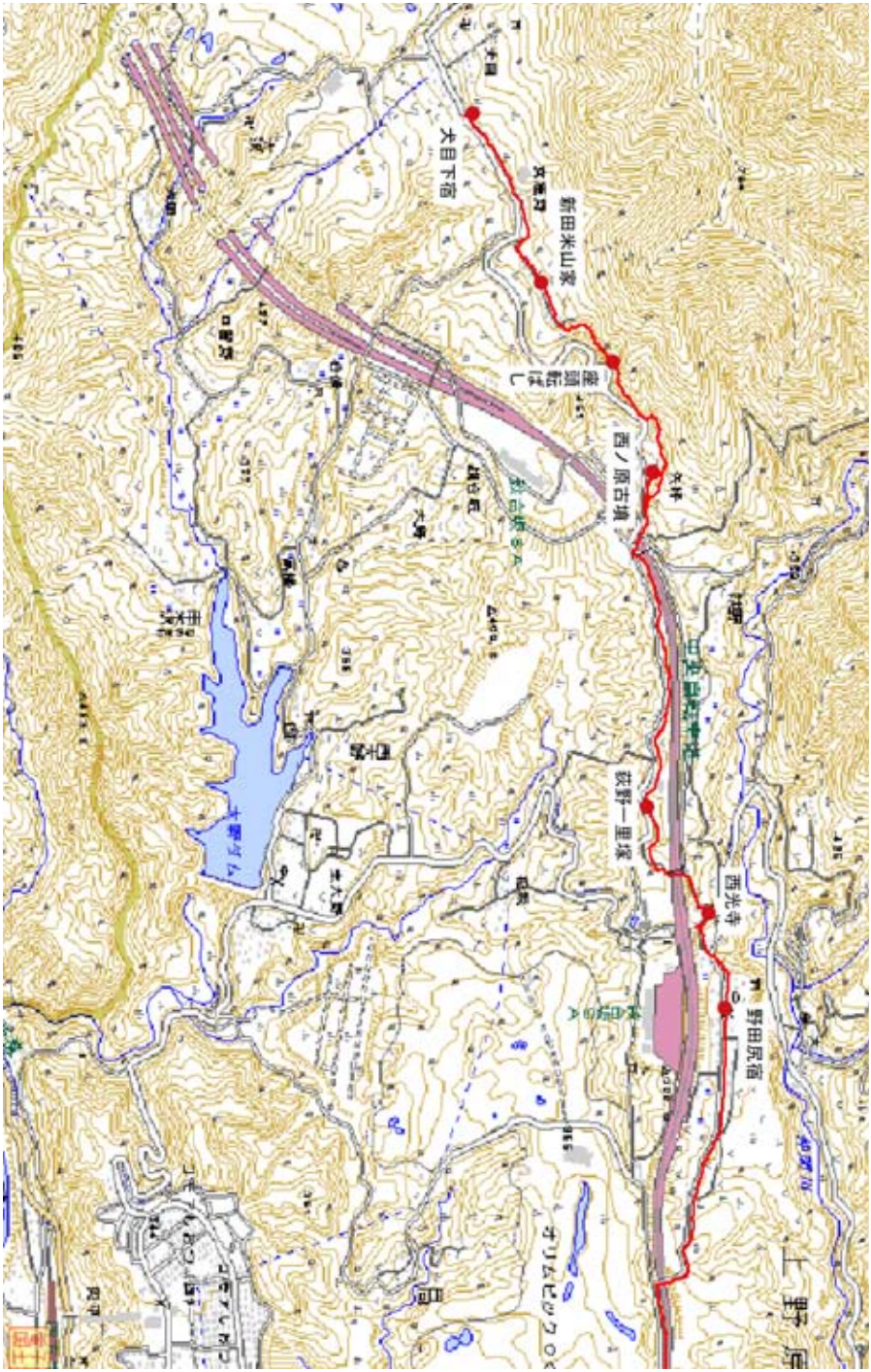
# 第７回　相模湖駅～上野原

緑区
相模原市
貝沢の一里塚跡
与瀬神社
与瀬
慈眼寺
相模湖駅
観福寺
網戸
コルフ通
藤野駅
藤野の一里塚
吉野宿高札場
吉野宿本陣
吉野
相模湖


本町三丁目
上野原宿本陣
牛倉神社
疱瘡神社・一里塚
上野原駅
上野原市
船守寺
諏訪番所跡
境沢橋
関野宿
増珠寺
昼食場所

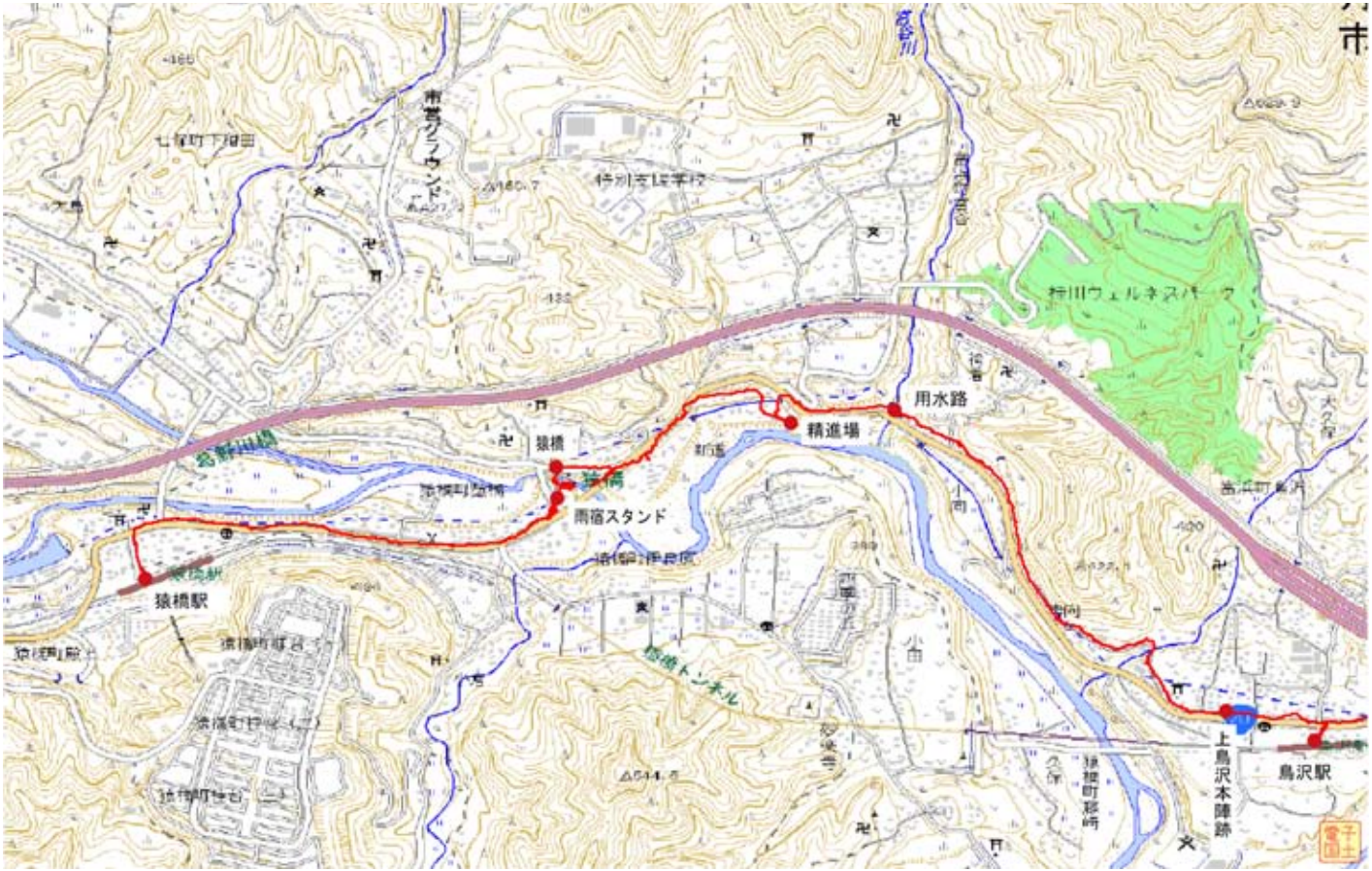
# 第８回　上野原～犬目下宿

野原市
大棚
長峰砦跡碑
大棚観音堂
大棚一里塚跡
鶴川
鶴川神社
神社下で小休止
鶴川の渡し
鶴川橋
本町三丁目
木食白道上人
上野原駅

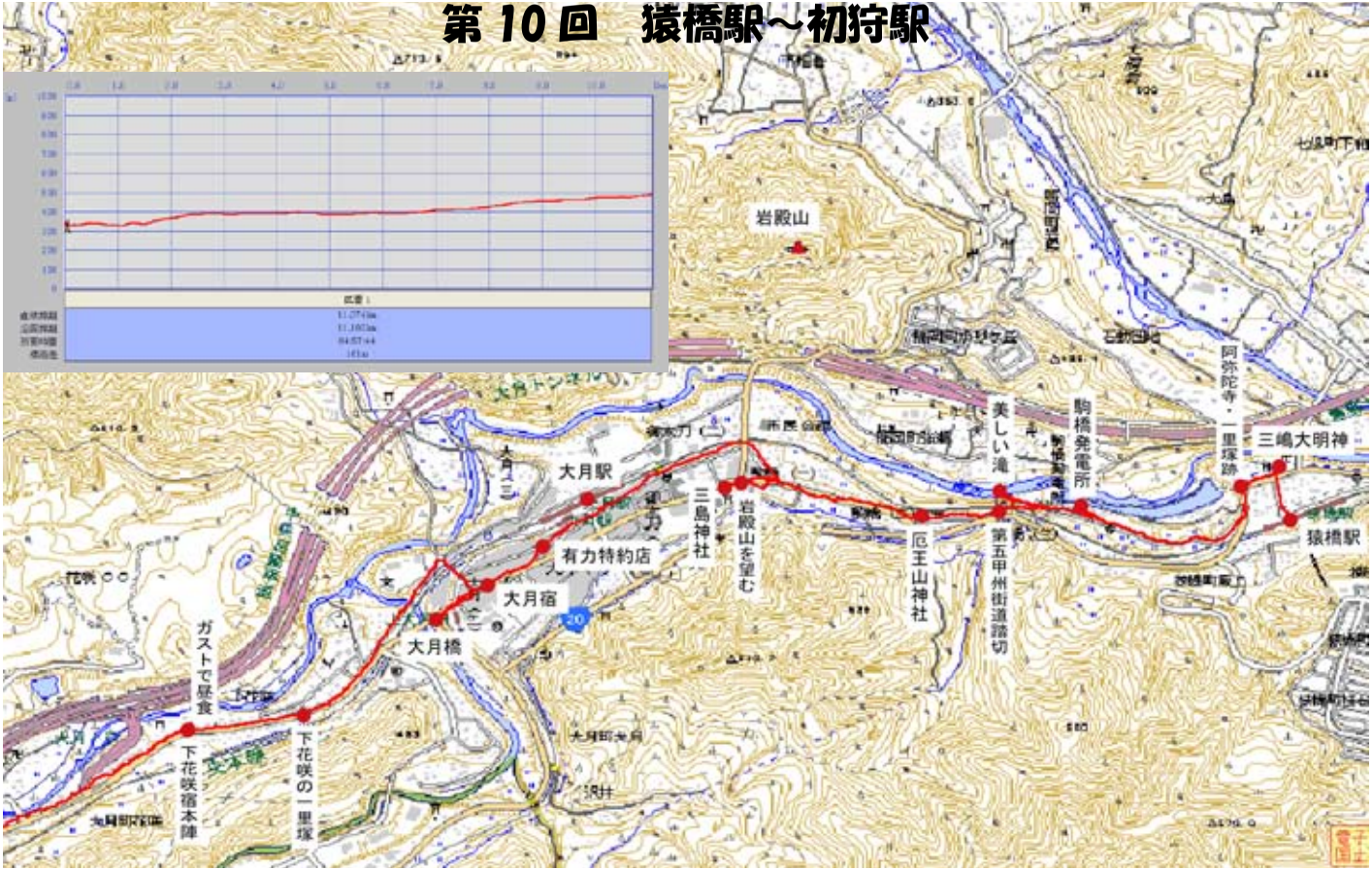

野田尻宿
西光寺
荻野一里塚
西ノ原古墳
新田米山峠
大目下宿

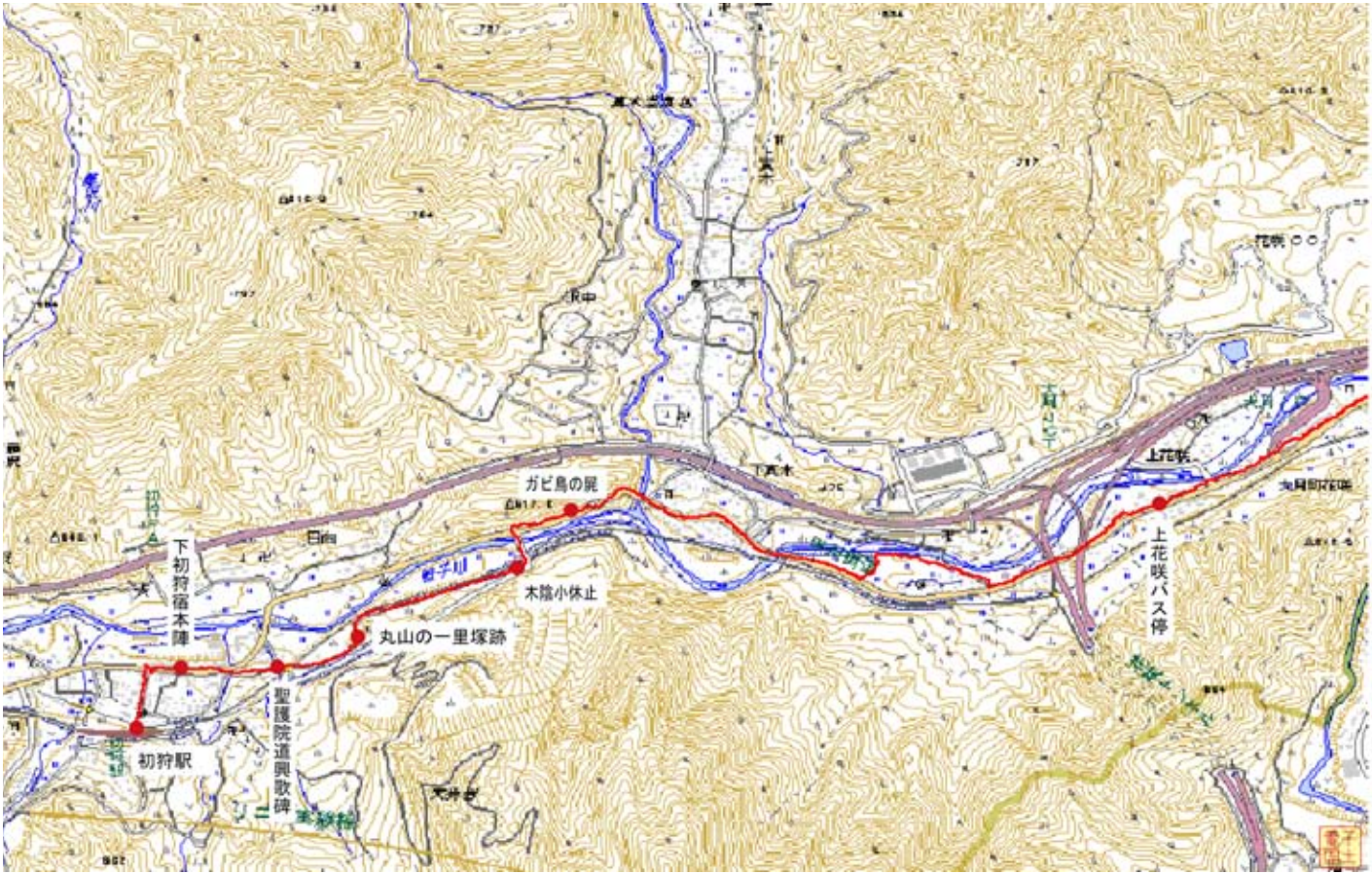
# 第9回　犬目下宿～猿橋駅

犬目下宿
犬目の兵助の墓
犬目宿
兵助の生家
寶勝寺
白馬不動尊
君恋温泉
恋塚一里塚
山住神社
石畳の道
山谷バス停
小休止場所
中野神社入口
福地八幡神社
上鳥沢本陣跡
鳥沢駅
中野トンネル
御前山
サンメンバーズCC


用水路
精進場
猿橋
猿橋
雨宿スタンド
猿橋駅
猿橋トンネル
上鳥沢本陣跡
鳥沢駅

# 第 10 回　猿橋駅～初狩駅

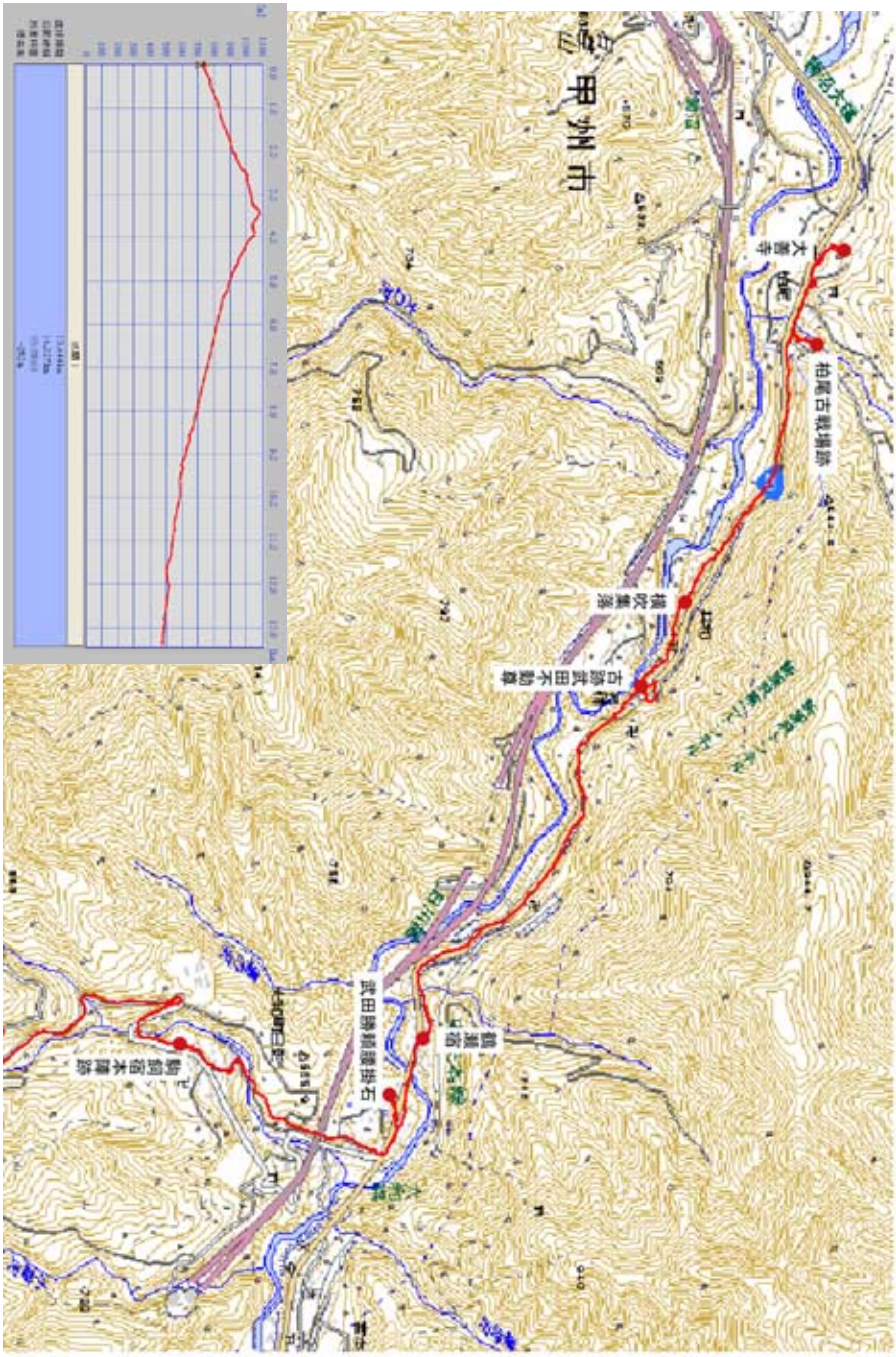

岩殿山
大月駅
有力特約店
大月宿
大月橋
三島神社
岩殿山を望む
厄王山神社
第五甲州街道踏切
美しい滝
駒橋発電所
阿弥陀寺・一里塚跡
三嶋大明神
猿橋駅
ガストで昼食
下花咲宿本陣
下花咲の一里塚


ガビ鳥の屍
木陰小休止
丸山の一里塚跡
下初狩宿本陣
初狩駅
聖護院道興歌碑
上花咲バス停
上花咲
下大木
日向

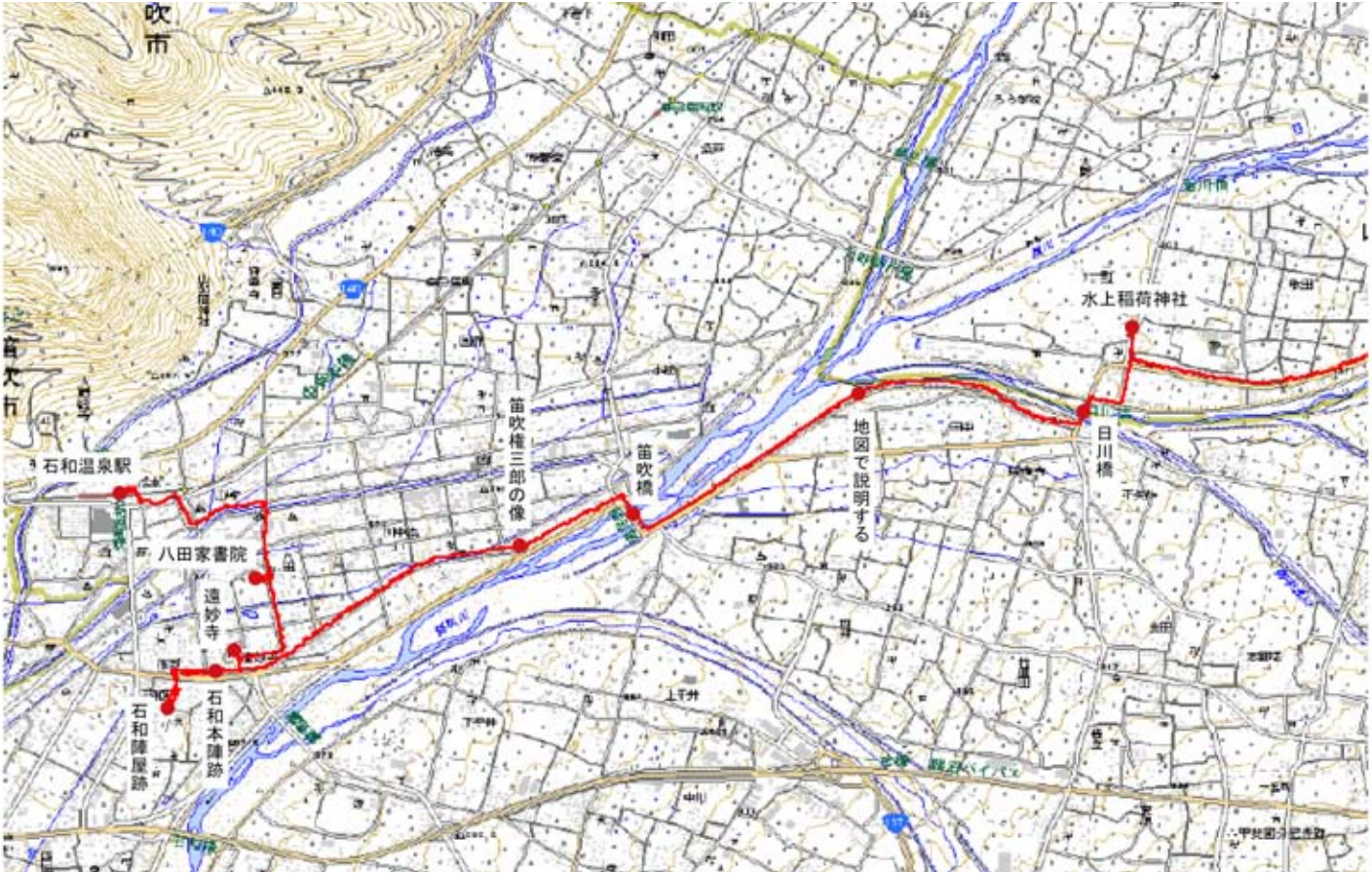
# 第 11 回　初狩駅～笹子新田下

大月市
中央自動車道
笹子町
笹一酒造
旧街道線路で寸断
108 釈標識
普明院一里塚跡
笠懸地蔵
黒野田宿
央本線
阿弥陀海道宿
葦ケ池跡
笹子新田下
笹子川
奥野沢川

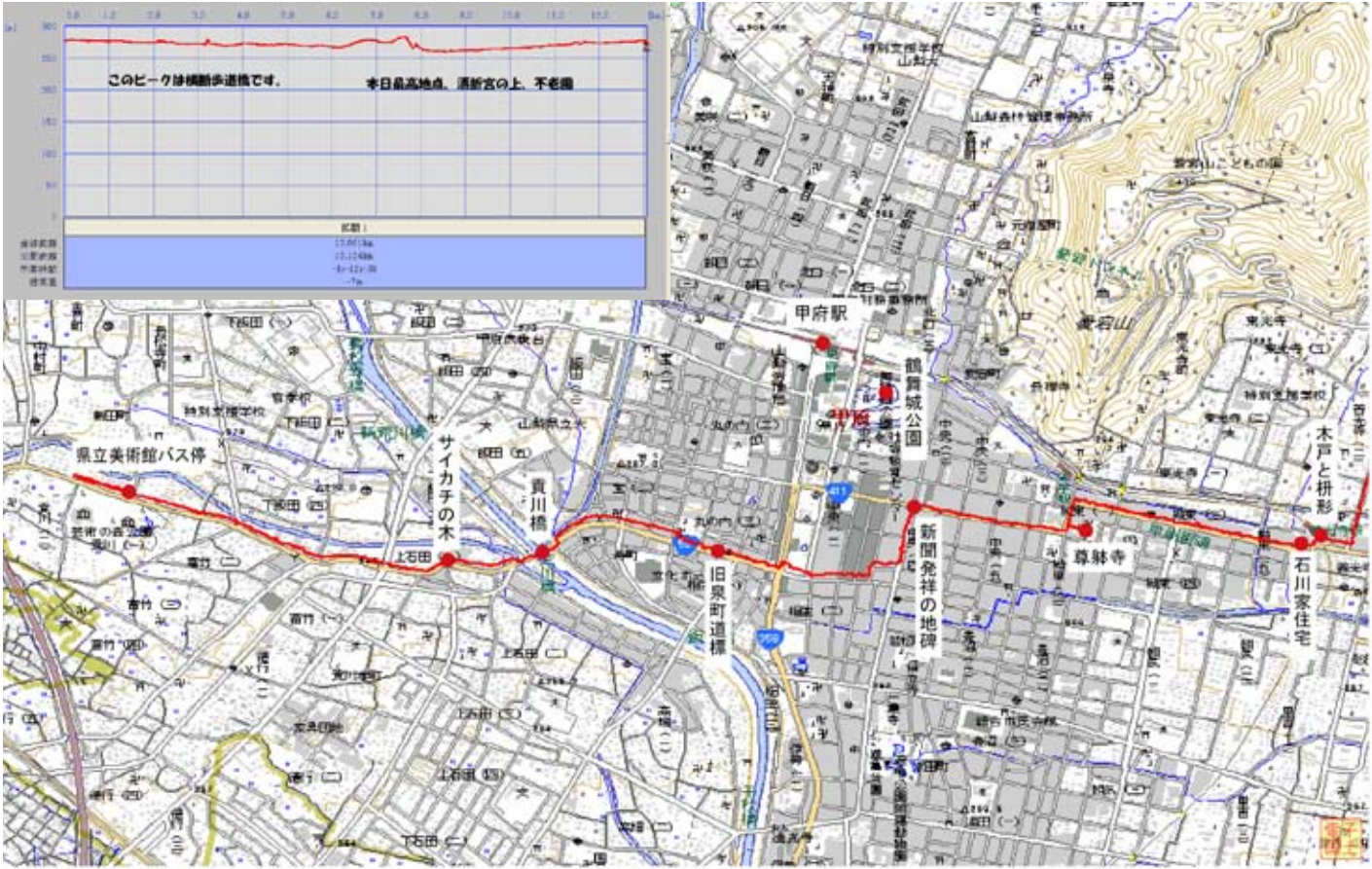
# 第 12 回　笹子新田下～大善寺


甲州市
柏尾古戦場跡
大善寺
篠交差点
中央線田野大橋橋
武田勝頼墓所
勝頼の墓
勝頼の墓
勝頼の墓

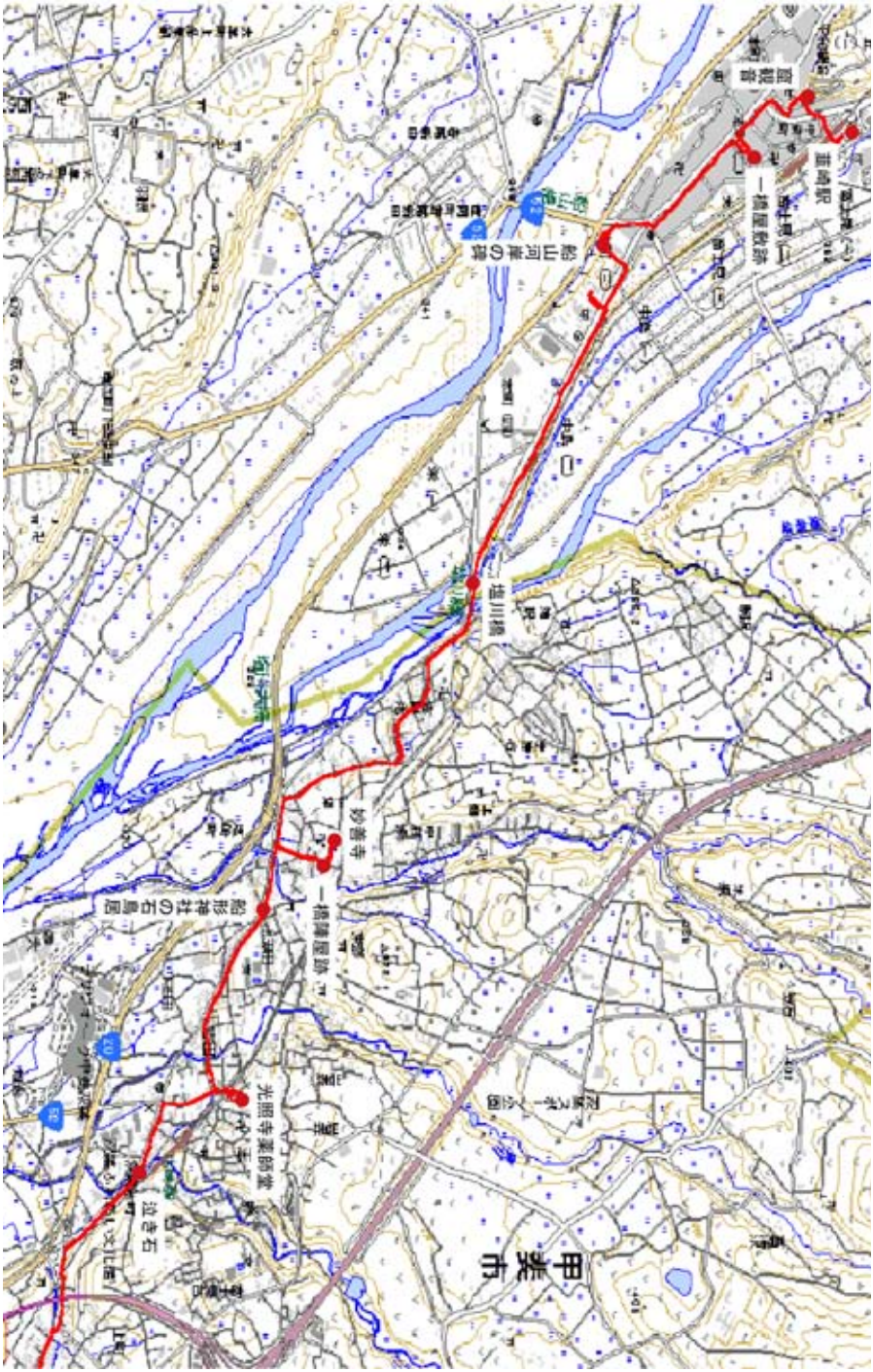
# 第13回　大善寺～石和温泉駅


石和温泉駅
八田家書院
遠妙寺
石和陣屋跡
石和本陣跡
笛吹権三郎の像
笛吹橋
地図で説明する
日川橋
水上稲荷神社

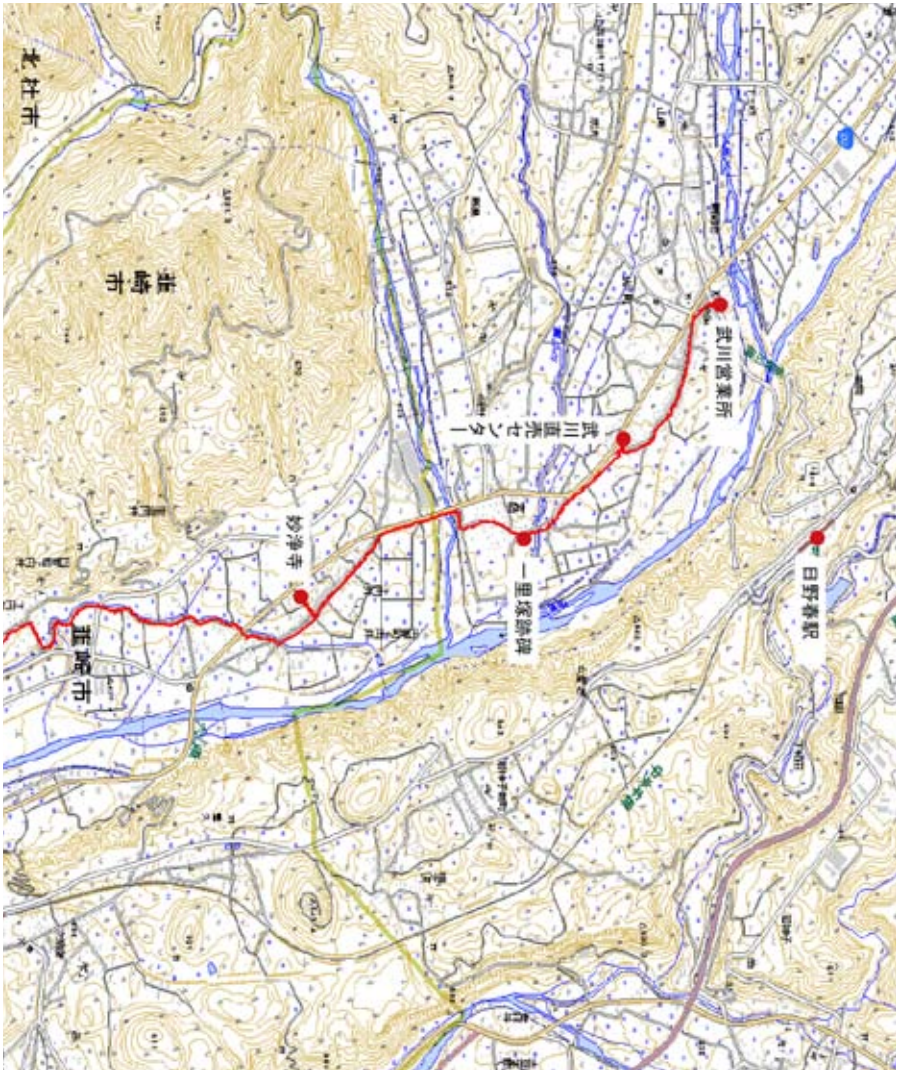
# 第 14 回　石和温泉駅～県立美術館


このピークは横断歩道橋です。
本日最高地点、酒折宮の上、不老園
甲府駅
鶴舞城公園
新聞発祥の地碑
尊躰寺
木戸と枡形
石川家住宅
旧泉町道標
貞川橋
サイカチの木
県立美術館バス停

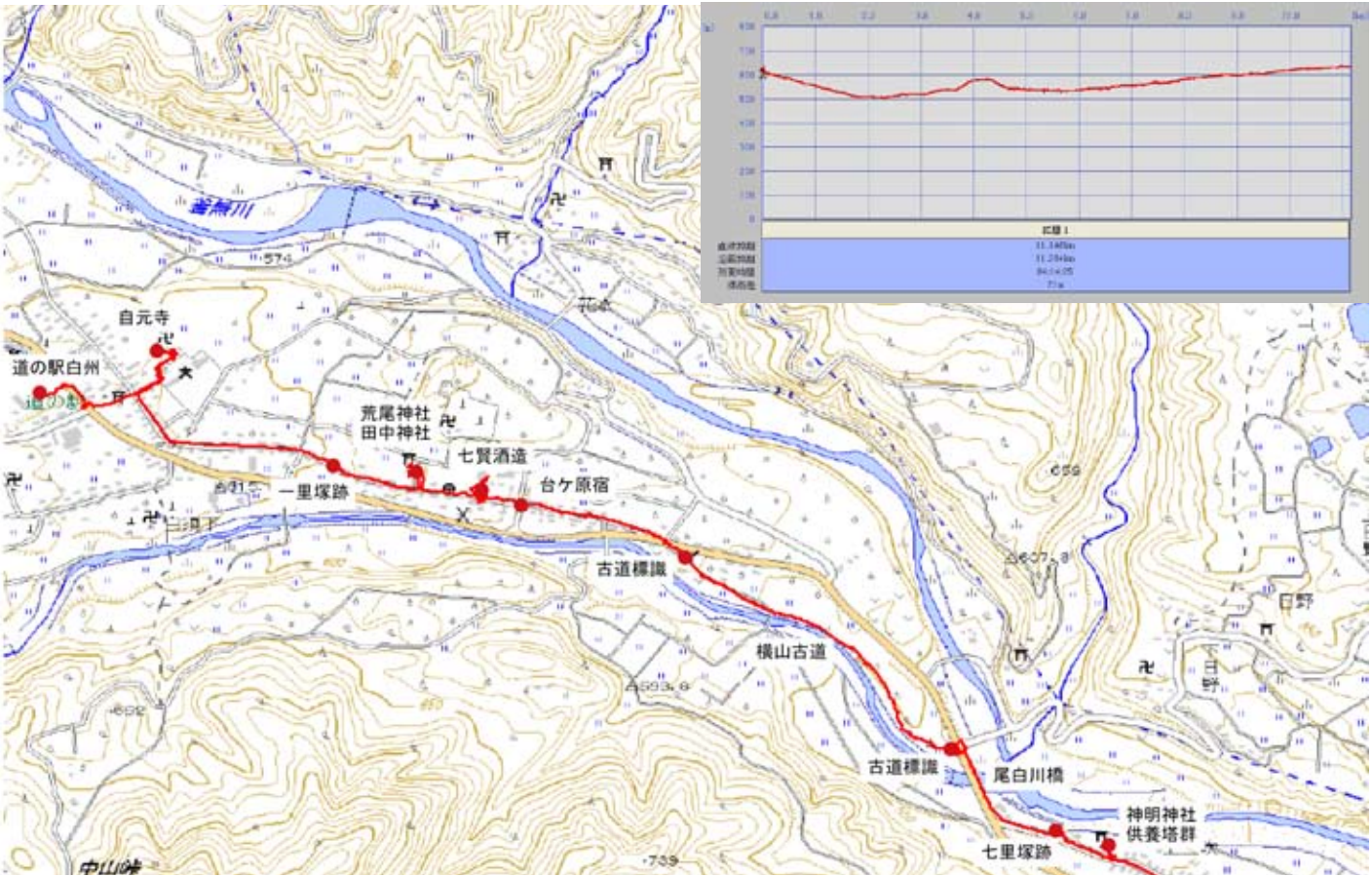
# 第15回　県立美術館～韮崎駅


甲斐市
光明寺薬師堂
一蓮寺
一蓮寺
一蓮寺

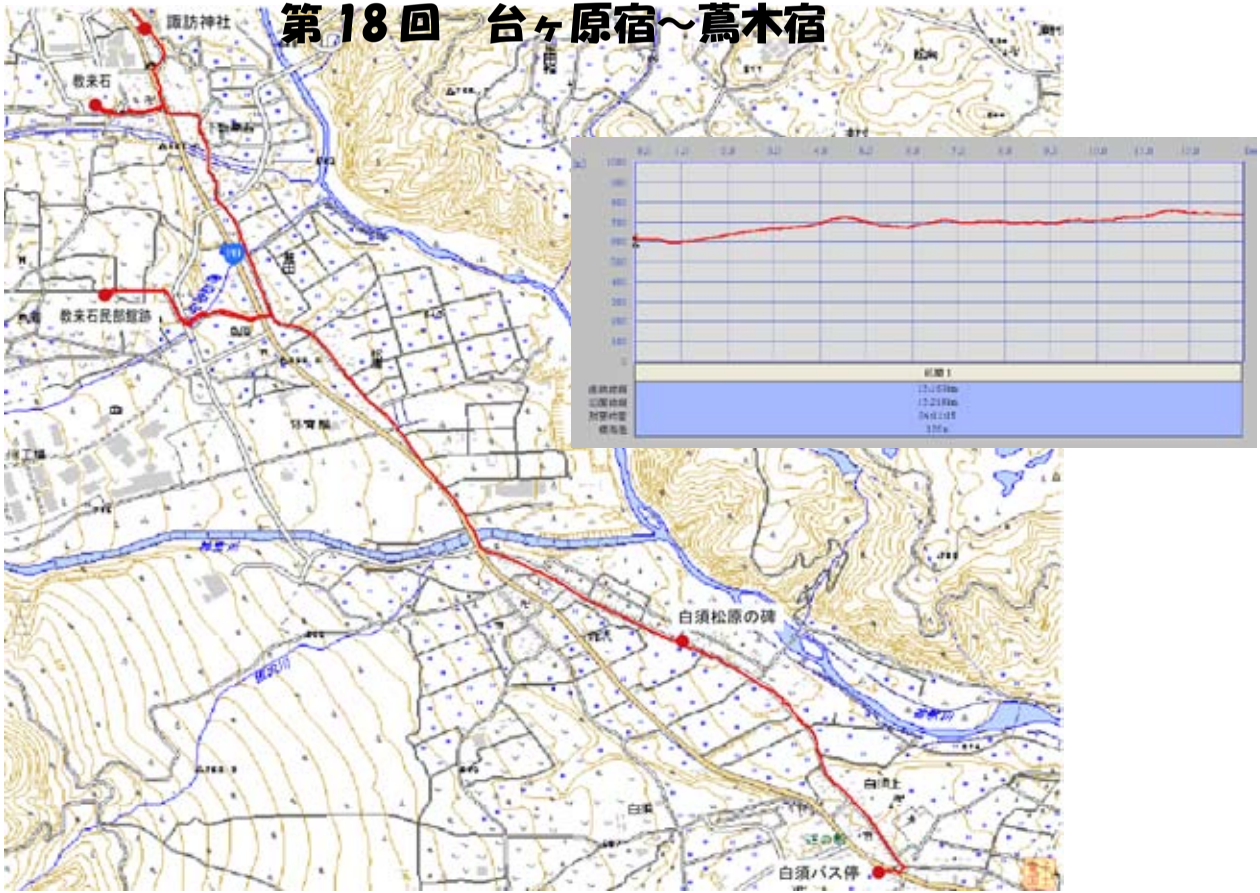
# 第16回　韮崎駅～武川駐在所

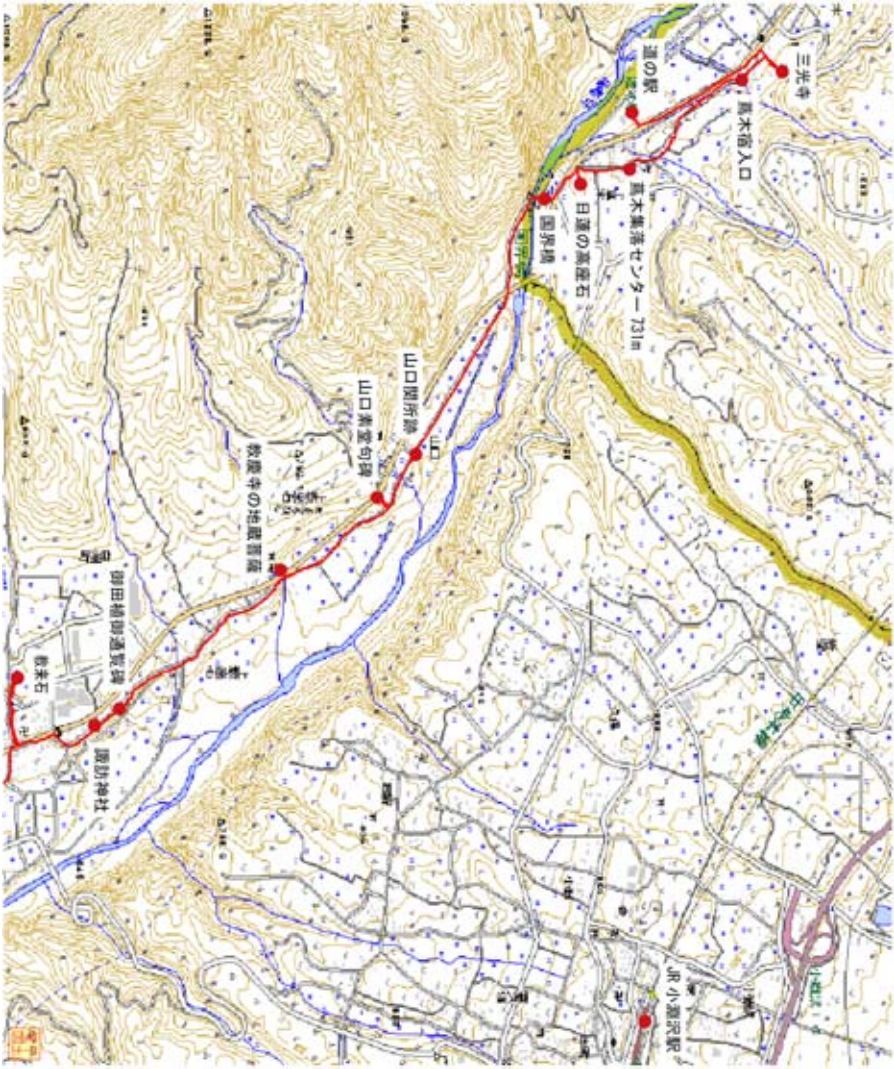

自野春駅
武川営業所
武川三郎
さくらタウン
一里塚橋
妙浄寺
長野市
長野市
大岡市

# 第 17 回　武川駐在所～台ヶ原宿


自元寺
道の駅白州
荒尾神社
田中神社
七賢酒造
一里塚跡
台ケ原宿
古道標識
横山古道
古道標識
尾白川橋
神明神社
供養塔群
七里塚跡
日野

# 第18回　台ヶ原宿～蔦木宿



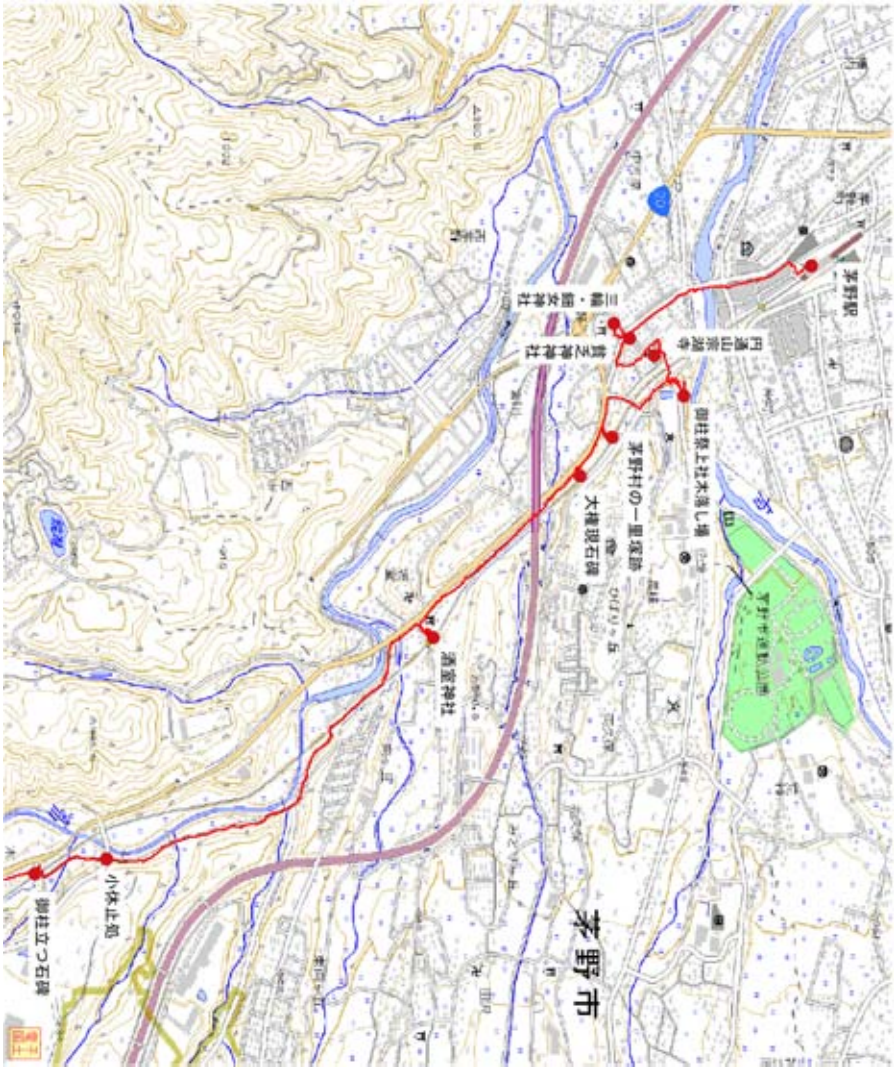

三光寺
長木宿入口
道の駅
長木集落センター 731m
日蓮の高座石
国界橋
ミロ国界碑
ミロ集落句碑
牧屋寺の地蔵菩薩
御田神御遷宮碑
国防神社
長木石
JR 小淵沢駅

# 第 19 回　蔦木宿～金沢宿

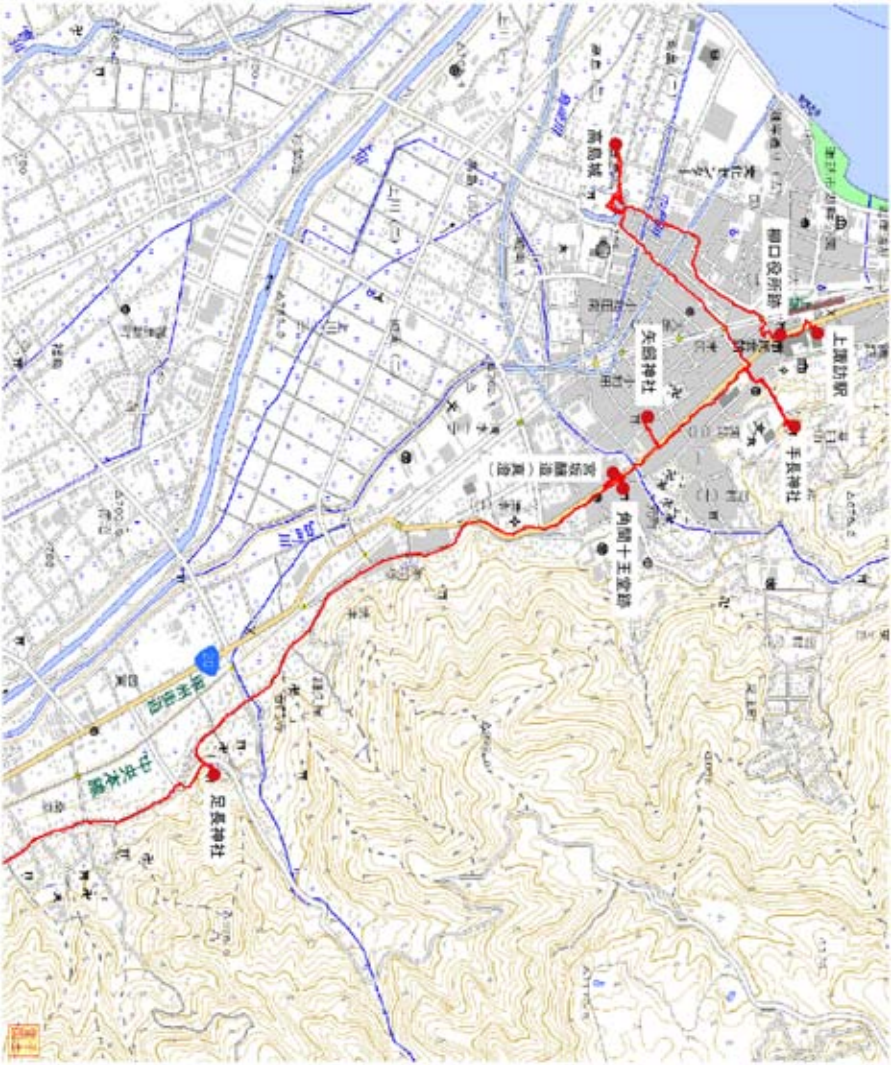
重修一里塚跡
とちの木風除林
尾片瀬神社
瀬沢古戦場跡
諏訪神社
奇石かぐら石
忠魂碑小休止
御野立所跡
平岡一里塚跡
川除古木
天皇御膳水
本陣大阪屋
十五社大明神
枡形道址跡
上蔦木三光寺

藤屋と木太郎孝城内家墓記念碑
高知県
高知県
高知市神戸一番路
神戸八幡社
旧家の石大門
神戸村の面影形跡
土佐町
土佐町役場
高知県
高知県

# 第 20 回　金沢宿～茅野駅


茅野駅
円筒形
御柱意上社木曳し場
茅野村の一里塚跡
大横坂石碑
諏訪神社
小体止め
御柱立つ石碑
茅野市

# 第21回　茅野駅～上諏訪宿


上諏訪駅
諏訪大社
千鳥神社
諏訪湖
諏訪湖畔
矢島神社
角間十王堂跡
諏訪湖畔（東側）
諏訪三
中央自動
中央自動
中央自動
足長神社

# 第 22 回　上諏訪宿～下諏訪宿

下諏訪町
甲州道中終点
諏訪大社下社秋宮
秋宮境内で昼食
ホテル山王閣
承知川橋
下諏訪駅
冨部の一里塚跡
明治天皇駐蹕址の碑
島木赤彦宅入口
承知川
来迎寺
武居
新町
湯田町
灰之町
大社通
久保
冨部
四王
湖岸
142

◇愛蟹笹子君

雨の笹子峠越えでした。山道でサワガニに何回か出くわす、その一匹を布にくるんで持ち帰った。水槽、砂利、ポンプなどを買い入れて、飼育観察し、小宮公園どんぐり通信に投稿する。

指を近づけるとハサミを振り上げる様が何とも言えない愛らしさがある。年寄りの癒しガニとして最高のお友達だ。一週間に一度水道の水を交換し、ペットショップで購入したザリガニの餌を与えて、丸一年間元気にしている。当初、三日も持てばと思っていたが、生命力に感心する。

◇笹子トンネル事故

我々が平成24年10月18日に笹子峠を越えた後のトンネル崩落事故でした。事故は12月2日に起こった。中央線で笹子駅あたりを通過すると中央高速で工事中の車が止まっているのを度々目撃した。後で考えると我々の歩いたあとの崩落ということで、関係付けてしまうとそうも言えるのだが、実際は一ヶ月半も後のことです。何年かあとになると我々が歩いた振動により崩壊したと後世に残ることを心配する。

## 編集・製本雑記

本誌発行の経緯は上巻で前述の通り中島さんの執筆を竹島さんが校正して配布される資料が発端でした。配布資料数を調べるとA4で定例の資料が百八十三枚、参考資料が五十枚、合計が二百三十三枚にもなった。

平均千二百文字にしてざっと二十八万文字になる。これら資料の作成や、事前調査、歩行データが不足しているとそのために歩いたり、旅人が参加できなかったコースを再度案内したり、場所によっては数回訪れていると聞き、この街道歩きを安全に楽しく、興味深く、リードして頂いた中島さんに感謝します。

写真は八千五百六十六ショットにもなったが三浦さんの写真も使っています。集合写真も途中から回数ごとの参加写真として撮るようになり、後半は二回も撮影したりして、ページ数が増えた要因でもある。

完歩できないことも考えて工程の半分、つまり11回目で上巻を完成させた。あとは下巻と補足の三部作と考えていた。

歩いた軌跡の地図も入れたい、補足資料も増加のため、補足も本文に加えて再編集し、中巻と下巻の三部作にした。

地図は中島さんから送られてくるＧＡＲＭＩＮのＧＰＳデータをカシミール３Ｄにより、軌跡が入った地図にして主な訪問ポイントを書き入れた。

ＧＰＳデータは各ポイントに緯度、経度、時間が入るので、その訪問ポイントは撮影時間で照合できる。

本誌編集ソフトはAdobe InDesign CS3を用いた。従来写真と文章を付ける程度の利用で改めて真剣に取り扱い説明書を読むことになる。一番の収穫は表の作成方法を理解したことだ。明治40年大水害の中巻26頁の表は普通の使い方、武田氏系図と諏訪氏系図は表の線を消して関係線は別に書いた。

上巻56頁までは写真もいろいろな大きさで挿入しているがこのあたりから上段や下段に三枚組で挿入すると文章の間に入れ込めることに気づきこの方式を多く使うようになった。

中島さんの文章も前半と大きく異なり、一人でも行ける様にと下見の行動が詳細に入り、文字数も増えてきた。

しかし、我々の行動に合わすように文章を一部変更したところもあり、ご容赦頂きたく、ちょい書きは◇印のあとに街道行状記のつもりで書いた。

上巻は富士フィルム株式会社の画彩を使用したが、紙厚みと画質が気に入らない。中巻、下巻の街道歩き記事にはエレコム株式会社の両面スーパーファイン用紙（0.13mm）を使い、また、旅人感想集と軌跡地図帳にはエプソン両面上質普通紙（0.12mm）を使った。簡単に本作りと考えていたがこんな大作になるとは「街道歩き」に感謝する。

# 甲州街道を歩く【下】
## （金沢宿から下諏訪宿）

### 参考文献


揺籃社　大高利一郎著「街道を歩く　甲州街道」、人文社「江戸東京散歩」、山川出版社「東京都の歴史散歩」、くにたち中央図書館「くにたちしらべ　ＮＯ．６谷保天満宮」、仏教辞典、講談社「堀　和久著　大久保長安」、山川出版社「神奈川県の歴史散歩（下）」、山川出版社「山梨県の歴史散歩」、HP　パパが歩く甲州道中地図、講談社「続日本紀（上）全現代語訳　宇治谷孟著」、吉川弘文館　山口 徹著「歴史の旅甲州街道を歩く」



寿会多摩支部ハイキングサークル

企画・竹島久雄
事前調査、案内、著作・中島征雄
写真・三浦繁雄
写真・竹島久雄
写真・チョイ書き・編集・印刷・製本・前北勝司

印刷・平成二十五年（2013）十一月二十日